〖宮城県芸術年鑑〗

令和５年度

宮城県

はしがき

令和五年度は、コロナ禍によって停滞していた県民生活や社会・経済活動が再び動き始めた年となりました。五月に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが五類へ移行し、文化芸術活動は、各地で再開や制限の緩和・解除が見られ、賑わいが戻りつつあります。直接触れる創造の体験や、地域の人々や仲間と交流できる文化芸術の魅力が、これまで以上に実感できた一年でありました。

そのような中、県では「県民ロビーコンサート」が十月に四百回を迎え、これを記念したスペシャルコンサートを開催し、御来場の皆様に感謝の気持ちをお伝えしました。また、宮城県美術館では、特別展「伊達政宗と杜の都・仙台」など、東北歴史博物館では、特別展「悠久の絆　奈良・東北のみほとけ展」や「古墳をつくる人びと　―はにわ工人、ハジベ君！―」などを開催し、多くの方々に展示をお楽しみいただきました。

このほか、宮城県美術館においては、施設や設備の老朽化対策や多様化する機能・役割に対応するため、六月から長期の休館に入り、リニューアルオープンに向けて改修を進めています。また、宮城県民会館・宮城県民間非営利活動プラザ複合施設においては、七月に基本設計と管理運営方針を策定し、施設の概要や方向性を示し、整備に向けた具体的な取組が進んでいます。

本年は、県政運営方針である「新・宮城の将来ビジョン」前期四年の最終年となります。県といたしましては、引き続き、県民の皆様がより一層芸術や文化に親しむことができる環境づくりに取り組んでまいります。

最後に、本年鑑は、宮城県の文化芸術活動のより一層の活性化を図るため、一年間の活動内容等の記録をまとめ刊行しているもので、今回で五十三巻目となりました。本書の刊行に当たりまして、御執筆いただきました諸先生をはじめ、貴重な写真や資料を御提供いただきました関係者の皆様に対しまして、心から感謝申し上げます。

令和六年四月

宮城県知事　村井嘉浩

芸術年鑑

もくじ

各ジャンルの動向

●総　論……足立　裕子……7
●日本画……大泉佐代子……12
●洋　画……大嶋　貴明……19
●彫　刻……日下　育子……30
●工　芸……川北　京子……44
●書……渋谷　青龍……57
●写　真……清水　有……68
●文　芸……篠沢　亜月……80
●洋　楽……小山　和彦……88
●邦楽・芸能

古典芸能……小塩さとみ……94
民俗芸能……小塩さとみ……98
三曲……宮澤　寒山……102
長唄……杵家弥登鈴……107
民謡……二代目　藤本　和夫……111
●演劇……鈴鴨　久善……115
●洋舞……高橋　厚子……126
●日舞……大須賀　豊……134
●茶道……児玉　宗睦……143
●華道……西村　一観……150
●メディア芸術……清水　建人……159
広域文化団体の文化活動記録……169
宮城県における文化行政の概要……185

〈おことわり〉本文に掲載されている方の敬称は原則として省略しています。

各ジャンルの動向

総論

新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが五月に五類に引き下げられ、社会を覆っていた自粛ムードに区切りがついた。観客が集まる音楽や演劇の公演も制限がなくなり、舞台芸術を気兼ねなく享受できるようになった。しかし、コロナ禍が三年余り続いた影響で、会員や観客が減り、厳しい運営状況が続く文化団体は少なくない。

県内では老朽化した公共文化施設がリニューアルの時期を迎え、長期休館が続く。大規模改修工事中の仙台市博物館（青葉区）や仙台銀行ホールイズミティ21（泉区）に続き、昭和五十六年に開館した宮城県美術館（青葉区）も六月に休館した。令和七年度に再オープンするまで、スタッフが県内各地を訪れるアウトリーチ事業を展開している。所蔵作品のレプリカを用いて学校で鑑賞会を開いたり、地域住民とともに創作活動を行ったりした。美術館に足を運びにくい遠方の地域の子どもたちにとって、アートの魅力に触れる貴重な機会になっていた。

市民オーケストラの宮城フィルハーモニー管弦楽団として発足した仙台フィルハーモニー管弦楽団は、創立五十周年を記念して、五～十二月、楽団ゆかりの指揮者や豪華なソリストを迎え、半世紀の歩みを振り返る特別演奏会を開いた。

七月、宮城県は宮城野区に二千席規模の大ホールを備えた新県民会館の基本設計を公表し、仙台市も仙台フィルの新拠点となる同規模の新音楽ホールを青葉区に整備する基本構想を策定した。県と市どちらも文化芸術の発信拠点となる複合施設建設を目指している。人口減少や高齢化が進む地方都市において、二つの施設の差別化と役割分担の明確化が課題になっている。また、公共の文化施設には、地域に開かれ、創作・表現活動を通して多様な人々が交流し合う場としての機能も求められる。県民・市民との協働をどう推し進めていくか。運営体制のあり方や人材の確保も検討課題になっている。

文芸では、仙台市の作家・佐藤厚志が一月に「荒地の家族」で第百六十八回芥川賞を受賞した。東日本大震災を題材にした地元作家による作品は、県民の大きな反響を呼んだ。

以下、各分野の活動の概略を述べる。

【美術】

宮城県美術館が六月から、改修工事のため長期休館に入った。リニューアルオープンは令和七年度中を予定し、新設される「キッズ・スタジオ」（仮称）に高い期待がかかる。県美術館は休館に対応する事業として、地域に出向いて創作活動の場を設けたり、学校への出張ワークショップに取り組んだりした。所蔵品を高精度デジタル画像で撮影し、精密に再現したレプリカの展示会も東北工業大学一番町ロビー（青葉区）で行った。

併設する県民ギャラリーの休館は、市民の創作発表の場の確保に影響を与えた。令和十年度中の大規模な新ギャラリーの整備が予定される新県民会館が開館するまで、現状のままとなる。

九月に開幕した宮城県芸術祭（宮城県芸術協会など主催）は六十回の節目を迎えた。コロナ禍のために見合わせていた茶会を復活させた。

河北書道展も七十回を迎えた。歴代審査委員長十人の作品が会場で紹介され、東北の書道の歩みを伝えた。

秋保の杜　佐々木美術館＆人形館（太白区）は開館十周年を迎えた。仙台・宮城の代表的な作家らが記念のリレー展に名を連ね、美術館の定着ぶりを示した。

市民の美術活動では、九十歳を迎えた仙台市の洋画家・渡辺雄彦が市内で個展を二回開催し、精力的に創作活動に当たった。宮城県芸術協会元理事長の大場尚文や、東北生活文化大学長の佐藤一郎も回顧展と位置付けられる個展を開いた。

枕木を使った現代アート作品などで知られ、宮城教育大学や東京芸術大学で教授を務めた現代美術家の高山登が、一月に七十八歳で死去した。

【音楽】

新型コロナウイルスの五類移行を受け、制限のないステージ活動が戻った。演奏会数も増えたが、一部の人気演奏会を除くと、遠のいた観客の足を引き戻すまでには至っていない。失われた三年を取り戻すための模索が続いている。

仙台フィルハーモニー管弦楽団は、前身の宮城フィルハーモニー管弦楽団時代から数えて創立五十周年を迎えた。定期演奏会、特別演奏会にゆかりの奏者や指揮者を招き、過去と未来を見据えたプログラムを展開した。世界的バイオリニストの五嶋みどりをソリストに迎え、五月に幕を開けた。元常任指揮者の円光寺雅彦や、桂冠指揮者のパスカル・ヴェロの人気は高く、在籍時を懐かしむファンの姿が印象的であった。十一月には、著名な作曲家の代表曲を取り上げる「名曲トラベル」、アニメの音楽に特化した「エンターテインメント定期」

の二つの新シリーズを令和六年度に始めると発表。地方オーケストラの意欲的な取り組みとして注目を集めている。

とっておきの音楽祭（六月）、定禅寺ストリートジャズフェスティバル（九月）も、制限なく開催された。仙台オペラ協会は九月にモーツァルト「ドン・ジョバンニ」を、仙台を拠点に活動する伊藤み弥の演出で上演。仙台クラシックフェスティバル（愛称：せんくら）は本県出身の千葉まりん（ピアノ）、伊藤圭（クラリネット）ら多彩な奏者を加え、九、十月の三日間、仙台市内で六十八公演を行った。宮城野区文化センターパトナホールを会場とした室内楽のシリーズ企画、「ミュージック・フロム・パトナ」は十年目のシーズンを数え、地域に定着した。

ソロ活動も活発であった。仙台フィルコンサートマスターの西本幸弘が十年続けた、ベートーヴェンのバイオリンソナタ全曲演奏会は最終回を迎えた。テノールの板橋健や、メゾソプラノの遠藤恭子ら在仙のベテラン歌手も存在感を示した。仙台市出身のジャズピアニスト・作曲家の秩父英里は、第四十回全国都市緑化仙台フェアのテーマソングを制作した。十月の全日本合唱コンクール全国大会では、青葉区の仙台市立第一中学校が宮城県勢初の金賞に輝いた。日本とベトナムの外交関係樹立五十周年を記念し、両国の音楽家でつくる「日越祝祭管弦楽団」の公演が十月、石巻市であった。仙台市のサックス奏者・熊谷駿は、仙台をジャズの盛んな街にする活動を始めた。

東日本大震災で亡くなった人々を悼み、モーツァルトの「レクイエム」を捧げる「3・11祈りのコンサート」は、県内の音楽家らの呼び掛けで平成二十六年に始まり、十年目の令和五年三月で最後となった。

楽都仙台をリードした人々の訃報が相次いだ。仙台フィルハーモニー管弦楽団元音楽監督の外山雄三（七月）、三月まで同団常任指揮者を務めた飯守泰次郎（八月）が亡くなった。

【文芸】

仙台市の佐藤厚志は、初のノミネート作品「荒地の家族」が一月、第百六十八回芥川賞に選ばれた。一～七月にかけて、河北新報朝刊「東北の文芸」面に受賞第一作の「常盤団地第三号棟」を連載し、朗報に湧く仙台の文芸シーンに花を添えた。

佐藤は第三回仙台短編文学賞の大賞受賞者でもある。令和五年の第六回大賞は、高村峰生（関西学院大学教授）の「あらゆる透明な」に決まった。四月の授賞式では佐藤のトークイベントも開かれ、祝賀ムードに沸いた。

同文学賞の第七回選考委員を務める伊坂幸太郎は、「殺し屋シリーズ」の第四弾となる長編小説「777　トリプルセブン」を十月に発行した。スピード感あふれる痛快な展開で、

変わらぬ本領を楽しめた。

仙台文学館（青葉区）の館長を務める佐伯一麦は、小川洋子との共著「川端康成の話をしようじゃないか」を刊行し、深い洞察に共感の声が上がった。

仙台文学館前館長で柴田町出身の歌人・小池光は、歌集「サーベルと燕」で第四十五回現代短歌大賞と第三十八回詩歌文学館賞を受賞。日々の暮らしを繊細に表現する作風が高く評価された。

仙台市出身の山野辺太郎は、小説「こんとんの居場所」を発表。奇想天外なストーリーと軽妙な筆致で、独特の死生観を描き出した。

東松島市出身の前川ほまれは、「藍色時刻の君たちは」が山田風太郎賞に輝いた。ヤングケアラーの成長と被災地の復興を重ね合わせて書いた力作で、さらなる飛躍が期待される。

平成二十九年に第百五十七回芥川賞を受賞し、現在は仙台市に暮らす沼田真佑は、受賞第一作となる短編集「幻日／木山の話」を六年ぶりに刊行した。生きづらさを抱えた主人公の心象風景を詩的に紡ぎ、存在感を示した。

青葉区の仙台フォーラスに三月、新刊書と古本を扱う「ブックスペースあらえみし」が一年間限定でオープンした。地元の出版社、荒蝦夷が運営し、各地の出版社のブックフェアや旬の作家を招いたトークイベントを開き、読書家たちの貴重な交流拠点となった。

十一月には、直木賞作家の伊集院静が七十三歳で死去。平成八年から妻の出身地である仙台市に暮らし、令和二年にくも膜下出血で倒れたが、晩年まで旺盛な執筆を続けた。

【演劇】

コロナ禍が落ち着きを見せ、この間に蓄えたであろうエネルギーを解き放つ作品が目立った。

平成十四年開設のせんだい演劇工房10-ＢＯＸ（若林区）は九、十月、「20＋1周年記念事業」を展開。札幌、仙台、名古屋の各市を拠点とする演出家・俳優がそれぞれチームを作り、戯曲「異邦人の庭」を競演する企画などを通じて演劇の奥深さを伝えた。

劇団「OCT/PASS」を主宰し、平成二十四年に亡くなった劇作家・石川裕人の回顧展が、十月から十二月にかけて仙台文学館（青葉区）であった。トークイベントや作品の公演を行い、せんだい演劇工房10-ＢＯＸの誕生にも尽力した足跡を偲んだ。

地元に軸足を置いた作家の意欲的な新作も多数登場した。大河原準介の「悪魔の証明」（七月）、文月奈緒子の「ふかくうずめる」（九月）、真田鰯の「エデン５２１」（十一月）、箱崎貴司の「テロリストのラブレター」（十二月）などが注目

を集めた。渡部ギュウ演出の「ギラギラの月」（六月）・「組曲虐殺」（九月）は、若い俳優の躍動感あふれる演技が可能性を感じさせた。演劇に携わる大学生のプロデュース企画「桜の園」（十二月）も前向きな姿勢が伝わった。

仙台市内の飲食店で行われた朗読劇「仙臺まちなかシアター」（一般社団法人東北えびす主催）と、入場料五百円の「みやぶんワンコインシアター」（宮城野区文化センター主催）は演劇を一層身近に引き寄せた。

宮城県内の演劇コンクール「伊達の劇王」は「利府町民劇団ありのみ」が優勝。石巻市に令和四年八月にオープンした劇場型複合施設「シアターキネマティカ」は、地元に根差した演劇の公演、初心者向けワークショップなどを開催し、交流拠点としての機能も十分に発揮した。

せんだい演劇工房10-BOXの初代工房長を務めた熊谷盛が四月、八十三歳で死去した。老舗劇団「麦」を長年率い、仙台演劇界を支えた。

【宮城県芸術祭賞】

第六十回宮城県芸術祭（県芸術協会・県・仙台市・河北新報社など主催）の最高賞・県芸術祭賞は次のとおり。

絵画部（日本画）「夜さり」數本冴英佳
絵画部（洋画）「ハナミズキの頃」中島みどり
工芸（染織）「花の降る」長瀬和子
彫刻「Hi・no・ma・lu 2023」畠山卓也
書道（漢字）「朱彝尊詩」江村耕芳
文芸（川柳）「アテンション」菅野實
写真「吹雪く朝」山本かつい

【令和五年度宮城県芸術選奨及び同新人賞】

受賞者は次のとおり。

芸術選奨
美術（工芸）岩井純
美術（書）小日向慶可
美術（写真）海老名和雄
文芸　佐藤厚志
音楽　西沢澄博
演劇　伊藤み弥
芸術選奨新人賞
美術（洋画）山内文貴
美術（彫刻）佐野美里
メディア芸術　鈴木竜也

足立裕子（あだち ゆうこ）
（河北新報社前生活文化部長）

日本画

未だにロシア・ウクライナの戦争が続き、終わりが見えない。ほかにも世界のあちこちで紛争が起きており、エネルギー不足による経済の不安定で、これから世界はどうなるのか。互いに助け合い、平和に暮らすことはそんなに難しいことであるのだろうか。人間としての在り方を考えさせられる。そのような中、美しい景色を彩る植物は、東の間の幸せを与えてくれる。

第七回新日春展入選者

天笠慶子「つるがらみの中から」
熊谷治子「星降夜」
奥山和子「よんで！」
小泉百合子「明日への伝言」
酒井美雪「ながい午後」
新藤圭一「うらら」

第七十八回春の院展入選者

佐々木啓子「冬名残り」
川村香月「春待ちて」初入選

第八十四回河北美術展

（五月十二日～二十一日　ＴＦＵギャラリーミニモリ）

審査員の橋本弘安先生は、作者の創作のメッセージをあらかじめ聞いてから審査を行った。出品者にとっては直接、意図を伝えられる機会となり、喜ばしいことであった。

入選者

河北賞「山河明ける」新藤圭一
宮城県知事賞「プロローグ」荒井静子
一力一夫賞（小品枠）「あまた、さきつぐ」中邨圭子
一力次郎賞「彩を奏でる」阿部志宇
東北放送賞「善の交叉」石堂智子
宮城県芸術協会賞「昼下がり」高杉つぐみ
東北電力賞「起源―景―」佐藤健太郎
東北福祉大学賞「静寂」菊地禮蔵
新人奨励賞「光望」東脇佳菜
審査員奨励賞「振り返れど」畑中孝實

奨励賞（小品枠）「再生」谷地森真理子
賞候補「晩秋乃華」大槻勝美
「雪の駅」小野寺康
「慈恩寺（三重塔）」後藤繁夫
「静かな日」澤瀬きよ子
「鉄魚遊泳」庄子幸一
「海鳴り」和田正弘

受賞した方々の年齢層には幅があった。内容においても、写実的なものから抽象的なものと興味深い。河北賞・宮城県知事賞・一力一夫賞の作品は、いずれも繊細で、丁寧で、深みがあり感心させられた。これからの活躍が楽しみな作家たちである。

河北賞「山河明ける」新藤圭一（提供：河北新報社）

一力一夫賞（小品枠）
「あまた、さきつぐ」中邨圭子
（提供：河北新報社）

宮城県知事賞「プロローグ」荒井静子
（提供：河北新報社）

一力次郎賞「彩を奏でる」阿部志宇
（提供：河北新報社）

lyricism ～或る日のアトリエ
熊谷融★熊谷理慧古日本画二人展
（五月十八日～六月三十日　坐カフェ）

人物・花を中心に金箔や金粉を効果的に使い、味のある絵に仕上げていた。両氏は、仙台アトリエクマガイ藝術学院を主宰し、日本画の活動を広めている。今後の活躍を期待している。

河北美術展河北賞受賞記念
新藤圭一展
（七月十日～三十一日　高倉勝子美術館）

新藤氏は、故・高倉勝子先生に師事し、日本画を学んできた。河北美術展初入選から二十三年。入選十回、入賞四回とすばらしい活躍である。

展示された作品は、どれも丁寧で細やか。また、自然への感謝と優しさに溢れていた。新藤氏の益々の活躍を期待する。

及川尚子　日本画展～学校ばんざい～
（八月四日～九日　せんだいメディアテーク）

三十八年間勤めた小学校教員の定年退職。これを機に、教員生活や絵画活動を支えた方々への感謝の気持ちを込めて開催された展覧会である。

作品は、学校での様々な風景を捉え、教員目線で描かれた教室や下駄箱、児童の表情には感動を覚えた。及川氏は、絵画の活動においても多くの展覧会で入選・入賞を重ね、現在は日展で活躍中。新しい生活では何が見えてくるのだろうか。今後が楽しみである。

川村妙子　日本画展
（九月十九日～二十四日　仙台アーティストランプレイス）

河北美術展や宮城県芸術祭において入賞経験のある川村氏は、石巻市牡鹿半島出身。身近で大切な存在を貝殻をモチー

フに描き続けている。シンプルであるが優しさが滲む世界であった。

山田伸展　日々を紡ぐ

（九月二十日～二十五日　日本橋三越本店（東京都））

宮城県出身の山田伸先生は院展の同人であり、これまで仙台市でも個展を開いてきた。私は、その作品に魅せられたうちのひとりである。

今回の個展は、氏の生活圏である京都府の豊かな歴史と美しい自然を感じたままに描かれていた。作品は、薄く塗り重ねることによって表現する岩絵具の質感の美しさと余白のバランスがすばらしく、心に響くものがあった。

第六十回宮城県芸術祭絵画展（公募の部）

（九月二十三日～二十六日　せんだいメディアテーク）

ほかの部門と比較すると、やはり出品点数は少なかった。日本画は、油絵や水彩画といった作品との見比べが難しい。その中で、日本画では奨励賞として「記憶のかけら」が選ばれた。

入選者（日本画のみ）

奨励賞「記憶のかけら」　髙橋則子

第六十回宮城県芸術祭絵画展（会員の部）

（九月三十日～十月三日　せんだいメディアテーク）

宮城県芸術祭賞受賞作品の作者、數本冴英佳氏は、油絵の世界から日本画の世界に入っている。色や形にとらわれず自身の感情を素直に表現し、日本画とは思えない画期的な絵を完成させた。宮城県知事賞受賞作品の作者、佐々木智朗氏は、緻密に森の大樹を豊かに表現していた。作者の更なる飛躍が楽しみになる作品ばかりである。

入選者

宮城県芸術祭賞「夜さり」　數本冴英佳

宮城県知事賞「森の大樹」　佐々木智朗

仙台市長賞「浄化」　小泉百合子

河北新報社賞「豊潤」　門間光子

宮城県教育委員会教育長特別賞「蝉の声」　山本政彰

（公財）仙台市市民文化事業団賞「早春譜」　荒井静子

（公財）カメイ社会教育振興財団賞「希望の詩」　菅井粂子

賞候補「飲みすぎ注意」　藤田裕美

「緋色の刻」武地美枝子

宮城県芸術祭賞「夜さり」數本冴英佳
（提供：河北新報社）

第七十六回塩竈市美術展

（十一月七日～十二日　ふれあいエスプ塩竈）

今年も一般の出品点数が十二点と少なく、寂しい限りであったが、動物・植物・人物・風景と各々に味があり、楽しく拝見した。

塩竈市美術展賞の作品は、人物を中心に豊かで優しい森の表情が描かれ、どのような夢を見ているのだろうと創造が膨らむ。塩釜市芸術文化協会長賞の作品は、点描で丁寧に仕上げられていて驚いた。来年はより多くの作品に出会いたい。

入選者

塩竈市美術展賞「眠りの森」　酒井美雪
塩竈市教育委員会教育長賞「魅せられて」　熊谷真由美
塩釜市芸術文化協会長賞「塩釜神社夏まつり」　桂儀一光
塩竈市生涯学習センター審議会委員長賞「夜明けの詩 '23」　山本政彰
塩竈市議会議長賞「ロバ」　河野京子
ＮＨＫ仙台放送局長賞「花車」　髙橋則子
杜の都信用金庫理事長賞「尾瀬の春」　畑山みさ子
日本画奨励賞「そのパンダ・微笑」　鈴木ちひろ

第六十回宮城県芸術祭絵画展受賞者作品展

（十一月二十日～二十六日　東京エレクトロンホール宮城）

野田陽子日本画個展「おとのふるにわ」

（十月二十一日～十一月三日　金蛇水神社）

佐藤朱希日本画展

（十一月三日～十二日　スマートシップギャラリー（東京都））

山口裕子日本画展ーやまのほっぺー

（十一月三日～十二日　恵埜画廊（山形県））

數本氏の自由なかたちと色彩の面白さは、新しい日本画として注目されそうだ。佐々木氏、菅井氏は、自然を見つめた丁寧な仕事をしている。小泉氏の人物画は、メリハリがある。荒井氏の「潜」に描かれた水面の桜の花びらは印象的である。皆、力のある作家であり、今後も日本画文化を引っ張る存在であることを願う。

第三十一回宮城シニア美術展（日本画の部）

（十二月二十三日～二十五日　せんだいメディアテーク）

昨年から会場が変わり、広くなったことに加え、出品点数も増加したことから、見応えがあった。例年、奨励賞は三点とされていたが、一点のみとなった。

最優秀賞の作品は、雄大な山々を堂々と描かれた気持ちの良い作品であった。優秀賞・奨励賞の作品は、情景から優しさが感じられ、記憶に残る作品であった。

入選者

最優秀賞「雄偉」梅本文子

優秀賞「夕ぐれの小川」大場千代子

奨励賞「秋探し」木塚和子

最優秀賞「雄偉」梅本文子

酒井美雪作品展「星と水と」

（十二月二十二日～二十七日　せんだいメディアテーク）

令和四年度宮城県芸術選奨新人賞の受賞を記念した個展。河北美術展や新日春展、日展などで入選した作品が展示されていた。ある作品は愛犬への思いを表現されており、思わず目が潤んだ。更なる大躍進が期待できる作家である。

第十回日展

入選者

荒井静子「水中会議」

奥山和子「明日」

会員

佐藤朱希「薔薇編む日々」

「薔薇編む日々」佐藤朱希

かくして令和五年の動向を振り返っていた令和六年元日、石川県で大地震が発生した。このニュースと同時に、十三年前の東日本大震災の記憶が脳裏をよぎった。当時、私は被災地の情景を目の当たりにし、「残さねばならない景色」と感じて必死に絵を描いたことを思い出した。現在に至り、当たり前に日本画を描けるようになったが、このありがたみを決して忘れてはならない。

大泉佐代子（日本画家・宮城県芸術協会会員）

洋画

この小論の初めに、基本的なことを確認しておこう。

「純粋な美術性」を優先してこれは書かれる。つまり、取り上げる作品や動向・状況や作家について、選んで書く。悉皆ではない。現実には、「ファインアート」であることは曖昧になっているが、それを可能な限り探りながら書く。

レイトモダンという時代では、「個人の表現イメージ」と「造形性」の互いに還元できない二つの要件の組み立てによって作品は成り立つと考えられた。ただし、この二つの要件は、美術領域の内部性に収斂しやすい。（世界的には）この四十年ほど、これらの内部的な二要件ではなく、美術の外部性でもある、もう一つ別の要件が提示された。それは、ポストモダンな現実世界の「社会性や空間的・時間的・人的あるいは自然的な広がり。またはその形成過程」である。（誤解のないように書いておくが、個人性に対する社会性は、社会的なメッセージの直接性やプロパガンダということだけを意味しない。）

例えば、風景画制作の前段階でスケッチという方法がある。第三の要件上での制作過程では、スケッチではなく、それも含む「リサーチ」と呼ばれる方法がとられることが多い。内的な組み立てではなく複雑な外部をどうとらえるか、それが方法を決定する。

もう一つだけ確認しておくと、可能性としての「ファインアート」は、文字通り三つの要件があることによるのではなく、そのどの要件もが、既存の状態から「拡張状態」にされること。つまりは、自分が慣れたものだけでは世界は成立してはいない。ましてや、自分の決めたルールだけではない。そして、その表現形態は、単一の形式やメディアに縛られない。「洋画」というものが、日本の近代美術百年の構成形式だとすると、ファインアートとしての絵画は、その外へ向かう姿勢と働きにしかない。それは、形式、メディアあるいはジャンルやスタイルの互いの互いに対する優越ではない。

倉科光子「ツナミプランツ」
〈企画展〉「ここに根をはる　津波のあとの植物たちとその環境」

会期：三月二十五日〜七月十六日
会場：せんだい3.11メモリアル交流館

「ツナミプランツ」の作品群は、一見、伝統的ボタニカルアートのように見えるが、その場に提示されている言葉や展示されている場からは、ボタニカルアートの文脈だけではない別の文脈も持っていることは自明である。例えば、作品に添えられた倉科のテキストにもあるように、ある作品に描かれる堆積している落ち葉は二〇一一年の落ち葉であることを見て取ればよい。そして、倉科は意識的に丁寧にタイトルやテキストの言葉を選んでいる。決定的なのは作品タイトル。例えば、《35°36′38.1″N 139°27′38.0″E》は、作品がどこに向けられ、どこに着地すべきかを示している。

今回の展示作品の中で、特に注目すべきものは、植物個体を描いたものよりも、群れやその環境の情景を描いたものである。津波によって、生態系もリセットされたのだが、それまでとは違った遷移していく生態系が生まれ、植物の生命力を際立たせ変化していく。この現象に対して、特権的にその場の印象を切り取る、つまり、印象派的・感性的・絵画的方法ではなく、「図」性の高い、かつ瞬間性でなく長時間的な普遍化のための方法を「ツナミプランツ」の作品はとったと言えるのではないだろうか。

私たちは東日本大震災以降、それに関連する多くの作品を生み出し、見てきた。その中で、少数かもしれないが「別の共感」と言うべき「リサーチ・記録・表現のアルタネティブ」も生みだされていたのではないだろうか。

AONO Fumiaki art exhibition

会期：十月七日〜十二月五日
会場：仙台フォーラス一階　広瀬通り側入口近く

令和五年の青野の発表のうち三か所を見たが、この小論では、フォーラスで行われた展示を主に取り上げる。

十分な大きさの立体作品一点（その他に小立体三点）と、その作品に関連したドローイング五点による展示は、別に特別な展示の仕掛け（通常の展示の配慮は十二分になされていた）があったようには見えなかったが、あの商業空間を転用した場において、みごとに過不足のないクリアな展示になっていた。主作品の物理的大きさも適切で、オブジェ的でもインスタレーション的でもなく、立体性が（しかし、現象的平面性も失わず）強く打ち出され、青野の方法論として扱われてきた物とその変形、復元が旋回する動性をもって表現され、そのことがファッショナブルなスペースの中で、独自性を放っていた。

このような、ファインアートとしての作品を際立たせる独自性は重要である。フォーラスの七階には「TURN

ANOTHER ROUND」というギャラリーがあったわけだが、一階で青野の作品を見て七階まで進む間に、認識するかどうかは別だが、相当多くの数え切れないほどのアート、アート作品、アート的なもの、アート系、デザインされた空間や商品などを見て進む。その視覚的刺激の連続の中で、青野の作品はファインアートとしての存在を確立していた。このことは、手法や素材が素朴といえる青野の作品の在り方も強く関与しているが、閉鎖的ではなく、どこか開放的な作品形式も力になっているのだろう。オフ・ミュージアムあるいはオフ・ギャラリーでの展示は、その場がノイジーであることが問題ではない。作品をとりまく事物と作品それぞれの形成性と、存在理由や質のある空間や物体に囲まれ、その中で、ポジティブにファインアートの質を見せることができるかが問われ成功している。

また、この展示では、五点のドローイングが展示されていたが、そのドローイングの画面の左側と下側に、画面の端を示す線が描き引かれていた。普通は、余白が大きすぎたり、画面内での描く位置がずれたりした場合に引かれ、造形思考を確認させるものだが、このドローイングの場合はどうだろうか。通常の意味もあるのかもしれないが、ここでは、画面内空間が、用紙の物理的平面性に担保されるだけではなく、もう一つ別の空間にずれこんでいる可能性を持っていたようにも見える。別の世界をも取り込むことで、世界認識の多重性を表象する。そのことに関わっている。

青野の残り二つの展示を挙げておく。

青野 文昭 展　未来の復元・迷走する時間
―かつて仮構された街のチラシ欠片から―　1996 ~ 2011 ~ 2023

会期：九月七日～二十一日
会場：Gallery TURNAROUND

秋保の杜　佐々木美術館&人形館　10周年リレー展　青野文昭 展　彷徨う欲動―幽霊船―地球の裏側から帰還した人々 1613-2023（慶長遣欧使節―サン・ファン・バウティスタ号（模型）の廃材から）

会期：八月十六日～九月十日
会場：秋保の杜 佐々木美術館&人形館／美術館一階展示室

令和五年に限らず近年の特徴の一つとして、「〇〇美術館」という中・小の施設が、私設・公立を問わず、定着し着実な活動が行われている。その一つに、「秋保の杜、佐々木美術館&人形館」の十周年が挙げられる。まずは、そのことに敬意を払いたい。

公設のギャラリーと違った「美術館」の特徴には、常設展

つまり収蔵品の有無もあるが、むしろ、展示期間の会期が六日間ではなく二週間以上とられていること。また、強度はさまざまだが、企画性をもっていることである。そのことが、市民ベースでもなく、作者のイニシアティブでもなく、ましてや設置者主導でもなく、キュレーションがどのように公共性の形成に参加し、新しい地平を切り開いていけるか。単なる貸館や公募制などとは違った公共性形成が必須であることを付け加えておきたい。「美術館」と名乗る施設の役割の一つである。（活動している施設は全県で散見されており、なかなか全てを見ることは難しい。ご容赦願いたい。）

ふるさと美術館企画展　北上ちひろ個展　「ここにある物語」

会期：五月十八日～六月十二日

会場：大衡村ふるさと美術館

北上は、多くのグループ展などでの発表があるが、大衡村ふるさと美術館でのボリュームのある個展を初めて実見できた。

大きな作品は大変刺激的なものであった。それぞれに異質な空間がぶつかり合っている作品内空間の中間領域に大きな色面（他とは明度が違っていることが多い）があり、その色面を境界として、作品内の空間が二つの領域が分離される。彼女のテキストに従えば、「カーテン」だろうか、その色面によって包み込まれた内側の領域（手前）と、外とに（奥）分かれ、親密空間を創りだしている。親密空間には、部分的に普通の絵の具とは違った素材が使われていることもあり密度を高くしている。と、簡単に言いきれないのは、例えば、カーテンを境にしたうちそとは、作者によって決定されない。近代絵画の大事なモティーフの一つ、室内風景を主題とする作品、例えば、マチスやボナールの多くの作品では内外が分かりにくいように、北上の作品でも、内部と外部は一義的ではなく見える。内が外に入れ替わり、外が内になる。私が評価するのはこのことである。小品では、美しく完成度も高いのだが、画面が小さいためか空間性は単一で、したがって、作品世界は親密なデコラティーブなものに収斂している。大きな作品では、その空間の複雑性が空間の性格を決定させない。これは、可能性ではないだろうか。

親密空間の表象ということで、限界があった作品の発表もあったことを簡単にふれておきたい。ベテランが毎年着実に積み重ねていた作品群をまとまって展示していた個展では、多くの作品は一貫したものだったが、（私には親密空間の中にいる自己投影的人物像を中心にしたように見える）、描出された空間は単一に見え、親密さという内容と攻撃的な絵画形式とがミスマッチをおこしているようにも感じられた。形

式性と内容の不一致は、作者の内的イメージの表現に収束して、芸術性の限界となっていく。

リサーチのもと、かつ企画性の強い作家活動を挙げていく。

佐竹真紀子個展「ひびへのトレース」

会期：八月二十六日〜九月十七日

会場：ビルド・フルーガス（塩竈市）

〈本多工房アーティストシリーズ　WORKS BY SATAKE MAKIKO〉

会期：八月二十七日〜九月十七日

会場：本多工房（塩竈市）

ひそやかな発話に丁寧に寄り添い、それに基づいた繊細な作品。色面の形成と、彫りだしと研磨という独特の技術を使っているという。過去の《偽バス停》のもつどこかあっけらかんとしながら、パフォーマティブな効果の高い作品に比べると、微妙な感性認識とテキストが形成のカギになっているかのようであった。

浅野友理子展「つづり思考」

会期：四月二十二日〜八月二十日

会場：風の沢ミュージアム（栗原市一迫）

単なる植物画とは違って、浅野の作品は、植物と人的営みとの関わりを探り、それをある種の図性を持つ高いインパクトの強い絵画としている。

N.E.blood21　vol.82　田中望 展

会期：五月三十一日〜七月十七日

会場：リアス・アーク美術館

田中のリサーチ活動は、関与性と体験性が強いものではないだろうか。そこでは、地域の現在への単純な参加というよりは、その場の現実形成の多重性を解きほぐし、歴史的にも構造的にも研究されている。当然、出力されるものは、絵画だけでも、アートだけでもないかもしれない。前世代のアーティストだと、コロニーをつくる事でアートと生活の一体化を図った場合もあった。しかし、それと異なり田中は、地域や生活の根底にある構造・制度にも関わって、地域に開かれていくのかもしれない。作家活動の中心をなす絵画においては、民俗学というべきなのか、地域な歴史的・文化的現象を透して構造的な物語を表現しているようだ。そこでは、生成と破壊、聖と性、暴力と愛などが混在する画像が表れ、単なるユートピアの夢物語とも違った想像的世界が多重な位相で展開している。そして、同時に展示されるテキストや事物、映像は多種の喩によって場のリアル形成にせまっていく。

田中の作品には、「ユーディストピア」を生きなければならない私たちへの可能性の提案がある。

一方で、ユーディストピアならぬユートピアもしくはディストピア的幻想表現には限界が生じてきてはいないだろうか。ある公募展で、評価を得たユートピア的世界表現の作品があった。丁寧に描かれ、独自のスタイルを持ったそれは、好ましいものだったのだが、しかし、この作品が表象しているのは、生態系のリアルではなく、単一の相にあるイメージのように見える。そのため、作品世界は個人の趣味的な世界に退行していっているのではないだろうか。この収斂はファインアートにたどり着かない。強固な内的幻想の絵画化は、それだけでは美術の可能性には達しない。

近年、遺族だけではなく、コレクターや近しい作家や影響を受けた作家による、様々な規模・形式での、没後回顧展や遺作展も行われた。

SARP short short piece/Noboru Takayama memorial

会期：二月三日～十二日
会場：仙台アーティストランプレイス

TOJU　生誕　誕生　1953-2021

第一期：七月十八日～二十三日
第二期：七月二十五日～三十日
会　場：Gallery TURNAROUND

仙台時代の村上善男―村上善男とギャラリー青城―

会期：七月二十五日～八月六日
会場：仙台アーティストランプレイス スペースA
企画／浅利治

阿部邦利回顧展

会期：八月二十六日～三十日
会場：せんだいメディアテーク五階ギャラリー

鈴木登遺作展

会期：十月十一日～三十日
会場：クラフト木村（大崎市古川）

また、ベテランによる回顧展や近作展も目立った。この状況には注意すべきことが一点ある。発表している作家がベテランだからネームヴァリューも力があるのも当然なのだが、発表作品が、それまで自己が真剣に追及してきたものから外れて素朴なものにもどる、そして、その素朴さによってポピラリティがあって評価する／されるのは、どうなのだろうか。それまでの人生を賭けた追及はなんだった、ということにならないだろうか。

そのこととは違い数多くの発表とは異質の状態を提示していた展示もあった。

「フリーダムライン」　佐々木健二郎個展

会期：四月二十五日〜三十日

会場：宮城県美術館県民ギャラリー

長く、ニューヨークで美術家活動をしてきた作家の近作を中心とした大規模な個展。完成されたスタイルをもった大きな作品が並ぶものであった。展示される作品の作家性のブレの無さは、五十年以上の彼の地での作家活動によるのだろうか。あるいは潜り抜けてきた時代によるのだろうか。スタイルの完成が現在という文脈に対して結果的に閉塞しているのかもしれない。

山内文貴展その21　THINCOSMOS（シンコスモス）

会期：七月十八日〜二十三日

会場：仙台アーティストランプレイス スペースA

以前の個展を連続的におこなっていたころの作品に比べると、近年の一年に一回ペースの個展では、作品にどこか既視感というかやり終わり感が付きまとっている。そこでは、素朴な自分に近しい形式を楽しむ、なのか。神経症的な既存の作品形式への不信からなのか。より、戦略的なポストフェスティバルな状況に対抗する方法論なのか。いっそうの形式生成力を求めていきたい。

企画展一ペロンミ個展　ペロムナード

会期：十一月八日〜十九日

会場：Gallery TURNAROUND

インデペンデントな作品でキャラクターを扱っていく場合、やむにやまれぬ表現欲求と、ある意味、外部的な制度（スタイル）に対して持つ不信を感ずることがあるが、ペロンミの場合はどうだろうか。ものすごい数のドローイングからタブローまで展示されている（作品リストによれば91点）作品の場合、地と図に分けたとき、一見、地＝無意識層＝色彩層、図＝ドローイングによるキャラクターに分けられ、地の上に図が重なっているかに思える。しかし、この図式どおりではなく図によって地が規定されることがあり、単純に、意識／無意識とか、絵画のレイヤーが一義的に決定されない。このことは、優れた絵画形成のセオリーに合致し、また、「不信」や「諦念」とだけとは言えない可能性をはらんでいるのかもしれない。

幾何学的で抽象的な作品の発表にいくつかふれておきたい。

【アナランヘ会場】Hiroyuki Murakami Exhibition/Flat Image Limited

会期：五月十三日〜二十五日

会場：TURN ANOTHER ROUND-2　仙台フォーラス七階 even 内ギャラリー

シャープで優れた感性をもつ作家が、平面やレリーフ状のデリケートな組み合わせを、空間に構築している作品。抽象度は高いのだが、おそらく村上は外部の状況に対する関心も無視はしない。その葛藤が、デザイン的なジオメトリカルなものに終わらせない。追及はこれからである。

企画展―三上秀夫 個展「色面構成 ―同一平面上の奥行について―」

会期：六月二十日～七月二日

会場：Gallery TURNAROUND

【アナラン会場企画展】「Satoru Sato Exhibition-drawing / printing」

会期：九月二日～十四日

会場：TURN ANOTHER ROUND　仙台フォーラス七階 even 内

美術のスタイルとしての、抽象と具象という二分法での「抽象」ではなく、認識論的な「抽象と捨象」を問うたとき、「世界原理は幾何である」という言明はアクチュアリティをもつだろうか。捨象された事物の側にも世界性はある。とすれば、幾何的なスタイルも趣味的なものであってはならない。

企画展―佐々瞬個展「追廻住宅の石碑、その空洞」

会期：十二月十五日～令和六年一月十四日

会場：Gallery TURNAROUND

「追廻住宅」をテーマとして、リサーチ・実践の場として使い、そしてオフ・サイトである美術の場での何度目かの発表のまとめ的なものなのだろうか。

切り分けられた「公と私」が「追廻住宅」の成り立ちからその終焉まで、さまざまな葛藤をつくりだし、公による私的な生活の疎外を発生させてきたわけだが、そこに深く身体的に関わる佐々の営みは、私的な「美術」の営みではなく、「個」としての、類や群れの都合におさまらない。「なにか」をつくりだす。といっても、実際の生み出されたものは、シニカルでも崇高でもあったりするが、あっけらかんとしていたりもする。作品は、制作されたものとして虚実の振幅が大きいほうが高い質をもち得ると思う。現実の事物と一対一対応の「それそのもの」ではなく、現実との差がありながら、時間的・空間的広がりのある世界を表象できる「喩」の力が必要であり、佐々の作品には、その多様な喩の力が身体的バイブレーションとともに高い表現性を感じさせる。

付け加えておくと、佐々の近作には、絵画形式もしくは絵画形式を利用したものが増えているように見えるが、その素

材や技法あるいはイメージの合わせには、コラージュの枠組みを超えた強く身体的な感触がやはり働いていたことに注目しておきたい。

最後にいくつかのことを付け加えておきたい。

例年おこなわれる大型の展覧会も、一定の役割はあるものの、ファインアートの状況としては厳しい。特に、その出品規定のあり方は作品の形式を外部にゆだねることによって、「個」の持つファインアートの可能性を狭めてきている。

川俣正の《**石巻タワー**》の顛末は記録しておくべきなのではないだろうか。美術に対する公的資金の投入に関しての必要性や必然性とその節度、外部効果による変質の是非など、検討すべきことは多い。

ファインアートの要件が二つから三つになったことは、パラダイム転換といってよい。それは、今、生きている現実社会は一筋縄ではいかない、善悪や正邪ですら、そう簡単には判断できない複雑な世界になっているから、ではないだろうか。もう少しいえば、判断できる状態にない事物や制度、関係のほうが世界を成り立たせて入るようなのだ。

作品や美術活動で目に付くコメントに、「日常性から…」あるいは「身近な…」または「生活から…」というものがある。リサーチにおいても、そのような目の前の「今、そこ」的あるいは地域的、体験的認識の優位は語られやすい。しかし、現実世界は、身の回りの世界だけでできあがってはいない。ではその「今、そこ」では捉えられない不可視の事物や制度や関係は、認識可能なのだろうか。

世界は身のまわりと慣れたものだけではできていない。だからこそ、理解不能性・認識不可能性からはじまるのがファインアート・芸術ということであり、共感度の高さとは無関係な、制度に従順でもない「個」からはじめるほかないものだと思う。公共圏の再構築は屹立した個からであって、趣味的な私ではない。

大嶋貴明（画家）

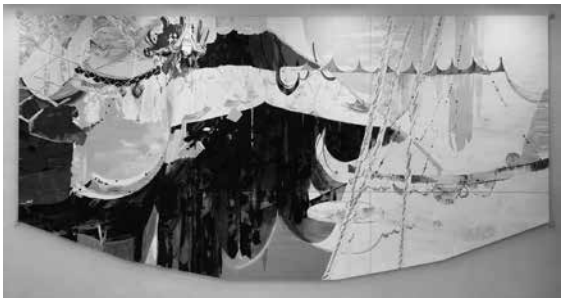
倉科光子
《 38°13′51″N 140°59′42″E 》
2022 年～（未完）
500 × 840mm　紙、透明水彩

倉科光子
《 35°36′38.1″N 139°27′38.0″E 》
2010 ～ 2015 年
540 × 745mm　紙、透明水彩

青野文昭
《なおす・代用・合体・連置―「山ー足のある風景」（震災後の若林で収拾したトタンより）2015》
2015 年　h 220 × w 180 × d180㎝
収拾物、中古家具、合板、木材、アクリル系絵の具（ミクストメディア）

青野文昭
《なおす・代用・合体・連置―「山ー足のある風景」（震災後の若林で収拾したトタンより）2015 のためのドローイング（小ー 1）》
2015 年　515 × 362mm　ミクストメディア

ペロンミ
《Endless Rain》
2023 年　428 × 530mm
木パネル、ジェッソ・鉛筆・色鉛筆
撮影：小岩 勉



北上ちひろ
《きらめきの在処》　2013 年
2700 × 5460mm　木製パネル、綿布、アクリル・油彩・木炭・金粉・ラメ

N.E.blood 21 田中望 展　令和 5 年 5 月 31 日～ 7 月 17 日　リアス・アーク美術館
《リアス式山の暮らし》　2023 年　サイズ可変　インスタレーション
モニター(2 台)、スケッチ、手べら、杉の皮、ドラム缶、炭、パイプ椅子、紙、写真、砂鉄、タラヨウの葉
《分水嶺　仙台のなにもなさを歩く》　2018 ～ 2019 年　それぞれ 2000 × 2000mm
絵画 2 点とテキストの組作品　木製パネル、和紙、写真、炭、コピー用紙

ターンアラウンド企画　佐々瞬個展
「追廻住宅の石碑、その空洞」
令和 5 年 12 月 15 日～令和 6 年 1 月 14 日
Gallery TURNAROUND
《石碑を写し取る》　2023 年
各 420 × 297mm　フロッタージュ
《インフラストラクチャー》2023 年
1370 × 340 × 340mm　3D プリント、アクリル、ボール紙、木
制作協力 / 佐々木昇、even・熊谷海斗（3D プリント）、福原悠介（ドローン撮影）
《無題》　2023 年　2550 × 1650 × 500mm
追廻住宅最後の家屋部材、追廻の土、バケツ、祖父のカメラ
撮影：小岩 勉

佐々 瞬
《こいつはどうやら、役に立ちそうだ》2023 年
810 × 410mm
追廻住宅最後の家屋部材（床下地板）、アクリル
撮影：小岩 勉

彫刻

令和五年一月から十二月までの宮城県出身あるいは在住の彫刻・立体造形の作家による創作活動や発表、宮城県内で開催された展覧会、アートプロジェクト、グループ活動における彫刻、立体造形の作品や活動の報告を行う。

令和五年は、日本で新型コロナウイルスが確認されてから四年目となり、五月には感染症法上の分類が季節性インフルエンザと同じ五類に引き下げられた。とはいえ、展覧会では、会期の短縮や搬入・搬出時の混雑回避など、実施環境・鑑賞環境での配慮は継続された。

そして、世の中に大きな変化がある一年であった。国内の動きでは、六月にＬＧＢＴ理解増進法が成立した。私たち制作者は、人として自己を見つめ、表現者としてアイデンティティーに向き合い、表出する立場にいる。この法制化がより良き社会に向けて新たな問いかけを生み、それが表現される時がくるのではないかと思っている。また、「チャットＧＰＴ」などの生成ＡＩ（人工知能）が急速に普及した。インターネット上で見る画像は、精密な写実画なのかデジタルで作られたものなのか、判断つけ難いものが多くなっている。実材を扱う彫刻・立体造形は生成ＡＩが普及しても残る、普遍的で根源的な創作手法だと思う。手触りのある造形表現と、彫刻が範疇とするものの広がりや多様化が進んでいくだろう。

このような時代背景を感じながら、以下、筆者が実見したものを中心に記載した。筆者が実見できなかったものや、知らなかったものについてはご容赦いただきたい。また、文中の作家に対する敬称も略させていただいたことも併せてお許しいただきたい。

大衡村ふるさと美術館開館三十周年記念
赤沼潔作品展「熔解からの変異」
（一月七日～二月七日　大衡村ふるさと美術館）

鋳金作家の赤沼は大崎市出身で、令和四年に東京芸術大学教授を退任。本展は、東京芸術大学での退任記念展に続き、出身地での展覧会。氏は、令和三年の東京オリンピックの際に、福島県の仮設住宅が十年で取り壊されて生じたアルミサッシを再利用した「東京2020復興のモニュメント」を制作。オリンピック時には、選手バスの昇降場に設置された。大会

以後は福島・岩手・宮城の三県に一点ずつ移設設置され、宮城県においてはグランディ21に設置されている。

この展覧会のメインとも言える作品「円環」は、先述の復興モニュメント制作で残ったアルミ素材を購入して創作した三部作のうちの一つ。三部作は「円環」、「泉」、「広がり」とあるが、本展では「円環」と「泉」、そのほか多数の小作品を展示した。

美術館一階に展示された「円環」は、細い棒状に鋳造した一メートル超のアルミの棒を円環状に並べたインスタレーション。復興する・再生するという、皆で取り組んで上昇していくイメージは、未来を表現している。棒状の形には、鋳造した時にできたであろう、バリ状の薄い膜がついている。一本一本の棒は、人や生命を感じさせ、そのバリも相まって霊的な氣を放ち、神々しさを覚える。二階には、震災を乗り越えて残った作品や、それまでに様々な金属を用いて作られた作品を「過去」として展示。「泉」はアルミ鋳造で、おはじき状の丸い形をいくつも並べ繋げて作られた作品。そのほか、赤沼がこれまでに創作してきた、植物を題材にした鋳造作品が多数展示。赤沼は、それらの作品群を「重力に逆らった生命力を主軸としている」と話したが、作品の多くが床に直置きされていて、それらは秀逸な形であり、まさに大地からいきいきと芽吹く、生命感あふれるものであった。

鋳造は工芸の技法とみなされることも多いが、氏は工芸と彫刻、モニュメントもボーダーレスという。素材と手法によるジャンルの線引きを越えて、かたちそのものが人の心に感動を与える、優れた造形表現の数々であった。

赤沼潔「円環」

富松篤個展「想起するかたち」

（一月十四日～二月二十六日　GALVANIZE gallery）

SARP short short piece/Noboru Takayama memorial

（二月三日～十二日　仙台アーティストランプレイス）

一月八日に他界した美術家・高山登の追悼展。

当施設で個展等を継続的に実施している作家たちによる小品展も同時開催。青野文昭、翁ひろみ、スギサキマサノリ、虎尾裕、林範親らが出品。

秋保の杜　佐々木美術館　十周年リレー展「横山信人展」
（三月一日～二十六日　秋保の杜 佐々木美術館＆人形館）

秋保の杜　佐々木美術館　十周年リレー展「林範親展」
（五月二十四日～六月十八日　秋保の杜 佐々木美術館＆人形館）

展示室には、小屋のような囲いのある大きな造形作品が設置されていた。その作品としての囲いの四枚の壁は、それぞれ表情が異なり、見る面によって感じさせるものが違う別の空間を創り出していた。壁の内側には実際に使われていた古い木造冷蔵庫が設置されていて、蝶番やドアノブなどは、林の作った木彫の部品にすり替わっている。既存の物の形と作家の手仕事による部分が、ごく自然に融合されており、作品化してく作家のセンスを感じさせる。風雨に晒された古い木材と、リアルに彫り込んだ丁寧な手仕事の彫刻により、実際に見たことのある風景なのかと記憶の中を探したり、目の前の現実の作品風景に浸ったり、過去と今を行き来するような不思議な感覚があった。植物のリアルさを追求して彫り込んだ部分と、材木そのものの物質的なリアリティとの対比は、だれもが見たことのあるような風景を創り出す。林の独創性が光る展覧会であった。

林範親展より

秋保の杜　佐々木美術館＆人形館　十周年リレー展「青野文昭展」彷徨う欲動―幽霊船―地球の裏側から帰還した人々 1613-2023
【慶長遣欧使節―サン・ファン・バウティスタ号（復元船）の廃材から】
（八月十六日～九月十日　秋保の杜 佐々木美術館＆人形館）

秋保の杜　佐々木美術館＆人形館　十周年リレー展

翁譲『場の記憶―骨』

（十月十二日～十一月五日　秋保の杜 佐々木美術館＆人形館）

舞台演出の造形を手がけてきた翁の作品には、何かが生成される途中の「生き物、生（なま）もの」的なウェットな感じがある。今回は、作家が居住している埼玉県で、古い家や神社の鳥居が解体された時に、氏が引き受けてきた木を使った作品。彫って手を入れたものもあれば、全く手を入れずに展示したことにより、その木が蓄えてきた記憶を表現しているものもあった。

翁譲「場の記憶―骨」展より

最も注目した作品は、二本の木材を赤い布団と高枕に横たわらせた立体造形。氏はこの木をどのように用いるか、じっくり考えて決めたという。

赤い布団も高枕も、この作品のために作られた。家を支える木材が見つめてきたであろう、家族の営みを擬人的に表現しているようだ。一つ一つの木からも、展示室の空間全体からも「場の記憶」がイメージできる。

卯展　うさぎてん

（三月一日～四月十六日　秋保の杜 佐々木美術館＆人形館）

赤井靖武、あべいづみ、さくまいずみ、新藤睦子、大吉らが出品。

土門邦勝　伝承文化「遊佐刺し子」と現代美術の融合／風の痕跡　写真による風の可視化

（三月二十八日～四月九日　仙台アーティストランプレイス）

若手作家六人展　-biosphere-

（三月二十一日～二十六日　晩翠画廊）

佐々木莉央が木彫で出品。

「青の使い」展 ～四月二日 世界自閉症啓発デーによせて～
（三月二十八日～四月二日　晩翠画廊）
野田律子がステンドグラスの立体造形を出品。

ヒスロム活動報展＋アルミ鋳造イベントin仙台
（三月二十五日～四月四日　TURN ANOTHER ROUND）
加藤至、星野文紀、吉田祐からなるアーティストグループ。平成二十一年より活動を始める。造成地の探険で得た人やモノとの遭遇体験や違和感を表現の根幹に置き、身体を用いて土地を体験的に知るための遊び「フィールドプレイ」を各地で実践し、映像や写真、パフォーマンス作品として表現する。
本展では、平成三十年にせんだいメディアテーク一階フロアで開催された展覧会「ヒスロム仮設するヒト」の三十分超にわたる記録映像が印象的であった。その展覧会では、フロア全体に大量の足場で仮設の舞台を作り、彼らがフィールドプレイで関わってきた多くのモノ（子供達と作った標本、拾った素材で作った「リクリエイト」という造形物など）、活動の様子を捉えた映像などが展示された。筆者は当時の展覧会を見ていないが、人間の営みの中にあったモノ、彼らの営みとして出会ったモノが、それぞれの存在感や記憶を晒しながら、仮設の舞台に上げられることで、アーティストによる非日常の迫力ある空間を作り上げていたことが伝わってくる。
また、彼らの活動を年表にした展示では、鴨川やコペンハーゲンで見つけた石など、石を転がし運びながら様々な人と出会った様子が記録されている。その年表のメモ書きには「ヒスロムがこれまで十数年通っている造成地という場所を一つの重たい石に置き換えてみる。そして、転がし遊び移動し、時間を重ねてゆくことで彫刻化してゆく。石を取り巻く時間や風景は映像で物質化して記録され生まれていく。」とあった。まさにこのことが「フィールドプレイ」の本質なのだろう。彼らの活動は、関わるモノや人の記憶に蓄積しながら、いつか完結するゴールまで継続していく彫刻なのだと感じた。

第七十三回モダンアート展
（四月二日～十六日　東京都美術館）
阿部弘子が「光の road の風景」を出品。

川俣正／仙台インプログレス 報告展
（四月五日～五月三十一日　せんだいメディアテーク）
仙台インプログレスは、津波で被害を受けた仙台市内沿岸部のいくつかの地区で、平成二十九年から長期的なアートプロジェクトを行っている。アーティストの川俣正が中心となり、沿岸部に流れる「貞山運河」に沿って、主に三つの地域（仙台市宮城野区岡田新浜エリア、若林区荒浜エリア、若林

区井土エリア）を対象にプロジェクトを進めながら、その都度、地域住民や地域社会を巻き込み、地域の課題や資源を顕在化させている。

第十回あさごアートコンペティション二〇二二
大賞受賞作品「a tree of elephant」の設置

（五月十一日　あさご芸術の森「欅の森公園」（兵庫県））

松岡圭介が、前年に本コンペティションで大賞を受賞し、実制作を経て、完成作品が設置された。

長く人間をテーマに具象的に創作してきた作家の、木と人間と動物（象）が融合するような求心力の強いフォルム。バオバブの木をイメージさせるような大地にしっかりと立つ独特の形。作品の表面は、色とりどりの釉薬を施した陶板が貼られている。この意図について松岡は、色彩が限定される印象の野外彫刻において、素材の可能性を再考する試みであり、パブリックな環境で、人々により親しんでもらえる作品にしたかったという。また、陶を用いて、これまで室内が多かった自身の作品に野外彫刻への道を切り開いた。

鑑賞者がこの大きな彫刻を見上げた時に、作品と目が合い、鑑賞者が作品の一部になり、作品が完成するような形を意識したという。彫刻とは、鑑賞者に自己との対話という内的な旅を誘うものだと考えているが、野外彫刻というスケール感の中で、外から見ても鑑賞者が作品の一部となり、また鑑賞者自身も内的に作品と結びつくことができる作品である。

松岡圭介「a tree of elephant」

第八十四回河北美術展

（五月十二日～二十一日　ＴＦＵギャラリーミニモリ）

河北賞「泉より～したたる水・2023」　鈴木満（山形市）
東北放送賞「夏至」　粟田智彦（仙台市）
宮城県芸術協会賞「on the road」　横山信人（仙台市）
東北電力賞「風土記」　渡部信隆（仙台市）
東北福祉大学賞「翼のランドセル2023～A Boy's Dream～」
コイズミタイチ（栗原市）

賞候補「ある日 立つ」齋藤美智子（仙台市）
「望景」棟方似美子（仙台市）

スギサキマサノリ彫刻展
（五月十八日～二十九日　アートスペース無可有の郷）

Sculpture
（五月六日～十八日　TURN ANOTHER ROUND）
吉田愛美の具象の木彫と坂本絢香の抽象の石彫の二人展。
吉田は宮城県、坂本は福島県出身で、ともに一九九四年生まれで東北芸術工科大学彫刻コースの卒業生。
吉田は、人間をテーマの中心として「目に見えないが確かにそこに存在するもの、生命・気配」を木彫で表現。坂本は、ため息、吐息など人間が口から発する目には見えないものを第二の生命体として、石彫で抽象的に表現。二人の作家は、いずれも目には見えないものを実材で立体化しているが、形への取り組みが丁寧で繊細であり、いきいきと表現していた。これからの活躍が期待される。

吉田愛美「春を思う」

川内地域の地質の表層
（五月十七日～六月十八日　青葉の風テラス）

姉歯公也個展　アネハネハ楽園国…記憶のかけら
（五月十六日～二十一日　晩翠画廊）

丹野霞園展…結い
（五月二十七日～三十一日　せんだいメディアテーク）

チーム丹野霞園『花讃歌』
（四月二十六日～六月十八日　仙臺緑彩館）

ちばふみ枝個展「waves」
（六月二十四日～七月三十日　GALVANIZE gallery）

『楽しい』展覧会 Vol.3 ～アート・クラフトグループ展～

（六月二十七日～七月二日　晩翠画廊）

タカハシケンタロウ、つだかおり、平田恵利子、山本泰士らが出品。

第二十三回ライフワーク展

（六月三十日～七月五日　せんだいメディアテーク）

東北生活文化大学第二十九期卒業生による展覧会。山本泰士、橋本彰一らが出品。

古山少吉郎　創作陶芸展

（七月四日～九日　晩翠画廊）

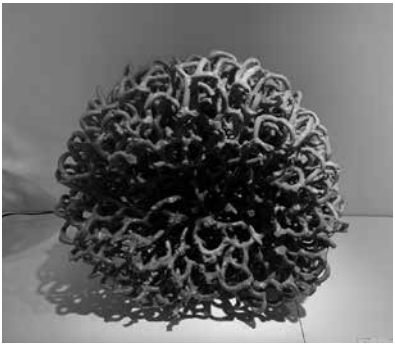
古山は一九四七年仙台市生まれ。四十代まで書道を習い、墨絵では国内外の美術展で入選、受賞歴がある。四十代から独学で陶芸を始めた。

氏の作品の特徴は、幾千もの小さな粘土の針を土台となる形に立てて密集させてフォルムを作っていることだ。その密集した小さな針で覆われた半球を合掌したように立てた作品や、丘陵のようなフォルムの作品を作っている。色は粘土に練り込んで出しているが、黄色から橙色のグラデーションの作品では、形が光を発しているようで神々しい。

この作風の始まりは、氏が粘土で針を作ってテーブルの上に立てていて、その針の上を指で触ると針が曲がり、蔵王の熊笹が風にそよぐのが目に浮かび、「これで風を表現できる！」という感動から生まれた。

これらの針の密集による風の表現を長く続けた後、最近では、電子顕微鏡で見た花粉の美を表現している。紐状にした粘土のループで籠のような球状を作っているが、六回もの試行錯誤を経て完成させた。そこから展開したのが作品「ブラックホール」。ループ状のつながりでモコモコとしたような球状の形を作っている。内と外の境界が流動しているような、惹き込まれる造形である。

氏は自ら楽しく、やりたいものを作る、その時間を楽しむと言う。だからこそ、試行錯誤を昇華した独創性あふれる作品に到達できるのだろう。



古山少吉郎「ブラックホール」

嵯峨卓　鍛金の仕事展
（七月二十五日～三十日　晩翠画廊）

信濃の国　原始感覚美術祭2023- 山のしづく、ささなみの水
（八月十九日～二十七日　千年の森（長野県））
展示と公開制作。富松篤が参加。

青野文昭展　未来の復元・迷走する時間―かつて仮構された街のチラシの欠片から― 1996～2011～2023
（九月七日～二十一日　Gallery TURNAROUND）

遥かなる時空を越えて　go beyond time and space
（九月十六日～二十九日　水主町の民家）
和紙造形作家の渡邊摩里によるインスタレーションの個展。

展示会場は、松島町の重要文化財である古民家。普段は雨戸が閉められており、建物内は観覧できないが、渡邊の個展によって、内部空間に和紙と再生紙を用いた作品で、梁から滝状に吊るしたインスタレーション空間を創り出した。和紙を「こより」にし、網のように紡ぎ上げたものに、白地に青色の印刷が入った再生紙を小さな円に切り抜いたものが、無数に散りばめるように貼られている。時を捉える投網と水泡のように見える。淡々と「こより」を作る仕事の間、渡邊が思い巡らせたであろう、遥かなる時空が古民家の中に解放された。一作品のみのシンプルな展示だが、空間の密度は濃密に感じられた。会期最終日には、雨戸を解放しての展示。吹き込む風にそよぐ作品が、さわさわと優しい音をたてながらブワッとたなびく。より一層、開放感が増し、いきいきとした時空間ができ上がった。淡々とした手仕事から生まれるソフトスカルプチャーの可能性を感じさせる作品であった。

渡邊摩里「遥かなる時空を越えて」

第八十六回新制作展

（九月二十日～十月二日　国立新美術館（東京都））

高家理が会員出品。

第六十回宮城県芸術祭彫刻展・彫刻公募展

（九月二十三日～二十六日　せんだいメディアテーク）

彫刻展の出品者は公益社団法人宮城県芸術協会会員。翁観二、佐藤淳一、赤井靖武、小関俊夫、永倉香名子、阿部弘子、及川茂、大槻俊之、亀井陽逸、早坂修、相澤オサム、姉歯公也、イクコクサカ、木村民男、佐々木莉央、清水直土、しょうじこずえ、新藤睦子、野地節子、畠山卓也、渡邊摩里。招待作家に茨城県在住の最上健。

宮城県芸術祭賞は、畠山卓也の「Hi・no・ma・lu 2023」。こう数年は、自身が住む登米市の大理石を用いて、日の丸を作り続けてきた。手仕事を大切にし、一、二年に一作のペースでコツコツと作り続けている。今回の展覧会の中で、最も迫力と密度、緊張感のある作品であった。

宮城県芸術祭賞　畠山卓也「Hi no ma lu 2023」

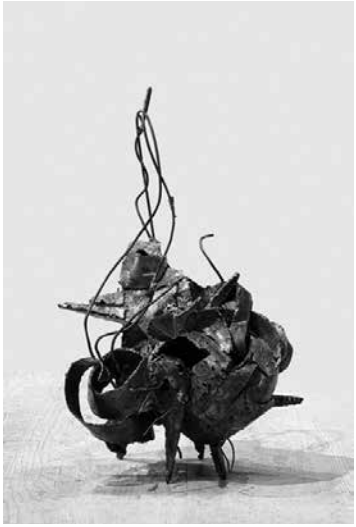
宮城県知事賞に姉歯公也の「感謝―生きてればこそ!!だよね」。

河北新報社賞に木村民男の「生命Ⅱ」。

菅野美術館賞に新藤睦子の「アンモナイト化石からの旅立ち」。

彫刻公募展の宮城県芸術協会賞は高平将人の「想う」。奨励賞は伊藤碧泉「初恋のおんなのこ」、保崎裕子の「リズム」。このほか、平田凛、赤平周音、菅野奏汰、松崎真虎斗が入選。

河北新報社賞　木村民男「生命Ⅱ」



菅野美術館賞
新藤睦子「アンモナイト化石からの旅立ち」

せんだい21アンデパンダン展二〇二四
（九月二十五日～十月六日　中本誠司現代美術館、GALLERY　ECHIGO、SARP、ギャラリー　チフリグリ、Gallery TURN AROUND、むかでや画廊、パフォーマンス会場：仙台フォーラス地下駐車場、野外会場：のりっぱ）
主催　せんだい21アンデパンダン展実行委員会

金蛇神社アートプロジェクト　蛇道
（九月二十六日～十月十八日　金蛇水神社外苑）
主催：まれびとプロジェクト　ＮＰＯ法人みんな一書
オカベサトシ、高橋健太郎、中里広太、チカコ・ヤマシタ・ストロバイ、細萱航平が出品。

第三十八回石巻市美術展
（十月一日～九日　マルホンまきあーとテラス）
最高賞の石巻市美術展賞は、しょうじこずえ。ラジオ石巻賞は勝尾晶。ちばふみ枝、真木泰博が入選。

晩翠画廊・開廊二十六周年感謝祭〈第一週〉
（十月十日～十五日　晩翠画廊）
出品者二十七名のうち、彫刻・立体の出品者に佐藤淳一。

晩翠画廊・開廊二十六周年感謝祭〈第二週〉
（十月十七日～二十二日　晩翠画廊）
出品者二十七名のうち、彫刻・立体の出品者に、翁ひろみ、嵯峨卓、佐々木莉央、ジェームスオペ、清水玄太、ノサカエミ。

ART TO YOU! 第九回全国障がい者芸術全国公募展
（十月十二日～十五日　せんだいメディアテーク）
宮城県の松浦繁が、彫刻でアイリスオーヤマ賞を受賞。

「リキッドパッション」キャスティング・アート・プロジェクト

主催：リキッドパッション実行委員会
ゲスト・アーティスト：ジョージ・ビーズリー
参加作家：片桐宏典　ケイト・トムソン　松坂渉　門馬経智

アーティスト・イン・レジデンス
（九月二十八日～十一月五日　浮島彫刻スタジオ（岩手県））

「リキッドパッション～形を求めて奔流する情熱」展
（十月二十日～二十九日　旧石井県令邸（岩手県））

「キャスティング・パフォーマンス」
（十月二十八日　浮島彫刻スタジオ（岩手県））
制作工程（鉄の流し込み）を一般公開。

吉田愛美個展　PORTRAIT
（十月二十四日～十一月五日　Gallery TURNAROUND）

令和五年度宮城県芸術選奨授賞式
（十一月十日　宮城県庁）
美術（彫刻）で佐野美里が受賞。
昭和六十二年生まれ。作品を自刻像（ポートレート）と位置づけ、その時々の自分自身を「犬」の姿で表現しており、作品制作を行う動機付けが等身大で、その作品は鑑賞者に訴えかける独創性がある。
作品は、木の素材を生かし、柔らかく曲線を基調としたフォルムに仕上げており、更に着彩を行うことで、ノミの彫り跡と独特な世界観が際立つ作りになっている。令和四年度に宮城県内で個展を二回開催したほか、アメリカでも個展を開催したことが評価された。
令和五年は、**「第九回「雲、想、藝」彫刻展」**（九月二十三日～十月二十二日　青雲画廊（台湾））に出品した。

佐野美里「びっくりポメラニアン」

自治とバケツと、さいかちの実―エピソードでたぐる追廻住宅―
（十一月三日～十二月二十四日　せんだいメディアテーク）
構成・制作：佐々瞬　伊達伸明

佐々瞬個展「追廻住宅の石碑、その空洞」

（十二月十五日～令和六年一月十四日　Gallery TURNAROUND）

「白い群れ」～宮城教育大学虎尾研究室卒業生による有志展 1998-2024～

（十二月二十二日～二十七日　せんだいメディアテーク）

同大学の美術教育講座彫塑研究室において、教授・彫刻家の虎尾裕が二十五年間で指導した学部卒業生・大学院修了生合わせて八十四名のうち、二十一名と虎尾が出品。現役の学生七名も参加。同研究室の卒業生は、小中学校教員や大学教員、公的機関、民間企業で働いている者など、活動の場は様々。展示されている作品も彫刻・立体作品だけでなく、平面、写真等多岐にわたっていた。

作者それぞれの視点や関心が感じられる作品が多く、興味深かった。特に守屋誠太郎の「attitude I」から「attitude XII」までのシリーズ作品が優れていた。金属製のヘルメットに円錐状のツノがついている。また、木製のハットの形に真鍮と思われる金属で再作した円錐形のツノ、木製のニット帽の形に巻きツノが付けてある作品もある。頭に被るものと、そこにつけられたツノの形態によって、作品である被り物自体からattitude（態度）が感じられる。それは被り物そのものの態度なのか、人が頭に被るものが既に人格を備えており、被るであろう人に力を及ぼすのか。作品とは作者が社会から感じることの表出だが、人間、人格について、人間を彫ることなく想像させる優れた作品であった。

おわりに

七月十四日に、東北・北海道芸術文化団体協議会創立五十周年記念シンポジウム「時代はアートだ！芸術文化が拓く、わたしたちの（社会）未来図」が開催された。

基調講演『「美意識」が広げる社会彫刻の可能性』で、講演者の山口周が次の問いを投げかけた。「スペースコロニーに移住する際、日本の文化遺産から、一つだけ持っていけるとしたら、何を選びますか？」と。氏がこれまでにこの質問を投げかけた多くの人々は、国宝など昔の文化遺産や作品を挙げるのだという。近現代の文化遺産・作品がほぼ挙げられないことについて、私たちは何を創造してきたのかという鋭い問いが投げかけられた。そして、文明化が終焉に向かう時代、「もっと安全で快適な世界」から「生きるに値すると思える世界」へと求める価値観が移行しているとも述べた。講演会の最後に、ヨーゼフボイスの「社会彫刻」というコンセプトと、彼の「あらゆる人間は自らの創造性によって社会の

幸福に寄与し得る。すなわち誰でも未来に向けて社会を彫刻し得るし、しなければならない。」という言葉が紹介された。

ここでいう彫刻とは、直接の造形表現を意味するものではなく、自ら何かしら良いはたらきを創出するという意味で彫刻なのだろうが、社会の全員がそのような意識を持つことで、幸せな境遇や社会を創り出していけるという信念が表されている。

コロナ禍以降、ロシア・ウクライナ戦争など、世界の分断とその影響による様々な格差が進行していることや、これまでとは異なる価値観に移行していることを、じわりじわりと感じている。

筆者の思うアートの意義・魅力は「自分の感性や尺度、価値観だけでは捉えきれないものを、たくさんの芸術家が表現して見せてくれる多様性」であると考える。

芸術文化の多様な表現や在り方は、分断を肯定したり、助長するものではなく、多様性を（適切な距離感を持ちつつ？）受容しながら、平和な社会を実現することに寄与できるものと信じている。

冒頭にも記したが、生成ＡＩ（人工知能）が普及する中、実材を扱う彫刻や立体造形は、生成ＡＩが普及しても残る、普遍的で根源的な創作手法だと思う。このような時代に物事の本質を見つめ、多感に感じ取り、手を動かし創り続ける。そうして生き抜いていく現代の作家から、将来、スペースコロニーに持っていきたい作品は生まれてくると信じている。

今年の年鑑に取り上げた作家らの活動・作品は優れていた。宮城県には彫刻制作を行っている方々がたくさんいる。今後も期待して、見続けていきたい、筆者自身の励みにもなっている。

日下（くさか）　育子（いくこ）
（宮城県芸術協会運営委員・河北美術展招待作家）

工芸

令和五年、東日本大震災から十二年の月日が流れた。復興が進み、人々の暮らしは落ち着いてきたかに見えるが、被災した方々の心の中は、まだまだやりきれない思いが残る。

そのような中、世界情勢は恐ろしい局面を迎えていった。ロシアによるウクライナ侵攻から丸一年過ぎても、戦場の主導権の奪い合いが絶えず、持久戦と化している。宗教や民族の争いがイスラエルのガザ地区で勃発。罪の無い子供たちのつぶらな瞳が、痛々しく終戦を訴える。

世界中を感染の脅威に晒した新型コロナウイルスは、少し落ち着きを取り戻し、ひと時は行き場を失っていた人々が、再び歩み始めた。

工芸界もまた、自由に行動できるようになり、活気を取り戻した。たぎる思いと鬱屈した気持ちを作品に込めて。かつてないほどの灼熱の真夏の暑さに耐えながら、汗を流して制作に励んだ作品を各地で開催された展覧会に出品・披露。栄誉を勝ち得た。

一月　**第七十回日本伝統工芸展仙台展**（仙台三越）

宮城県の入選者は次のとおり

橋本昌彦　「塩釉長方扁壺」（陶磁）

馬場興彦　「泥彩稜線文鉢」（陶磁）

鈴木元子　「乾漆蒟醤箱『花、想うひと』」（漆芸）

本間　潔　「栃拭漆盛器」（木竹工）

安藤令子　「有線七宝鉢『銀河』」（七宝）

佐瀬たか子　「省胎七宝器『清澄』」（七宝）

種澤有希子　「省胎七宝器『還』」（七宝）

鍋田尚男　「モザイクガラス四方皿『桜の頃』」（ガラス）

四月　**第六十一回日本現代工芸美術展**（東京都美術館）

宮城県の会員出品は次のとおり

林惠美子　「TSUBASA」（木竹籐）

宮城県の入選者は次のとおり

桑原リエ　「涼風」（陶磁）

田中美香子　「今年も咲いたよ」（染織）

古山文子　「藍の和」（染織）

臼井典子　「生きる。」（染織）初入選

五月　**第六十三回東日本伝統工芸展**（東京三越）

宮城県の入選者は次のとおり

岩井　純　「六華天目釉銀彩組皿」（陶磁）

橋本昌彦　「塩釉六方壺」（陶磁）

鈴木元子　「乾漆蒟醤蓋物『泡影』」（漆芸）

江田　蕙　「糸目瓢釜」（金工）

佐瀬たか子　「省胎七宝器『春光』」（七宝）

種澤有希子　「省胎七宝器『涼音』」（七宝）

六月　**第四十七回東北現代工芸美術展**（せんだいメディアテーク）

東北六県在住、または出身者を対象とする造形作品の公募展で、染織や陶磁など三十二点の応募があった。一般の入賞・入選者と会員・顧問・審査員の出品作の七十六点を展示。

宮城県の入賞者は次のとおり

【河北新報社賞】

桧垣孝二　「明日の幸せ　海と空」（金属）

【東北現代工芸賞】

小林寛子　「こぎん刺し　夏衣」（染織）

【宮城県知事賞】

今野隆子　「石積みの記憶」（染織）

【仙台市長賞】

武田さい　「『遠いキオク』」（染織）

【奨励賞】

大泉三保　「彼方から」（染織）

小林忠男　「地望」（陶磁）

【現代工芸東北会会員賞】

桑原リエ　「涼風」（陶磁）

十一月　**第十回日展**（国立新美術館（東京都））

宮城県の入選者は次のとおり

相澤正樹　「稜線の響」（陶磁）　宮城県出身

相澤まゆみ　「波静か」（陶磁）　宮城県出身

梅澤優子　「こぎん刺し　星祭りの夜」（染織）初入選

桑原リエ　「晴風」（陶磁）

同月　**第四回杜のみやこ工芸展**（ＴＦＵギャラリーミニモリ）

河北工芸展を継承した公募展で、公益社団法人宮城県芸術協会が主体となり、令和二年から始まった。

応募者数は百五十二人、作品数は百八十三点。審査の結果、陶磁・染織・漆・木竹・七宝など十三の種別に入賞が三十三点、入選は百二十四点が選ばれた。会場には、審査員らの賛

助作品を含めて百七十六点が展示された。審査員からは、「力作が揃い、高水準の公募展になった」との言葉があった。特に、染織の熟練の技術に感服。ベテランの高度な技術の一方で、若い人たちの現代的なセンスがきらりと光る作品が、見る人を楽しませた。

本展最高賞である宮城県芸術協会賞受賞作品は、中村小百合の「風韻」。長年、風をテーマに作成した籐の作品で、籐は草木・コーヒー・紅茶・玉ねぎなどの染料で染められた。ざる編みや縄編み、らせん編み、あじろ編みなどで編み方を変え、風の強さや優しさを表現。風が織りなす模様を絵画的なパネル作品に仕上げた秀作である。

宮城県の上位入賞者は次のとおり

【宮城県芸術協会賞】
中村小百合　「風韻」（木竹）

【河北新報社賞】
杉山智一　「木地呂塗雀小箪笥」（漆）

【宮城県文化振興財団賞】
松本幸恵　「有線七宝水指『ささめく旅人』」（七宝）

【ＪＡＬ賞】
伊藤眞理　「藍染着物『凪』」（染織）

【宮城県知事賞】
安倍裕貴　「星に願いを」（染織）

【青森県知事賞】
相澤まゆみ　「深海の光」（陶磁）

【秋田県知事賞】
小澤義夫　「月見月」（木竹）

【山形県知事賞】
田中泰雄　「囁く森」（漆）

同月　**第六十回宮城県芸術祭工芸展**（ＴＦＵギャラリーミニモリ）

公社宮城県芸術協会工芸部会員の役員作品十六点、会員作品四十二点、計五十八点を展示。最高賞の宮城県芸術祭賞は長瀬和子の染織の着物「花の降る」。経糸にバンブー（竹）を、緯糸に綿を染めた織。バンブーは光沢があり、緯糸を綿糸にすることで光沢を抑えた反面、刺子に用いた太い糸を効果的に光らせた。配色が美しく技術の高さを感じさせた。

入賞者は次のとおり

【宮城県芸術祭賞】
長瀬和子　「花の降る」（染織）

【宮城県知事賞】
及川貴宏　「波影」（陶磁）

【河北新報社賞】
松本幸恵　「晩夏」（七宝）

【宮城県教育委員会教育長賞】

古山文子　「冬仕度」（染織）

【宮城県教育委員会教育長特別賞】

菅原恵美子　「初夏の訪れ」（金工）

【（公財）宮城県文化振興財団賞】

あつみ智子　「菱刺し帯『待宵』」（刺繍）

【宮地房江賞】

千田玲子　「トキノワン」（陶磁）

同月　**令和五年度宮城県芸術選奨授賞式**（宮城県庁）

美術（工芸）で、岩井純が芸術選奨を受賞。

日本伝統工芸展で入選を重ねたほか、日韓陶芸交流展に積極的に参加するなど、活発な社会貢献活動が評価された。

同月　**令和五年文化の日表彰表彰式**（東京エレクトロンホール宮城）

教育文化功労として、七宝作家の安藤令子が受賞。

多年にわたり、優れた創作活動を行うとともに、後進の指導・育成に努め、伝統工芸の発展と文化芸術の振興に寄与したことが評価された。

個展は次のとおり

一月　**加藤晋作陶展**

丸いフォルムの中に宇宙を見るような景色を結晶釉や蛍焼で表現。

四月　**小松善郎作陶展**

作風を模索しながら自分らしさを追求した作品。

同月　**工藤修一春展**

自然の温かみのある作品。

七月　**岸上まみ子作陶展**

白磁に身近な草花や小鳥を繊細に彩釉。

八月　**馬場興彦作陶展**

自然の中に見出す、みずみずしさを美しい線とグラデーションで表現。

九月　**鍋田尚男ガラス作品展**

モザイク調に色ガラスを幾何学的に配し、美しい世界を表現。生け花とのコラボレーションは、来場者を楽しませた。

十月　**岩井純作陶展**

六華天目の技法を生かした作品。凛とした表情を見せた。

川北京子（宮城県芸術協会工芸部副部長）

橋本昌彦　「塩釉長方扁壺」

馬場興彦　「泥彩稜線文鉢」

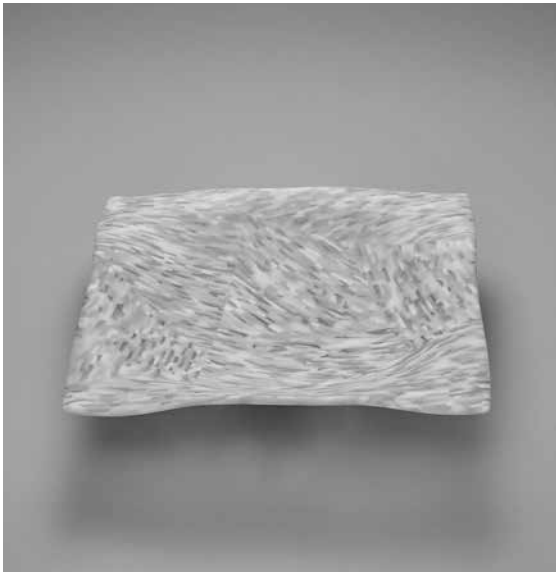
鈴木元子　「乾漆蒟醤箱『花、想うひと』」

本間　潔　「栃拭漆盛器」

安藤令子　「有線七宝鉢『銀河』」

佐瀬たか子　「省胎七宝器『清澄』」

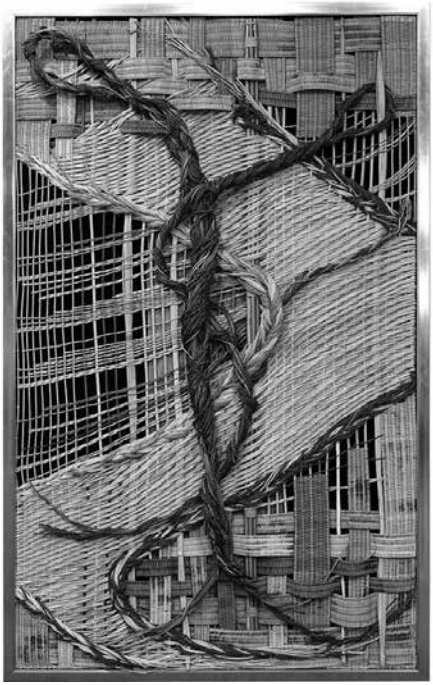
種澤有希子　「省胎七宝器『還』」



鍋田尚男　「モザイクガラス四方皿『桜の頃』」

桑原リエ　「春風」

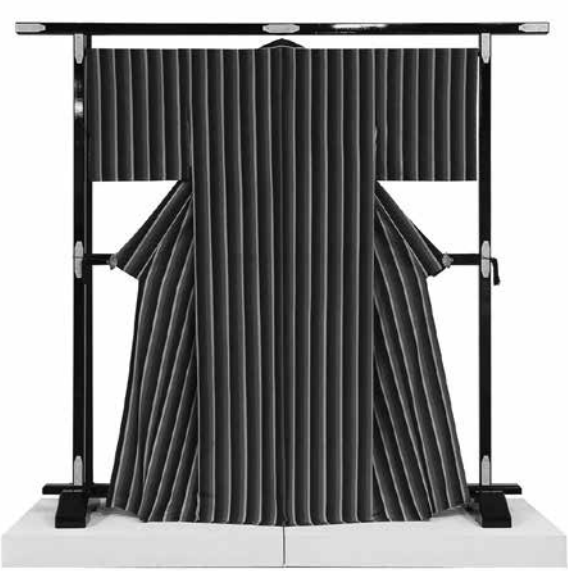
長瀬和子　「花の降る」



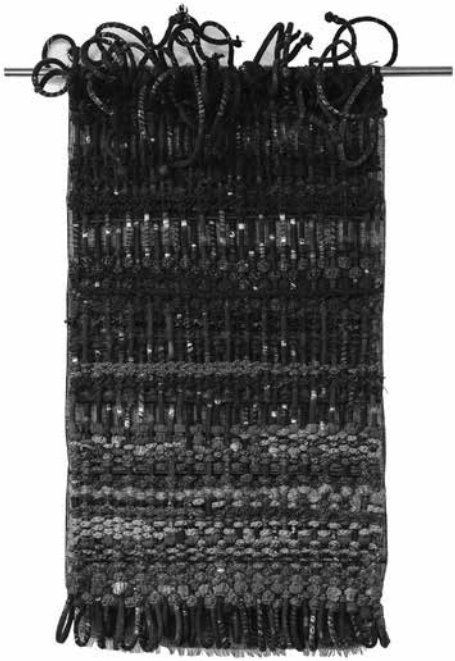
中村小百合　「風韻」

杉山智一　「木地呂塗雀小箪笥」

松本幸恵　「有線七宝水指『ささめく旅人』」



伊藤眞理　「藍染着物『凪』」



安倍裕貴　「星に願いを」

相澤まゆみ　「深海の光」

小澤義夫　「月見月」

田中泰雄　「囁く森」

書

令和五年の活動を終え、迎えた甲辰年元日、おとそ気分を一蹴するように令和六年能登半島地震が起きた。東日本大震災を経験した私をはじめ、多くの人々は、胸が締め付けられる思いで報道を見つめていたことと想像できる。あの時、書道はできるのだろうか。書道活動をしていいものだろうか。多くの人が苦悩した。そのような中、多くの支援を頂きながら、こういう時だからこそと心を奮い立たせ、書活動を再開、また、書の活動を通しての復興支援などに取り組み、その後、少しずつ少しずつ日常を取り戻していった日々を思い出さずにはいられない。お亡くなりになられた方々の御冥福をお祈り申し上げるとともに、被災された皆様に衷心よりお見舞いを申し上げるところである。

今、全国的に書道人口は減少してきている。十年ほど前までは五百万人を超えていたものの、この十年程で半減し、現在は二百数十万人ほどと言われている。宮城県内における書道界も同様で、河北書道展をはじめとした各書道展が活気を呈し、様々な書道団体も元気であった昭和の時代があった。その時の活動の恩恵や伝統を守りながら、平成の時代を経て、令和の時代に入ったものの、現在は少子高齢化、趣味や娯楽の多様化など、様々な要因で少しずつではあるものの、確実に出品者数や会員数が減となるなど、先行きが見通せない時代となってきている。

そのような中、令和五年の県内の書道活動は、新型コロナウイルス感染症が「五類」に移行するなど落ち着きを見せ始め、制限を余儀なくされていた書展も、様々な対策や工夫をしながら、そして何より、それぞれの団体、関係機関、代表、そして各書家、多くの方々の御努力と絆により、書活動を行ったり書道展が開催されたりしたところである。

作品も、ベテランから中堅作家は、見応えのある、味わい深く充実した作品が発表され、若手作家も作品の錬磨が進み、数は多くはないものの、多様性を感じる魅力的な作品が見られるようになってきたところである。

各公募展・書展などは、以下においてまとめるところであるが、複数の会場が地震や老朽化による工事等の理由により休館となるなど、会場確保が難しい年であった。その影響か、

個展の開催数は例年より少ない状況ではあったものの、開催された個展は目を見張るすばらしいもので、それぞれの活動に敬意を表するものである。

◎令和五年度宮城県芸術選奨受賞者

小日向慶可

◎日展入選者

小日向慶可　高野芳月　目黒爽舟

主な書展

◎第七十回河北書道展

前期：九月八日～十二日　後期：九月十五日～十九日

会場：ＴＦＵギャラリーミニモリ

主催：（株）河北新報社、（公財）河北文化事業団

特別協賛：日本航空（株）

応募点数八百四十点。例年同様、一般と会友を分けて審査が行われた。入賞・入選作と、顧問をはじめ、審査会員などを加えた計九百九十点を展示。七十回を記念し、歴代審査委員長の作品の紹介や、第一回からの歩みを振り返るパネル展示も行われた。

巡回展は九月二十七日から十月一日に大崎市民ギャラリー緒絶の館で開催。主な受賞者は次のとおり

【一般】

河北賞

藤田桃泉　猪股光華　千葉光龍　鈴木こず江

阿部咲里奈　遠藤耕菱　佐藤武美

宮城県知事賞　伊藤樹理

仙台市長賞　加藤まよみ

宮城県教育委員会教育長賞　青沼香邨　酒井雅代

仙台市教育委員会賞　阿部雅悠

宮城県芸術協会賞　佐藤優子

ＪＡＬ賞　木村松柳

東北電力賞　岡本悠香

東北福祉大学賞　大友伸秋

東北放送賞　相原則子　小谷清一郎

藤崎賞　砂澤小春

奨励賞　相澤咲都　本田由　菅野英子　高畑翠栞

【会友】

河北会友賞

岩佐春泉　松本茂子　本田美雪　伊藤紫炎

荒井裕水　大沼樵峰　大友佳

会友秀逸賞

齋有韻　千葉翠永　阿部桃仙　木村和祐

島津和子　菊地昭吾　梅津恵華

【委嘱作家】

委嘱作家特別賞

中條天真　渡邉由紀子　佐々木青霞　伊勢枝香

和泉とし子　阿部崋山　岡崎翠園

◎第七十四回毎日書道展東北仙台展

会期：九月十五日～二十日

会場：せんだいメディアテーク

青森・岩手・宮城の三県からの出品のほか、全国巡回の作家による漢字、かな、近代詩文書、大字書、篆刻、刻字、前衛書の七部門の作品約八百五十点を展示。高校生による書道パフォーマンスも開かれた。

県内の入賞者

毎日賞

神作朱雀　佐藤紅茜　齋藤杏邑　伊藤奈緒　近江美雪

秀作賞

阿部雅悠　菊地嚶鳴　紺野遊山　佐々木豊苑　大和愛香

伊藤四夏　佐藤桂鳳　高橋佳子

佳作賞

小山内谷玲　齊藤一翠　佐々木眸心　渋谷蛍江　秋山之扇

海上敦子　遠藤紫舟　佐々木田鶴子　笨睦月　胸組紅琳

田中翠恵　南浦洋州　目黒里美　相原則子　佐藤糾舫

庄司咏艸　庄司櫻空　江戸妙鶴　山崎晴美　横山恭子

U23奨励賞

下位彩花　浅野日向子　越前屋ここの　小幡瑶扇

高野天音　細川和紗

◎第四十回記念産経国際書展東北展

会期：九月八日～十三日

会場：せんだいメディアテーク

八月に開催された本展の上位入賞者作品に加え、東北在住者の入選・入賞作品など計二百十九点を展示。

県内の入賞者

文部科学大臣賞　今野榮園

第四十回記念賞　酒井雅代

伊達政宗賞　伊勢枝香

産経準大賞　只野翠苑

無鑑査会員特別奨励賞　大友博子

会友賞　一条侑琴　加藤洋子

特選　渋谷眞智美　水戸廣臣　屋代瑞希　など

同時に、**二〇二三産経ジュニア書道コンクール**の上位入賞作品及び中学生以下の推薦、特選、高校生の秀逸賞、入選作二百二十三点も展示された。

◎第六十回宮城県芸術祭書道展

会期：十月七日～十日

会場：せんだいメディアテーク

前年に引き続き、会期が四日間に短縮されたものの、芸術祭が六十回の節目を迎えた。「人で言うと還暦で、県の芸術文化の発展という未来像に向けて新たなスタートを切りたい。」との理事長の挨拶のとおり、会員の思いが結集し、開催された。

入賞者

宮城県芸術祭賞　江村耕芳

宮城県知事賞　西條玉静

仙台市長賞　浅野彩紅

河北新報社賞　伊藤煌容

宮城県教育委員会教育長賞　建部紘子

宮城県教育委員会教育長特別賞　板橋雅邦　佐藤華炎

仙台市教育委員会教育長賞　小元佳香

宮城県議会議長賞　天野白扇

仙台市議会議長賞　板橋翆苑

（公財）宮城県文化振興財団賞

鈴木東鳳　中島桃沙　加納鳴華

（公財）仙台市市民文化事業団賞　佐々木一峰

門伝勝太郎賞　日野象風

宮城県芸術祭奨励賞

三浦八重子　関雀鈴　伊勢枝香　舘岡経香　福田苔華

大沼樵峰

「韓翊詩」小日向慶可　第10回日展

「『可能性』より」佐々木青霞　第 70 回河北書道展
（提供：河北新報社）

「敬天愛人」阿部華山　第 70 回河北書道展
（提供：河北新報社）

社中展・グループ展・個展ほか

（一月）

◎硯上の里おがつ学生展

主催：硯上の里おがつ運営協議会

会期：一月十六日～二月十二日

会場：硯上の里おがつ

学生の書道の普及や教育の充実を目的に開催。石巻市の書家の千葉蒼玄氏が作品募集や審査に携わった。石巻地方や仙台市などから寄せられた、幼稚園児から高校生までの毛筆・硬筆の作品計約五百点を展示。

◎東北書道新春選抜展（会長　後藤大峰）

会期：一月三十一日～二月五日

会場：宮城県美術館県民ギャラリー

発足から九十周年を迎えた東北書道会の、日展や河北書道展などで活躍する役員ら六十人による選抜展。縦二・四メートル、横〇・六メートルの大型作品や、和歌をしたためた書など計六十点を展示。

（二月）

◎墨と暮らす　Vol.2

会期：二月十七日～二十二日

会場：晩翠画廊

墨を表現手段とする、大橋アキラ、大塚耕志郎、斉藤文春、佐藤華炎、相馬美希、丹野萩逕、支部蘭蹊の七名の作家の作品展。墨は普通に存在するが、身近に感じる機会が少なくなっているとの思いを込め、「墨と暮らす」楽しさを感じていただけるようにと、それぞれ五、六点の作品のほか、ポスターやカレンダー、グッズなど、工夫が施されたバラエティーに富んだ作品約五十点が展示された。

◎第七十六回県小中学校児童生徒書きぞめ展覧会

主催：県連合小・中学校教育研究会書写研究部会

会期：二月十八日～二十日

会場：アエル

入賞者に事前に配布した、入場券を持つ方限定での入場となったが、毛筆と硬筆の各部で選ばれた部会長賞四百八十点・特選千七百四十七点・金賞二千二百二十点が展示された。

（三月）

◎第九回佐々木鈴優書道院作品展（主宰　佐々木鈴優）

会期：三月二十五日・二十六日

会場：東京エレクトロンホール宮城

佐々木と、氏の母である栄鐘の作品をはじめ、書道院で学ぶ未就学児から八十代までの百五十五人の書を約百七十点展示。会場では、母子のお二人と生徒による書道パフォーマン

スも行われた。

（四月）

◎二〇二三みやぎを魅せる書展（実行委員会代表　渋谷青龍）

会期：四月二十九日～五月三日

会場：せんだいメディアテーク

三十代から六十代の六十二人による、漢字・かな・近代詩文・墨象・篆刻など、様々なジャンルの作品が並び、縦三メートル、横二メートルの大作が目立つ。「願い」をテーマに据え、それぞれが自由な発想で取り組み、個性豊かな書が並んだ。

（五月）

◎第六十八回東北書道展（会長　後藤大峰）

会期：五月十二日～十七日

会場：せんだいメディアテーク

日本や中国の古典を題材にした漢字、かな、篆刻・刻字等の三部門による一般の部と、高校・大学生の学生の部、幼年から中学生までの教育の部の作品が、約千五百点展示された。

◎書家　大友青陵展

会期：五月十六日～三十日

会場：岩沼市図書館

故・大友青陵氏の生誕八十八年を記念し、その足跡を伝えようと、同氏が主宰であった龍門書道会と岩沼市教育委員会が企画。作品約六十点と愛用した筆や硯などの書道具が展示された。

漢の時代の隷書を代表する曹全碑の書、蘇東坡の漢詩、書道の手本とされる「千字文」といった古典のほか、プロ野球阪神の応援歌「六甲おろし」や東北楽天の野村克也元監督の語録など多彩な作品が並んだ。

（七月）

◎第六十八回圖南書道展（会長　八乙女清峰）

会期：七月七日～十二日

会場：せんだいメディアテーク

漢字、かな、調和体、少字の各部門による作品約三百点が並んだ。幼年から高校生までの教育部の作品約千二百点も展示された。

◎玄穹社選抜書展（主宰　千葉蒼玄）

会期：七月二十日～九月三日

会場：硯上の里おがつ

「玄穹社」の選抜会員らが一人一点を厳選した漢字、近代詩、墨象などの作品を、種田山頭火や三好達治などの詩句や、風や空などを題材に、筆の流れと墨の濃淡でダイナミックに表現した多彩な作品約五十点が並んだ。

（八月）

◎第五十回宮城野書道展（会長　佐藤象雲）

会期：八月四日～八日

会場：せんだいメディアテーク

伝統書法の一層の普及と振興を目指し、古典を中心とした漢字作品を中心とした作品約百二十点の他、大島嵩山氏、大島謙介氏の作品展示、幼年から中学生までの教育部作品約二百五十点が展示された。

◎宮城野書人会展・学生書道展（会長　尾形澄神）

会期：八月十八日～二十一日

会場：せんだいメディアテーク

古典に立脚した作品を目指し、漢字、かな、現代詩文書、墨象など、役員幹部ならびに準同人の作品を展示。学生書道展も同時に開催した。

◎第五十三回宮城書芸院展（会長　加納鳴鳳）

会期：八月三十一日～九月三日

会場：大崎市民ギャラリー緒絶の館

近代詩文や漢字などの大作から小品まで約七十点を展示。コロナ禍の落ち着きに伴い、錬成会や勉強会が再開され、錬磨された作品に繋がった。大学生、高校生の作品も並んだほか、幼稚園児から中学生までの作品を集めた教育部展も併催された。

（九月）

◎津波と生きる書道展

会期：九月一日～二十九日

会場：松山酒ミュージアム

東日本大震災時、当時十五歳であった少女が避難所で配られたノートに書き留めた詩を、佐藤ゆかり、西尾真紀、後藤夕深らの書家が書き起こした作品約二百点を展示。彼女のボランティアへの感謝の気持ちが書で体現され、誰かの人生の支えになればいいとの思いが込められた。

（十月）

◎大内魯邦展　優麗な墨象の世界

会期：十月七日～二十二日

会場：涌谷町くがね創庫

高校の教壇に立ちながら前衛書道家として活躍した、故・大内魯邦氏の作品展。涌谷町が企画。作品が町に寄贈され、今回初めて展示した丸山富子の詩の一節の作品や、ふすま四枚に大書した「行雲流水」など、迫力のある作品が並んだ。

◎第六十二回洗心書道展（会長　中塚仁）

会期：十月十九日～二十二日

会場：東京エレクトロンホール宮城

未就学児から九十代までの会員による漢字やかななど、約

三百点を展示。特別企画として、「江戸時代以降の郷土の書」なども併催した。

◎東北書道秀抜展（会長　後藤大峰）

会期：十月二十八日～十一月一日

会場：せんだいメディアテーク

役員選抜展。軸装による「茶掛け」体裁の漢字、かな、篆刻、調和体の作品、計百八十点を展示。吉語や禅語、近現代詩などの作品が並んだ。

（十一月）

◎第七十二回県高校書道展（宮城県教育委員会など主催）

会期：十一月十日～十五日

会場：せんだいメディアテーク

漢字、仮名、漢字かな交じりの書、篆刻・刻字、大字の五部門で、県内四十二校から三百六十一点の作品が出品され、最高賞の推薦四十三点のほか、特選、金賞、入選作品を展示。日々の取り組みの成果が発表された。

併せて、石巻支援学校の生徒の作品約二十点も展示された。

◎第十六回河北小中学生書道展

主催：株式会社河北新報社

会期：十一月二十三日～二十六日

会場：ＴＦＵギャラリーミニモリ

最高賞の河北賞を含む上位賞十九点、金賞六十二点、銀賞六百五点、銅賞六百五点と入選作品を加えた計三千八百五十一点を展示。半紙、ミニ条幅部門それぞれが展示された。

（十二月）

◎第五十九回日院書道会展

会期：十二月一日～五日

会場：せんだいメディアテーク

漢字作品を中心に理事の二尺×八尺の作品の他、会員の作品を展示。併せて、公募の**第七十一回全国公募小中高児童生徒川開書道展**を開催。学生達の力作が並んだ。

◎斉藤文春展―たとえば、ここに―

会期：十二月五日～十日

会場：仙台アーティストランプレイス

一月に他界した美術家・高山登氏へのオマージュ作品など、平面作品と、初挑戦の線刻陶板の計約三十点を展示。文字から離れた絵画的な表現を目指した「水墨抽象」の表現形式の作品など明るい作品が並んだ。

「再び」と「充実」という言葉があてはまるような一年であったと感じる。コロナ禍を過去の経験として、令和五年の活動

が翌年以降に継承され、歩みが確実に刻まれて充実していくことを願うところである。

寄稿にあたっては、できる限り情報を収集し取りまとめたが、紙面の都合で割愛せざるを得なかったところがあること、敬称を略させていただいたことを御容赦願いたい。

渋谷青龍（しぶや せいりゅう）
（宮城県芸術協会書道部部長）

みやぎを魅せる書展
（提供：河北新報社）

書家　大友青陵展
（提供：河北新報社）

写真

《はじめに》

令和五年。さまざまな写真の「決定的瞬間」は新聞や雑誌、SNSなどに現れた。ジャンルも政治・社会・国際・スポーツ・事件…と、実にさまざまな瞬間を報道は捉え、カメラ・アイはその一瞬を撮影する。長らく続いた「新型コロナウイルス」の世界的な蔓延のピークは徐々に下がり、ようやく世界が通常に戻りかけている。大国ロシアがウクライナへ侵攻してから二月で一年が過ぎた。六月以降、ウクライナも反撃を強めたが、ロシアが支配した東部ドンバス地方や南部クリミア半島などを取り戻せておらず、状況は好転しないまま被害は増え続け、十一月の国連発表では、ウクライナの民間人の犠牲者は少なくとも一万人を超えたとされる。長期化する戦争に、国際社会の関心が薄まり、欧米各国でも支援疲れが見えてきている。そのような中で、「G7広島サミット」が五月に開かれた。参加七ヶ国は、日本・アメリカ・イギリス・イタリア・カナダ・ドイツ・フランス。今回、第二次世界大戦末期にアメリカによる原子爆弾の攻撃を受けた「被爆地」を開催地として、「核兵器のない世界」の実現へ向けた初の声明「広島ビジョン」をまとめたのは意義深いといえる。

さて、戦争と並んで今年は世界的に多くの自然災害に見舞われた年でもあった。「天災は忘れた頃にやってくる」と言ったのは、科学者でもあり随筆家でもあった寺田寅彦であるが、今年、九月一日は関東大震災から百年目の節目となった。この大災害は、のちに建物の耐震基準を定めたり、火災が広がりにくい街づくりにつながったりなど、いまに続く災害対策の出発点ともなった。昨今は、「南海トラフ地震」や「首都直下地震」などの大地震が、いつ起きてもおかしくないといわれているが、私たちの生活は、少しの揺れにも緊張が走り、疲労感を覚えることが普通となってしまった。そのような中、二月六日の未明に、トルコ南部でマグニチュード七・八の地震があった。その後にはマグニチュード七・五の余震があり、トルコと隣国シリアで計五万人超が死亡した。

イギリスでは、チャールズ国王の戴冠式が五月六日、ロンドンのウェストミンスター寺院で開催された。母であるエリザベス女王以来、七十年ぶりとなった。また冠といえば、将棋のプロ棋士、藤井聡太は十月に「王座」のタイトルを獲得

し、史上初めて八つのタイトルを独占する「八冠」を達成し、日本を沸かせた。同じく十月には、パレスチナ自治区ガザを実効支配するイスラム主義組織ハマスが、イスラエルに奇襲攻撃を仕掛けた。イスラエルの攻撃によるガザでのパレスチナ人の死者数は増え続け、深刻な人道危機も解消の見通しが立っていない。イーロン・マスクが七月に、ツイッターのマークを従来の青い鳥から「X」とし、サービス名も「X」に変更したことは印象深い。さまざまなニュースは多くの写真（画像）とともに世界を駆け巡る。まさに世界史の転換点ともいえる激動の一年であった。今年の全国の写真展の概況を振り返る。

《国内の写真展の概況》

まず、年明けの一月。仙台市の仙台文学館で開催された、**「仙台コレクション 2001–2022　一万枚のメッセージ」**の展示は、圧巻だった。このプロジェクトは伊藤トオルを中心として、仙台市在住の写真家たちが平成十三年（二〇〇一年）から活動している。参加者は大内四郎・片倉英一・小滝誠・佐々木隆二・斉藤寿・松谷亘など。彼らは、仙台市内の建物・道路・階段・歩道橋・記念物などの外観を、精度の高い中判以上のカメラを使って記録し、「仙台コレクション」として保存、公開することを目標として撮影を続けてきた。今回の展示は、その数が当初からの目標であった一万枚に達したことを記念した展示である。特に、地域史研究家の佐藤信夫によるトークイベント**「仙台偽コレクション―ありえた風景、ありえなかった風景」**は、関連企画ながら、本展の企画とも相まって多くの人が詰めかけた。なお、「仙台コレクション」の写真アーカイブとしての営みは、これからも更に重要性を増すだろう。今回、この「ベスト版」のハードカバーの写真集も発行された。

今年は、感染症も緩やかになり、規制が緩和されたため、これまで控えられてきたさまざまな催しが、多くのミュージアムで次々と開催された。特に、東京都写真美術館での展覧会が目を引いた。**「深瀬昌久 1961-1991 レトロスペクティブ」**、**「TOP コレクション セレンディピティ 日常のなかの予期せぬ素敵な発見」**、**「風景論以後」**、**「即興　ホンマタカシ」**、**「見るまえに跳べ　日本の新進作家 vol.20」**と続き、毎月のように展示があり、観覧者側としては多少、消化不良気味であったが、これは嬉しい悲鳴でもある。内容はどれもよく練られたものが多かった。無論、そのほかのミュージアムでも多くの展覧会が開催され、「普通に」鑑賞することができるようになったことは喜ばしいといえる。東京都現代美術館でも多くの企画展が開催された。宮城県で震災直後の凄惨な状況をまざまざと体験した写真家の志賀理江子と竹内公太による二人展**「さばかれえぬ私へ Tokyo Contemporary**

Art Award 2021-2023　受賞記念展」は、力のこもった展示であった。この展示に代表されるように、東日本大震災の記憶をどう受け継ぎ、表現としていくのか。多くのアーティストにとってはこれからも大きく、重い課題といえるだろう。ほかには世界を巡回しながら開催されるブロックバスター展として「**クリスチャン・ディオール、夢のクチュリエ**」が開催。世界中から集められた華やかで魅力的なディオールのコレクションが、すばらしい空間に展示されていることに加え、日本人写真家の高木由利子がこの展覧会のポスターのために撮り下ろした魅力的な写真なども展示や広報の重要な要素となっており、改めて「ファッション」と「写真」の濃密な関係性を感じた。しかし、圧巻だったのは、革新的な画家のひとりであるデイヴィッド・ホックニーによる二十七年ぶりとなる大規模な個展である。六十年以上にわたって制作された、絵画・ドローイング・版画・写真・舞台芸術の作品もさることながら、新型コロナウイルスによるロックダウン中に描いた新作や近年のiPadを用いて描いた作品には、とても驚き、その挑戦を続ける姿勢にも共感した。そのほか、ヒカリエホール（東京都）では、「**ソール・ライターの原点ニューヨークの色**」も安定の人気を誇る写真家のすばらしい展示で、作品の認知度も定着してきたといえる。東京オペラシティ アートギャラリーでの「**石川真生―私に何ができるか―**」という写真展も良かった。演出的な写真と偶発的でスナップ的な写真表現をともに見せようとする試みは、とても興味深く、この写真家ならではの表現といえた。他に、森美術館の「**開館二十周年記念展　私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために**」は、大いに考えさせられる展覧会であった。コンセプチュアル・アーティストのハンス・ハーケが、一九七〇年代に撮影した写真が興味深く、岡本太郎・中西夏之・工藤哲巳らの作品を再解釈した展示であり、殿敷侃のオブジェ『**山口―日本海―二位ノ浜　お好み焼き**』の再評価ともいえる展示は様々な美術館でこれからも出展が続くかもしれない。「**坂本龍一トリビュート展　音楽／アート／メディア**」は、アーカイブという言葉の新しい側面を感じられ、深く考えさせられるものであった。

　コロナ禍の前から、インバウンドなどによる、日本のミュージアムの来館者の爆発的な増加は、大きな課題であったが、継続的にインターネットをとおしての予約入場システムを活用したことで、安定的な運営が定着してきたことはとても良く、今後の展開にも期待ができるといえるだろう。

　それでは、県内の状況に目を移していきたい。

《展覧会》

【一月―三月】

○仙台コレクション 2001-2022　一万枚のメッセージ

会期：一月二十一日～三月二十一日

会場：仙台文学館（仙台市青葉区）

平成十三年（二〇〇一年）から仙台の変わりゆく風景を写真記録で伝え残す活動をする、写真家集団「仙台コレクション」の写真展。記録を開始した平成十三年から、東日本大震災を経て、令和四年（二〇二二年）に目標であった一万枚の撮影した写真を文学作品や仙台在住の作家らの寄稿を交えて展示した。それぞれの写真は、写真家の個性表現や芸術的効果を排除して撮影されており、見る側に写真の解釈を委ねることで記憶に語りかけた。

○震災の記憶を伝える展覧会

会期：三月四日～三月十九日

会場：みんなの家（七ヶ浜町）

企画：七ヶ浜町教育委員会

七ヶ浜町にある「みんなの家」で、東日本大震災の記憶を伝承しようと同町の震災被害の状況や、震災以前の風景を写真で伝えるパネル展が開催された。写真は町職員や町民が撮影したもの。震災から十二年が経過し、復興が完了していく中、震災の記憶を風化させないために写真が当時の様子を鮮明に伝えた。

【四月―六月】

○中村ハルコ 写真展 × 下館創楽 書展

会場：レストランパリンカ（仙台市青葉区）

カフェパリンカガレリア（仙台市青葉区）

仙台市の写真家として活躍した故・中村ハルコの写真展が青葉区のレストランパリンカで開催された。また、レストラン隣のカフェパリンカガレリアでは、中村の次女である下館創楽の書展が同時開催された。書作品の中には、母である中村の言葉を書いたものもあり、親子二人の共演が実現した。

○感動と感謝の旅　四国遍路展

会期：四月四日～九日

会場：東北電力グリーンプラザ（仙台市青葉区）

主催：ＮＰＯ法人おへんろラボ 仙台支局

（現：ＮＰＯ法人お遍路ラボ 仙台支局）

四国八十八か所霊場を巡るお遍路の魅力を紹介する「感動と感謝の旅 四国遍路展」が開催された。お遍路文化の啓蒙・普及活動を目的に徳島県で開催していたパネル展示が仙台市でも開催され、四国遍路を中心に撮影された写真パネルなど約百二十点が、お遍路の魅力を伝えた。

○昭和の子どもと地域の学校

会期：四月二十九日～六月十一日

会場：塩竈市杉村惇美術館（塩竈市）

主催：塩竈市杉村惇美術館

塩竈市の市民や地元写真館から提供された、昭和三十年～四十年代の市内の子どもや学校を撮影した写真など百六十四点を集めた企画展「昭和の子どもと地域の学校」が開催された。まちの記憶を集めながら、昭和の映画館のような文化的な団らんと交流の場を設ける試みをする同市のプロジェクト「まちと 記憶と 映画館」の一環として開催された。

○笹崎正明　写真展「NO PHOTO NO LIFE」

会期：六月二十三日～二十七日

会場：東北工業大学一番町ロビー（仙台市青葉区）

仙台市泉区の写真家である笹崎正明の個展「NO PHOTO NO LIFE」が開催された。テーマを「写真のない人生なんてない」とし、「アレたブレたボケた写真」、「ピンホール写真」、「赤外線写真」、「スローシャッター写真」、「雨の中と夜だけを撮影した写真」の五つのタイトルのもと、東京都や宮城県などで撮影した写真約二百点が展示された。

○どこコレ？ ―おしえてください昭和のセンダイ―

会期：五月十日～六月二十五日

会場：せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）

主催：ＮＰＯ法人20世紀アーカイブ仙台

市民から提供された写真の保存にあたり、不明な情報を確定させていくプロジェクト「どこコレ？」が十二回目（うち第二期）を数えた。開催から十周年を迎えた今回の展示では、これまでに情報が確定した二百八十一枚の写真をパネル展示とアルバム展示で振り返り、その確定の決め手を「確定コーナー」として閲覧できるようにした。そのほか、特定に難航している写真も引き続き展示され、訪れた来場者の間に多くの交流を生んだ。

【七月―九月】

○写真新世紀三十年の軌跡展―写真ができること、写真でできたこと

会期：八月五日～二十二日

会場：せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）

主催：キヤノン株式会社

平成三年に始まったキヤノンの文化支援プロジェクト「写真新世紀」は令和三年度に公募を終了した。展覧会では、新人写真家の発掘・育成・支援をしてきた三十年のプロジェクトの歩みを振り返った。仙台市の写真家・中村ハルコの写真を含む歴代受賞作品と、一般投票により選ばれた入賞作品など計三百六十七点が展示された。なお、軌跡展の地方巡回開

催は、仙台市のみである。

○石井麻木　写真展「3.11からの手紙／音の声」

会期：八月九日～八月十五日

会場：仙台三越定禅寺通り館（仙台市青葉区）

東京都の写真家で、東日本大震災の被災地の写真を撮り続けている石井麻木の写真展「3.11からの手紙／音の声」が開催された。震災月命日である毎月十一日に、岩手県・宮城県・福島県に通って撮影した写真など百作品を展示。今回は東北で開かれた音楽イベントの写真もともに展示した。

○銀河浴とオーロラ

会期：八月二十四日～二十九日

会場：藤崎百貨店本館（仙台市青葉区）

仙台市出身の天文写真家である佐々木隆の個展「銀河浴とオーロラ」が開催された。東日本大震災の被災地をはじめ、国内外で撮影した夜空やオーロラの写真をおよそ五十点を展示。期間中は福島県の詩人である和合亮一との対談も行われた。

○仙台市役所本庁舎思い出写真展

会期：八月十七日～三十一日

会場：仙台市役所本庁舎（仙台市青葉区）

仙台市役所の本庁舎建て替えに向けた解体工事が始まるのを前に、本庁舎の歩みを「思い出写真展」としてたどった展示が行われた。初代庁舎から現在の庁舎に至るまでの写真をおよそ六十枚紹介。新庁舎の模型も展示され、時代や代ごとの比較ができるようになっていた。

○細倉鉱山 1986-1999

『細倉を記録する寺崎英子の遺したフィルム』を語る

日時：九月三十日

会場：みちのく風土館（栗原市）

主催：くりこま古本市実行委員会

栗原市鶯沢の旧細倉鉱山の暮らしを、閉山が決まった昭和六十一年からおよそ十一年にわたり撮影してきた故・寺崎英子。自身の故郷の山を撮影し続けて残された写真は、フィルム一万三千カットに上り、三月に仙台市の写真家・小岩勉らによって写真集となった。トークイベントでは、写真集刊行を記念し、出版までの裏話や撮られた写真の魅力、寺崎の功績などが語られた。十月から行われた**「仙台写真月間二〇二三」**では寺崎の写真のうち未発表作品がおよそ三十点展示され、写真集に掲載されなかったカットに焦点が当てられた。また、十一月からは、せんだいメディアテークで作品展も行われた。

【十月―十二月】

○仙台写真月間二〇二三

会期：十月十日～十一月五日
会場：仙台アーティストランプレイス（仙台市青葉区）
「仙台写真月間二〇二三」が開催され、宮城県ゆかりの八人の作家それぞれの写真展が一か月にわたって同時的・連続的に開催された。作家は、はじめに寺崎英子と高橋親夫。その後、依田俊哉と奥西優子、サトウダイスケと工藤寛之、城田清弘へと写真展が展開されていった。

○鹿児島総合文化祭作品展
会期：十月二十三日～十一月二日
会場：宮城県庁（仙台市青葉区）
鹿児島県で開かれた全国高校総合文化祭に出品された県内の生徒たちの作品が県庁で展示された。書道、写真、美術・工芸の三部門計十七点の力作が揃った。

○細倉を記録する寺崎英子の遺したフィルム展
会期：十月三十一日～令和六年一月二十二日
会場：せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）
故・寺崎英子の作品展「細倉を記録する寺崎英子の遺したフィルム展」が開催された。三月に写真集が刊行されてから初めての大規模な作品展で、カラー・モノクロの未発表作品を含む多くの作品が紹介された。作品展は写真集刊行の代表も務めた小岩勉によって手がけられた。

○自治とバケツと、さいかちの実―エピソードでたぐる追廻住宅―
会期：十一月三日～十二月二十四日
会場：せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）
主催：せんだいメディアテーク
かつて仙台市川内追廻地区にあった追廻住宅の七十七年にわたる歴史や暮らしを振り返る展覧会を開催した。構成・制作には、地域の人々の営みを調べ表現するアーティストである佐々瞬、伊達伸明を迎え、自らの手でつくりだしてきた生活のありようと街の姿について、個々の目線から街の点描を試みた。

○第三十回宮城県高校写真展
会期：十一月十日～十五日
会場：せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）
主催：宮城県高校文化連盟
県内四十三校の生徒が撮影した写真三百五十点が展示され、このうち十五点が入賞作品に決められた。身近な景観や家族、ペット、学校生活の様子などが、みずみずしく活写された力作が揃った。入賞作品のうち、金賞五作品は来年の全国高等学校総合文化祭において宮城県代表として出品される予定。

○昭和館・しょうけい館・平和祈念展示資料館　合同巡回展
会期：十二月九日～十九日

会場　せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）
東京都内にある戦中・戦後の労苦を伝える国の三つの施設昭和館、しょうけい館戦傷病者史料館、平和祈念展示資料館の合同巡回展が行われた。各施設の所蔵する衣類や、手紙の実物、写真などが三百点以上展示され、戦時下の生活や被害、終戦後の人々の辛い体験など、当時の姿が浮かび上がった。

○第四回沢尻棚田写真コンテスト　作品展

会期：十二月十八日～十二月二十六日
会場：丸森物産いちば八雄館（丸森町）
丸森町の大張沢尻棚田の四季を撮った写真展。写真コンテストに寄せられた町内外四十一人の作品計八十三点が展示された。作業に励む農家や雪景色など、棚田をさまざまな季節と角度から捉えた作品が並んだ。同展は令和六年一月に大河原町でも開催された。

○福島隆嗣　写真展「庭の窓の部屋 Ver.02」

会期：十二月二十六日～三十一日
会場：仙台アーティストランプレイス（仙台市青葉区）
仙台市の写真家で令和三年度の宮城県芸術選奨を受賞した福島隆嗣による写真展「庭の窓の部屋 Ver.02」が開催された。同展はシリーズの三回目で、「公共空間での人々の振る舞い」をテーマに、外界の世界を「庭」、庭を見て解釈する人間のまなざしを「窓」、写真を「部屋」と位置づけ、福島独自の感性が光る作品十四点が展示された。

《写真集発行》

○『いとしい狛犬めぐり』　庄司多賀雄
（公社）宮城県芸術協会写真部部長で岩沼市の元教員である庄司多賀雄が写真集『いとしい狛犬めぐり』を自費出版した。教員時代に赴任した塩竈市の鹽竈神社の狛犬に魅せられ、その魅力を引き出した。「狛犬がさらに輝きを増す」と、全て雨の日に撮影された写真は、百四十五ページの作品集にまとめられた。

○『写真集　昭和の角田Ⅰ』　角田市郷土資料館
昭和期の角田市を写した貴重な写真をまとめた『写真集昭和の角田市Ⅰ』が角田市郷土資料館により発刊された。日常や戦時下の生活、伝統芸能など多彩な写真が、百四十一ページにまとめられた。発刊に合わせ、企画展**「昭和の角田写真展」**も開催され、写真集の一部の写真に合わせた郷土資料が写真パネル百三十四枚とともに展示された。

《その他》

○後藤東陽　逝去
写真家で平和運動家の後藤東陽が一月一日に老衰のため、九十七歳で逝去した。写真館「東陽写場」を経営しながら、

平成十六年に自衛隊イラク派遣の差し止めを求める訴えを起こすなど、生涯にわたり県内における反戦運動の中心的役割を担った。平成十八年にみやぎ憲法九条の会を立ち上げ、平成二十八年まで共同代表を務めた。

○『二刀流の棋士　一力遼』出版

仙台市出身の棋士（囲碁）であり（株）河北新報社記者の一力遼の歩みをまとめた単行本『二刀流の棋士　一力遼』が一月五日に（公財）日本棋院から出版された。棋士と記者の二刀流で活動しながら、令和四年に「棋聖」となるまでの道のりを、幼少期のエピソードやタイトル戦の写真・棋譜とともに記録している。執筆は、（株）河北新報社記者の田中章。

○『荒地の家族』の単行本カバー表紙

仙台市の作家佐藤厚志の芥川賞受賞作品である『荒地の家族』の単行本カバーに、仙台市ゆかりの写真家である木戸孝子の撮影した写真が採用された。写真は、東日本大震災後の平成二十三年十一月に撮影された七ヶ浜町の被災風景である。使用された写真のほかに、発災から十年間撮り続けた被災地沿岸部の写真は、写真集『The Unseen』として発行されている。

○鈴木麻弓　写真で紡がれる家族の物語

女川町出身で写真作家の鈴木麻弓は、東日本大震災で犠牲になった亡き父の遺品のカメラレンズをとおして、同町の風景を撮影する活動を続けている。撮影された写真は、平成二十九年、町民の協力を得て復元した父の撮影写真や家族写真とともに写真集『The Restoration Will』としてまとめられ、翌年にスペイン PHOTO ESPAÑA 年間写真集最優秀賞（国際部門）を受賞した。「父の視点で風景を見つめた」という写真は、震災後も家族の物語を紡いでいる。

《おわりに》

年が明けた令和六年一月四日、写真家の篠山紀信が亡くなった。一九六〇年代から写真家としての人生を歩み、「写真は、時代の写し鏡である……」と、篠山はよく口にしていたというが、その時代に起こったこと・生きた人・ものごと・事件などを切り取る名手として知られた。特に、著名人の肖像など時代を象徴する人物を撮り続け、名実ともにトップに居続けながらも、旺盛な挑戦を続けてきた人であった。戦後華やぐ写真家人生で、「激写」、「写楽」、「不測の事態」、「サンタフェ」などといった言葉を聞くと、その時代が蘇ってくるから不思議である。まだ寝ても覚めても写真のことだけを考えることのできた世代の写真家であったともいえる。

十数年前、筆者は、台北市（台湾）の空港からも近い文化エリアにある台北市立美術館に立ち寄ったことがある。美術館内のギャラリーを見渡せる中抜けの四階から三階を覗き込

むと、異様なほどリアルな裸の男たちの集団が壁一面に映っている。遠目に見ると生身の人間がいるかと思うほどであったが、力士たちが集団で土俵入りをしている写真であることは、すぐに理解できた。その階を越えて見るものに迫りくるイメージの群れをいまでも忘れることはできない。これは、「シノラマ・トーキョー」展という、いわば実験的な試みの展示であったと思う。やがて「写真力」という展覧会に構成され、初台のオペラシティーギャラリーでの開催を皮切りに、七年かけて日本全国二十九の会場を巡回し、約百万人を動員した一大プロジェクトになった。そのカタログも、飛ぶように売れたと聞く。篠山は、いつも豪奢な衣装をまとい、華やかな女性に囲まれ、ニコニコしながらユーモアたっぷりに写真の魅力を語り続けていたが、その眼差しは、いつも何かを求める狩人のようであった。次の企画、次の写真、次の瞬間を、固唾をのんで待ち構えていたのだと思う。「時代の目撃者」という言葉がこれほど似合う人はいないだろう。

篠山の展覧会を最後に見たのは、新型コロナ禍の最中の東京都写真美術館でのこと。「新・晴れた日　篠山紀信」と題し、二部構成で六十年間にわたる百十六の作品が並んだ。第一部では、写真界で注目され始めた一九六〇年代から、第二部では、一九八〇年代以降の作品を中心に、バブル経済による変貌から、東日本大震災を経て、再構築される東京都の現在が一堂に展示されていた。震災時、篠山は「この震災を、見て見ぬふりはできない」と八×十インチのカメラを担いで被災地に向かった。震災後のさまざまな人のさまざまな複雑な気持ちや批判があった中で、篠山はまさに「時代の映し鏡」たらんとして、静かにシャッターを切った。

これほど稀有な写真家が登場するような時代はもうないだろうし、これほどの写真家ももう出ることはないのだろうと思うと本当に寂しく思う。現代は誰もが、スマホを持ち歩き、いつでも写真を撮ることが可能になった。写真撮影だけをなりわいとすることは、これからは難しく、また、誰もが知るお茶の間の人気者のような写真家は、ますます貴重な存在となるだろう。一つの時代が終わり、まだ見ぬ新しい時代が我々の眼前には広がってくるのかもしれない。

清水（しみず）　有（たもつ）
（せんだいメディアテーク企画・活動支援室長・写真史）

写真展「仙台コレクション」
会期：1 月 21 日～ 3 月 21 日
会場：仙台文学館（仙台市青葉区）
画像提供：伊藤トオル

「写真新世紀 30 年の軌跡展」のポスター
会期：8 月 5 日～ 8 月 22 日
会場：せんだいメディアテーク
（仙台市青葉区）
画像提供：キヤノン株式会社

「自治とバケツと、さいかちの実ーエピソードでたぐる追廻住宅」
会期：11 月 3 日～ 12 月 24 日
会場：せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）
画像提供：せんだいメディアテーク

「細倉を記録する寺崎英子の遺したフィルム展」
会期：10 月 31 日～令和 6 年 1 月 22 日
会場：せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）
画像提供：せんだいメディアテーク

文芸

第百六十八回芥川賞を仙台市在住の佐藤厚志が受賞し、昨年の石沢麻依に続き、宮城県出身者の芥川賞受賞となった。受賞作の『荒地の家族』は東日本大震災から十年を経た亘理町が舞台。喪失感を抱えながら生きる人々の心情を、被災地の情景とともに描く。「震災後の十年をリアリズムの手法で真っすぐ描いた」（堀江敏幸選考委員・談）点が高く評価された。受賞者の佐藤厚志は、被災を長い時間軸で捉え、「いまだ翻訳されていない感情を拾い上げたい」と語る。第六回仙台短編文学賞の応募数は二百十八編。実行委員会の土方正志代表は、「体験をストレートに表現するのではなく、自分あるいは社会にとってあの震災は何だったのだろうかと、客観視しながら深く思索を凝らした作品が増えてきた」と述べる。その中で、大賞の「あらゆる透明な」（高村峰生・作）は、「震災文学の意味合いを根底から塗り替えるもの」（和合亮一選考委員・談）として評価。震災から十二年を経て、東北の震災文学を普遍的な文学へと開いていかなければ、時間の経過とともに震災が忘れ去られていくという問題意識が生まれている。また、東日本大震災の被災地である石巻に二年通い、死者と土地の声に耳を澄ませて書き上げた吉増剛造の詩集『Ｖｏｉｘ』が第一回西脇順三郎賞を受賞した。被災した土地とそこで命を落とした人の声を聞き続けて言葉にすることで、土地に記憶を刻み込む。いわば新たな「歌枕」の創設の試みともいえる。五・七・五の短文で薄れゆく東日本大震災の記憶や思いを書き留める「３・１１からの独り言」という取り組みが広がりを見せている。この手法を編み出したのは、名取市の宇佐美久夫。言葉にするのが難しいことでも、五・七・五なら書けるというところから始まった試みが「３・１１からの独り言」研究会（研究代表者・宮本匠大阪大大学院准教授）に結びついた。津波被害が酷かった気仙沼市鹿折地区の「グラン・マの会」も「３・１１からの独り言」に取り組み、経験や記憶を共有した。悲しみを率直に表現したもの、笑いに昇華させたものなど個性豊かな独り言が集まったという。一方、研究会が大阪で行ったワークショップでは〈祖父母宅電話かけ過ぎて番号覚えた〉など、被災者とは異なる視点の独り言が多かったという。震災が個人や社会に与えた影響の大きさを改めて思い出させた。震災をどのように捉える

か、どのように記憶し、どのように記録していくか、震災の伝え方は新しいフェーズに入っている。

令和四年「星新一賞」で生成ＡＩを使って執筆した小説が初めて入選した。生成ＡＩの発達は目覚ましく、作品の創造に新たな可能性を開くとともに、それを取り入れた応募作品をどう判別し、どう評価していくかという問題が現実味を帯びてきた。

五月八日、新型コロナウイルス感染症が五類に移行された。これを受けて、各大会や会合も従来の形で行われるようになった。

六月三日、**第二十六回ことばの祭典**が仙台文学館で開催された。当日に会場で題を発表する方法の吟行会は四年振り。席題は「開く」または「靴」。

【ことばの祭典賞】

〈短歌〉不意打ちにうなじ燃えゆく初夏に十七歳の世界が開く　（小林珠緒　仙台市）

〈俳句〉開きかけ僕の心は牡丹かな　（木村陽菜　仙台市）

〈川柳〉新しいノートを開くときが好き（佐藤久美　仙台市）

第六十回宮城県芸術祭文芸部門の入賞者は次のとおり。

【宮城県芸術祭賞】

菅野實　（仙台市）＝川柳

【宮城県知事賞】

大林美智子　（仙台市）＝詩

大坂康子　（美里町）＝短歌

佐々木博子　（大崎市）＝俳句

岩渕たか　（仙台市）＝川柳

【河北新報社賞】

菅野美子　（仙台市）＝短歌

【（公財）宮城県文化振興財団賞】

屋代ひろ子　（仙台市）＝俳句

【宮城県芸術祭奨励賞】

佐藤綾泉　（気仙沼市）＝俳句

なお、文芸部員の作品と公募の優秀作品を収めた『二〇二三宮城県文芸年鑑』が十月十五日に発行された。

十月二十八日、東京エレクトロンホール宮城で、**第六十回宮城県芸術祭文芸祭**が開催され、文芸賞受賞者による感懐と作品朗読とともに**第八回文芸作品公募**の入選作品の表彰が行われた。公募については、今回から高校生以下はインターネットでの応募も受け付け可能となった。文芸祭終了後の懇親会も復活し、多くの参加者を得てジャンルを越えた交流が行われた。公募の結果は次のとおり。

一般部門

〈詩〉

【優秀賞・宮城県詩人会会長賞】田宮ケンジロウ（仙台市）

〈短歌〉
【最優秀賞】嵯峨敏子（仙台市）
【優秀賞・宮城県歌人協会賞】秋場祐美子（仙台市）
【優秀賞】笹崎愛子（仙台市）、佐藤久美（仙台市）
〈俳句〉
【最優秀賞】黒田洋子（仙台市）
【優秀賞・宮城県俳句協会賞】木村螢雪子（大崎市）
【優秀賞】大友順子（仙台市）、篠沢別雨（仙台市）
〈川柳〉
【最優秀賞】太田良喜（大河原町）
【優秀賞・宮城県川柳連盟賞】内ケ崎喜重子（富谷市）
【優秀賞】田淵秀明（仙台市）、柏倉霜代（仙台市）
〈エッセー〉
【最優秀賞】間英雄（仙台市）
ジュニア部門
〈詩〉
【優秀賞・宮城県詩人会会長賞】阿部圓（石巻市立牡鹿中 一年）
〈短歌〉
【最優秀賞】渋谷明香里（仙台市立桜丘中 三年）
【優秀賞・宮城県歌人協会賞】櫻井悠（岩沼市立岩沼中 三年）
【優秀賞】宍戸怜央奈（岩沼市立岩沼中 三年）
海藤晴由（仙台市立東長町小 三年）
〈俳句〉
【最優秀賞】駒井萌黄（宮城教育大学附属中 二年）
【優秀賞・宮城県俳句協会賞】外山愛里彩（仙台市立桜丘中 二年）
【優秀賞】諸根芽生（仙台市立桜丘中 二年）
島貫颯太（岩沼市立岩沼中 三年）
〈川柳〉
【最優秀賞】花見優果（富谷市立日吉台中 一年）
【優秀賞・宮城県川柳連盟賞】南部紗耶（仙台市立中山小 六年）

第六十回宮城県芸術祭表彰式（十二月一日　会場：ホテルメトロポリタン仙台）は、昨年同様、茶話会形式で開催。

宮城県芸術協会主催の**文学散歩**では、十月五日に奥州市の寿庵廟・水沢教会・正法寺、一関市の大籠キリシタンの里を日帰りで訪ねた。期せずして伊達家に厚く保護された寺と迫害された場所を同時に訪ねる旅となった。

十一月二十四日、人間の孤独や哀感を描き出し、「最後の無頼派」と呼ばれた伊集院静が逝去。また、十二月五日、「仙台文学」を長く牽引してきた牛島富美二が逝去。

新聞関係の選者は、河北新報歌壇は花山多佳子、本田一弘。同俳壇は高野ムツオ、西山睦。同柳壇は雫石隆子。朝日新聞宮城版みちのく歌壇は梶原さい子。同俳壇は渡辺誠一郎。同柳壇は木田比呂朗。読売新聞宮城版よみうり文芸短歌は花山

多佳子、俳句は石田郷子、川柳は千葉朱浪がそれぞれ担当した。

各部門

〈詩〉

第二十四回白鳥省吾賞（栗原市主催）

【最優秀賞】

一般の部「うたう」齋藤茂登子（岩手県）

小・中学校の部「ため息」菅原瞳美（栗原市立築館中 二年）

第六十四回晩翠わかば賞

「捨てられたちびまる」稲辺領汰（登米市立加賀野小 五年）

第六十四回晩翠あおば賞

「夏景色」桑島琢磨（東北学院高 一年）

あきは詩書工房主催の三賞受賞者については次のとおり。

第三回秋吉久美子賞　滝本政博（愛知県）

第三回いがらしみきお賞　腹巻さしみ（神奈川県）

第八回YS賞　藤野栞（富山県）

活動は次のとおり。

ポエトリー・カフェみやぎ／オフィス汐講演会

主　催：宮城県詩人会、オフィス汐

開催日：二月十八日、三月二十五日、五月二十七日、七月十五日、八月二十六日、九月二十四日、十月七日、十一月十八日、二十五日、十二月十日

第三回「詩と絵の二人展」玉田尊英＆松宮栄典

会場：東北工大一番町ロビー

会期：六月十六日～二十日

○詩集

『宮城の現代詩二〇二三』宮城県詩人会

『刻の隙間から』建入登美

『でんげん』佐々木洋一

『伝記』竹内英典

『民衆詩人白鳥省吾年譜』佐藤吉一

『過激な夢想家の桃』久保俊彦

『桜恋記』笠原千衣

『不思議な力』萩田厚子

○詩誌

「回生」「霧笛」「ひびき」「風花」「仙台演劇研究会通信ＡＣＴ」「a´s」「とんてんかん」「ココア共和国」「白鳥省吾研究会会報」「想音窟だより」「ＴＨＲＯＵＧＨ　ＴＨＥ　ＷＩＮＤ」「ササヤンカの村」「次の、明後日」

〈小説・散文・絵本〉

第百六十八回芥川賞（一月十九日）

『荒地の家族』佐藤厚志（仙台市）

第六回仙台短編文学賞（三月四日）

選考委員は和合亮一（福島県）。

【大賞】「あらゆる透明な」高村峰生（兵庫県）

【仙台市長賞】「世界が終わる日」大久保蓮（福島県）

【河北新報社賞】「ホダニエレーガ」片岡力（東京都）

【プレスアート賞】「兄のアルバム」飯沢耕太郎（東京都）

【東北学院大学賞】「竹」二之部右京（秋田県）

第九回児童ペン賞・童話賞

『ぼくんちの震災日記』佐々木ひとみ（仙台市）

第三回みちのく童話賞

【大賞】「朝市と、かき氷」中村祥子（岩手県）

【優秀賞】「あだこと狐火」あめのけい（青森県）

「雪野原のあの子」清藤留理子（青森県）

なお、同賞は第三回で終了となる。

第十四回山田風太郎賞

『藍色時刻の君たちは』前川ほまれ

（東京都在住・東松島市出身）

○小説・散文

『一枚の花びらのように』佐藤三昭

『荒地の家族』佐藤厚志

『旅行鞄のガラクタ』伊集院静

『なぜ、そのウイスキーが謎を招いたのか』三沢陽一

『再会』伊藤浩

『私雨邸の殺人に関する各人の視点』渡辺優

『こんとんの居場所』山野辺太郎

『逝きたいな ピンピンコロリで 明日以降』三浦明博

『777トリプルセブン』伊坂幸太郎

『幻日／木山の話』沼田真佑

『仙台あらえみし日和』土方正志

○童話・絵本

『ごぼうのごぼちゃん』とうどうみらい

『一本の木がありました。』古山拓

『さくらばあちゃんのいる街』高山広

『犬とわたし』田原・いがらしみきお

○文芸誌

「仙台文学」「波動」「新生」（東北新生園）「みちのくふだん記」（随筆中心）「みちのく春秋」（詩と随想）「麦笛」

〈短歌〉

二月十八日、宮城県歌人協会の代表者会議が仙台市の駅交流センターで開かれ、令和五年度の事業計画ほかが決定された。会長は佐野督郎。

第七十回宮城県短歌大会（六月九日）

主催：（株）河北新報社、宮城県歌人協会
共催・会場：仙台文学館

【河北新報社賞】

一人分の洗濯物も春の陽をひとしく貰ひはつか揺れをり
保原みつ子（女川町）

【宮城県歌人協会賞】

足下の危うくなりし母のため備えし手摺に今わがすがる
遠藤正子（仙台市）

第三十四回宮城県短歌賞・歌人の集い（十一月二十六日）

主催：宮城県歌人協会
会場：東京エレクトロンホール宮城

短歌賞は新作二十首の競詠で行われた。集いの部とその後の懇親会では歌談義に花を咲かせ、親睦を深めた。

【宮城県短歌賞】

「日傘の上を」大坂康子（美里町）
〈根あがりを踏みつつ足を止め拾う櫟巨木のどんぐり七つ〉ほか十九首。

次席には安部律（仙台市）。〈春浅き花の精かと見ておりぬ白く俯きスノードロップひそか〉ほか十九首。

第三十八回詩歌文学館賞（主催：日本現代詩歌文学館振興会ほか）

『サーベルと燕』小池光（前仙台文学館館長・柴田町出身）

○歌集

『秋のひかり』沼沢修
『父の居ぬ春』川端冨起子
『白き残像』阿部松子（遺歌集　発行者：阿部高明）
『忍冬Ⅱ』上林節江（歌書）

○歌誌

「群山」「登米短歌」「波濤みやぎ」「麻刈」「北杜歌人」「個性の杜」

〈俳句〉

第四十七回宮城県俳句賞（一月四日）

「瘤の歳月」伊藤一男（仙台市）

準賞に「縄文の太柱」平山北舟（仙台市）、「一草一花」坂下遊馬（亘理町）の二作。

令和五年鴻賞　佐藤あさ子（仙台市）

第四十二回鷹新葉賞　鶴岡行馬（涌谷町）

第五十三回宮城県俳句大会（四月二十九日）

主催：宮城県俳句協会、（株）河北新報社

東北大学名誉教授の長谷川公一を講師に迎えて開催。兼題の部

【河北新報社賞】

母の日の母の眼のなんと澄む
平塚孝子（仙台市）

【宮城県知事賞】
大蛸の桶を這い出す春の昼　遠山典子（松島町）
【宮城県俳句協会賞】
底無しの海などあらず冬銀河　石の森市朗（石巻市）
席題の部（席題＝長）
【宮城県俳句協会賞】
長閑さや広げて洗ふ赤ん坊　佐々木一朱実（仙台市）

佐藤鬼房記念第五回塩竈市ジュニア俳句コンクール

【佐藤鬼房賞】
裁ちばさみ開く重さや春の星　小島わこ（青森県）
【ジュニア俳句大賞】
新しいスニーカーを履き冬を踏む　手代はるか（学習院女子中等科）

俳人協会宮城県支部創立四十周年記念総会（五月二十八日）
会場：ホテルメトロポリタン仙台
坂本宮尾（公社）俳人協会理事を迎えて開催。

第七十二回登米芭蕉祭俳句大会
六月に兼題の部のみ行われた。
【宮城県知事賞】
彫り浅き童女の二文字花菫　及川ななを（登米市）
【宮城県俳句協会賞】
飛花落花錆濃き伊達の鋳銭釜　伊藤一男（仙台市）

大崎地域俳句大会（十月一日）
【宮城県俳句協会長賞・首都圏大崎連絡協議会長賞】
梨むいて一切れくわえ万歩計　福土利江子（大崎市）
【宮城県知事賞】
加護坊は耕土の臍や秋澄めり　木村螢雪子（大崎市）

第三十回「壺の碑」全国俳句大会（十月七日）
多賀城創建千三百年を記念する**奥の細道サミット**と同日開催となった。**「奥の細道と多賀城　ことばのシンポジウム」**では高野ムツオが講演。詩人の田原（でんげん）、俳人の西村和子・高柳克弘・渡辺誠一郎がパネルディスカッションを行った。

第六十九回松島芭蕉祭並びに全国俳句大会（十一月十二日）
法要にも一般参加者を入れた従来の形で開催された。招聘選者は、朝日新聞俳壇選者の小林貴子・高山れおな。
【松島町長賞・小林貴子特選第一席】
入る風に背筋を正す翁の忌　篠沢亜月（仙台市）
【松島町長賞・高山れおな特選第一席】
百畳をわたる読経や冬の蠅　坂下遊馬（亘理町）

○句集
『山巓』佐々木三太郎
『金木犀』小野正光
『鸚哥の唄』塚本万亀子

『夜景の奥』浅川芳直

『俳人協会宮城県支部 創立四十周年記念誌』

俳人協会宮城県支部

○俳誌

「小熊座」「滝」「駒草」「鷹みやぎ」「飛行船」「しろはえ」「宮城野」「冬林檎」「花野」「むじな」

〈川柳〉

第五十回宮城県川柳大会（四月十六日）

会場：東京エレクトロンホール宮城

十六代尾藤川柳を招いて開催された。

【宮城県川柳連盟賞】

窓という窓に指紋をつける春　　鎌田京子（仙台市）

第七十二回東北川柳大会（九月二十四日）

主催：川柳宮城野社、（株）河北新報社

会場：東京エレクトロンホール宮城

【河北賞】

ニンゲンを休んで森を嗅ぎに行く　　大石一粋（秋田県）

【川柳宮城野社賞】

三日月を目に宿してるあねいもうと　　西恵美子（白石市）

第五十回河北川柳投句者大会（十一月五日）

主催：（株）河北新報社、川柳宮城野社

会場：東京エレクトロンホール宮城

事前出題は「実る」「色」「ドキドキ」。席題は「応援」。特別課題の「手」では〈図書館で花咲く二人だけの手話〉浅野夏希（仙台市）が一位となった。

【河北新報社賞】

八冠の願いが実り国が沸く　　庄司芳次（仙台市）

【川柳宮城野社賞】今野弥生（仙台市）

【宮城県川柳連盟賞】深谷みのり（仙台市）

○句集

『わらせん』三浦幸司

○柳誌

「川柳宮城野社」

篠沢亜月（しのざわあづき）

（宮城県芸術協会理事）

洋楽

新型コロナウイルス感染症の感染対策によって、これまで長く行動制限が続き、音楽活動への影響は大きかった。いまだ感染症が蔓延する前と同様の状況に戻っていないものの、県内では、屋内・屋外・プロ・アマチュアを問わず、以前と同程度の催しが開かれるようになってきた。例えば、六月には「とっておきの音楽祭」、九月には「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」などが通常開催に戻っている。市民、学校関係の活動をみると、開催地として、仙台市を中心に大崎市、岩沼市など県内全域に広がっている。

昨年には、第八回仙台国際音楽コンクールが開催されたが、そのコンクールの入賞者らは、仙台市を中心として活躍した。同コンクールは、単に開催することに留まらず、関係者に活躍の場を提供し、市民に対して質の高い演奏を披露するといった人材循環型の企画は、地域の音楽文化を高めることにつながった。

令和五年は、宮城県にゆかりのある音楽家の逝去が目立った。三月二十八日には、作曲家の坂本龍一が七十一歳で死去した。坂本は、脱原発運動にも力を注ぎ、東北ユースオーケストラを立ち上げるなど、東日本大震災後の復興にも関わった。指揮者の外山雄三は、七月十一日に九十二歳で死去。外山は、仙台フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督を十七年務め、第一・二回仙台国際音楽コンクールの運営委員長としても活躍した。八月十五日には、仙台フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者を務めた飯守泰次郎が八十二歳で死去した。

東日本大震災後の復興に関係する演奏会は、現在もなお、多く見受けられた。三月十一日には、「祈りのコンサート」が仙台市青葉区の電力ホールで開催され、モーツァルトのレクイエムが演奏されるなど、各地で開催された。

一．オーケストラ

（一）仙台フィルハーモニー管弦楽団

（以下、「仙台フィル」と省略）

令和五年、仙台フィルは創立から五十周年を迎えた。報道関係では、河北新報の文化欄では、歴代のコンサートマスターや、初代常任指揮者である片岡良和へのインタビューなどの特集記事を掲載した。また、フリーライターの須永誠は、

三十年以上にわたって仙台フィルを取材し、「杜のオーケストラ 仙台フィル50年の物語」を音楽之友社から出版した。

創立五十周年記念演奏会としては、五月二十一日に開催された演奏会が、まずは注目された。バイオリニストの五嶋みどりがチャイコフスキー作曲バイオリン協奏曲を演奏した。指揮は高関健。年内最後には、十二月十九日にオーケストラアンサンブル金沢と合同の「フレンドシップコンサート」を東京エレクトロンホール宮城で開催した。指揮は山田和樹で、リヒャルト・シュトラウス作曲「アルプス交響曲」などが演奏された。

定期演奏会など、核となる活動に加えて、時代の潮流の中で様々な試みがみられた。お笑いコンビとのコラボレーションや、未就学児と家族が一緒に楽しむことができるコンサート、翌年の令和六年に向けて、アニメーションの楽曲に特化した演奏会の企画などが注目された。

令和五年あたりからは、感染対策によるこれまでの行動制限が緩和されつつあり、ほぼ従来の状況に戻っていった。その中で、日本人作曲家の作品を集めた特別演奏会「日本のオーケストラ音楽展」が二月二十三日に日立システムズホール仙台で開催された。指揮者は高関健。曲目は武満徹、間宮芳生、三善晃の作品が並んだ。これは、令和二年に開催する予定であった演奏会である。

三月十七・十八日には、仙台フィルの第三百六十二回定期演奏会で、飯守泰次郎が常任指揮者最後の演奏会で指揮をした。ブルックナー作曲交響曲第七番などが取り上げられ、演奏終了後には、マスク着用ながら「ブラボー」などの声援が掛けられた。

（二）その他のオーケストラ

坂本龍一が音楽監督を務めた東北ユースオーケストラの演奏会が、三月二十四日に名取市文化会館であった。被災した宮城・岩手・福島の子供たちが、マーラーの交響曲第五番などを演奏した。指揮は柳沢寿男、俳優の吉永小百合も子供たちが作成した詩などの朗読で参加した。

日本とベトナムの外交関係樹立五十周年を記念して、日越祝祭管弦楽団の石巻公演が十月七日にマルホンまきあーとテラスで行われた。このオーケストラは、ベトナム国立オペラ・バレエ交響楽団や、東京フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルなどに所属する演奏家によって構成されている。指揮はドン・グアン・ビンで、ショパン作曲のピアノ協奏曲第一番のソリストは、グエンビエット・チュン。

二．器楽・室内楽

（一）室内楽

ミュージック・フロム・パトナは、令和五年、宮城野区文化センターで四回の公演を行った。二月八日に「つみあげる」と題した令和四年度の第四回公演が行われ、管楽器を中心としたプログラムで、戸田敦、西沢澄博、ダビット・ヤジンスキー、水野一英らが出演した。令和五年度の第三回公演で通算三十七回目となり、「きわめる」をテーマにモーツァルト作曲のピアノ四重奏曲第一番などを、三宅進やフェデリコ・アゴスティーニ（元イ・ムジチ合奏団コンサートマスター）、川本嘉子、津田裕也が演奏した。

仙台フィル首席チェロ奏者の吉岡知広が企画・出演する演奏会シリーズ「イズミノオト」は、日立システムズホール仙台で三月五日に開催された。リヒャルト・シュトラウスの作品を取り上げ、ピアノの北端祥人らが出演した。また、この企画と関連する「イズミノオトドケコンサート」は、九月から十一月にかけて仙台市内の学校訪問や各市民センターで計六回の公演を行った。

小池まどかのジャン・マリー・ルクレール（一六九七～一七六四）のバイオリンソナタ全曲演奏会の第四回を四月二十九日に、第五回を十一月十一日に仙台市青葉区のスターダストで開催した。

仙台市出身の海老名遥香（ピアノ）と湯浅江美子（ビオラ）によるデュオリサイタルが、仙台市戦災復興記念館で五月二十三日に開催された。

アンサンブル・コア・ドゥ・ロゾー（ダビット・ヤジンスキーら）は、宮城野区文化センターパトナホールで六月四日に木管三重奏の演奏会を開催し、バッハ作曲「ゴールドベルク変奏曲」を演奏した。

（二）ピアノ

ピアニストの山川充は、四月二日に太白区文化センター楽楽楽ホールでリサイタルを開き、バロックから現代音楽までのレパートリーを取り上げた。

ピアニストの浅野繁と浅野純子が運営する「館ムジカ」が十周年となり、四月三十日に日立システムズホール仙台で記念コンサートを開催した。

ピアニストの高橋麻子が企画・出演するコンサートシリーズ「音楽の旅」が、九月二十四日に常盤木学園シュトラウスホールで行われた。バイオリンの小川有紀子とともに、ヤナーチェク作曲バイオリンソナタなどを演奏した。

ピアニストの小平圭亮は、十一月四日に、太白区文化センター楽楽楽ホールでリサイタルを開催し、ショパン作曲バラード第三番やリゲティの作品などを演奏した。

三．声楽・合唱

（一）声楽

仙台オペラ協会は、歌劇のアリアを集めたガラコンサート「春のインテルメッツォ」を宮城野区文化センターで二月十二日に開催した。また、同協会は、第四十七回公演「ドン・ジョバンニ」を日立システムズホール仙台シアターホールで九月十七・十八日に開催した。指揮は佐藤寿一。演出は伊藤み弥。ダブルキャスト公演で、ドン・ジョバンニ役は、鈴木集と深瀬廉が演じた。

ソプラノ歌手の高橋絵里は、後期バロックの教会音楽を取り上げたコンサート「歌え、魂よ」を企画し、八月二十五日に宮城野区文化センターパトナホールで開催。高橋のほかにチェンバロの梅津樹子らが出演した。

メゾソプラノ歌手の遠藤恭子は、自身最後のリサイタル「歌曲の夕べ」を九月十七日に仙台市青葉区のピアノサロン・ルフランで行った。ピアノは、田村淳一。

（二）合唱

「男の合唱まつり.inみやぎ」が、一月九日に日立システムズホール仙台で開催され、山形・宮城の両県から二十二団体、約二百五十人が参加した。

混声合唱団「萩」は、十月二十二日に作曲家・岡崎光治の没後五周年記念コンサートを日立システムズホール仙台で開催した。指揮は、末光眞希、斎藤広子、平川敬子。ピアノは石垣弘子。

令和四年に死去した宮城教育大学名誉教授・大泉勉の一周忌追悼演奏会が、十二月三日に日立システムズホール仙台で開催され、いずみオッチェンコール、仙台オペラ協会、仙台日伊協会、ＮＨＫ少年少女合唱隊が参加した。

四．作曲

「東北の作曲家２０２３ アンデパンダン展」が三月十三日に宮城野市文化センターパトナホールで四年ぶりに開催された。柴田誠太郎、高橋侑子、門脇治、石川浩、宮城純一、岡部富士夫、藤原義久が作品を披露した。

未来の作曲家コンサートin東北２０２３（主催：ＹＣＣ東北）は、八月二十日に仙台市戦災復興記念館で開催された。選出された二十作品（プレコンサート選出八作品を含む）を、クラリネットはダビット・ヤジンスキー、ピアノは北端祥人、長南敦也（プレコンサート）が演奏した。

五．コンクール

令和七年に開催される第九回仙台国際音楽コンクールの組織体制が発表され、運営委員長に植田克己、審査委員長に野

平一郎（ピアノ）と堀米ゆず子（バイオリン）が就任した。

第六十七回全東北ピアノコンクール本選は、宮城野区文化センターパトナホールで五月二十八日に開催され、宮城県仙台第三高等学校の長沼楓が、最高賞及び文部科学大臣賞を受賞した。

第三十八回宮城県管打楽器ソロコンテスト（主催：宮城県吹奏楽連盟、河北新報社）が、六月四日に中新田バッハホールであり、予選を通過した七十九人が参加した。最高賞の宮城県吹奏楽連盟会長賞を仙台市立北仙台小学校の佐藤諒弥、河北新報社賞を宮城県仙台第二高等学校の沢田碧海がそれぞれ受賞した。

第七十七回瀧廉太郎記念全日本高校声楽コンクールは、大分県竹田市で十月十三日から十五日まで開催され、常盤木学園高等学校の蛭田優莉里が、優良賞を受賞した。

全日本合唱コンクール全国大会が、香川県高松市で十月二十九日に開催され、仙台市立第一中学校が金賞を受賞し、混声合唱の部の第三位に輝いた。

第三十五回宮城県合唱アンサンブルコンテスト（主催：宮城県合唱連盟）は、十二月十六・十七日に広瀬文化センターで開催され、計六十三団体が出場した。仙台市立仙台青陵中等教育学校合唱部、宮城県仙台南高等学校音楽部合唱団 昴、仙台室内合唱団「紡輝」の三団体は河北新報社賞を受賞し、全国大会に出場が決まった。

六．受賞

仙台フィル首席オーボエ奏者の西沢澄博は、令和五年度宮城県芸術選奨を受賞した。三月二十三日に開催したリサイタルなどの功績が評価された。

七．イベントなど

県民ロビーコンサートは、宮城県庁で定期的に毎月一回開催された。スペシャルコンサートとして、八月は熊谷駿と齋藤めぐむが、十月はさとう宗幸と榊原光裕が出演した。

日立システムズホール仙台の三階ギャラリーで、昭和の県内の音楽文化を振り返る企画展が二月十七日から二十六日まで開催された。この企画展は、レコード全盛期の一九七〇年代に焦点を当て、センター所有のＥＰ盤やＬＰ盤などを展示した。

宮城野区文化センターパトナホールで、平日の昼に開催される「ワンコインコンサート」が一月二十六日に開催され、ピアニストの山川充が出演した。このコンサートは平成二十六年一月に始まり、今回の開催で五十回を迎えた。

東日本大震災からの復興イベントとして開催されている「第九回 こどもの夢ひろば〝ボレロ〟」は、七月二十九日・

三十日に、日立システムズホール仙台で行われた。ピアニスト・小山実稚恵の企画で、オーディションを通過した子供たちと共演した。

定禅寺ストリートジャズフェスティバルは九月九日・十日に行われ、ステージは勾当台公園、定禅寺通、西公園、藤崎周辺に設置され、四百十五組、二千九百五十五人が参加した。

第十七回仙台クラシックフェスティバル（せんくら）が九月二十九日から十月一日にかけて開催され、津田裕也（ピアノ）、伊藤圭（クラリネット）らが出演し、フィナーレ公演では、松本宗利音が指揮する仙台フィルが、シャノン・リーをソリストに迎えて、シベリウス作曲バイオリン協奏曲などを演奏した。

五月に開庁した大崎市市役所本庁舎で、十月六日に初のロビーコンサートを開催し、安田智彦グループがジャズの生演奏を披露した。

市民によるベートーヴェン作曲交響曲第九番の演奏会は、岩沼市、石巻市、角田市であったが、そのうち角田ベートーヴェン第九「喜びの歌」を歌おう会の公演は、資金などの理由から、第三十回目で終止符を打った。

第四十五回東北吹奏楽の日演奏会（主催：東北吹奏楽連盟、河北新報社）が、十二月二十四日にトークネットホール仙台であり、計二十六の楽団が参加した。

八．その他

一月に、「令和四年度ふるさとづくり大賞」の地方自治体表彰（総務大臣表彰）に加美町が選出された。同町は、中新田バッハホールを核として、バッハホール管弦楽団を創設し、その活動と人的交流などが評価された。

仙台市は三月二十日、新音楽ホールと東日本大震災中心部メモリアル拠点の複合施設について、二〇三一年の開館を目指す整備スケジュールを明らかにした。

歌手のさとう宗幸は、デビュー四十五周年を迎え、トークネットホール仙台で「はじまりのうた」と銘打った記念コンサートを開催した。

仙台フィルコンサートマスターの西本幸弘は、「ヴァイオリンエイブル ディスカバリー Vol.9」のライブ録音をCDにしてフォンテックより発売した。この録音は、令和四年十一月に宮城野区文化センターパトナホールでの公演を収録したものである。

小山和彦（こやまかずひこ）
（作曲家・宮城学院女子大学教授）

邦楽・芸能

古典芸能

五月に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが五類感染症となり、ようやく通常の音楽活動が戻ってきた雰囲気がある。以下に、令和五年の古典芸能の公演について、開催状況を「雅楽」、「能楽（能・狂言）」、「歌舞伎」、「文楽」の順に報告する。

雅楽

仙台市青葉区の大崎八幡宮で、八月十二日の夜、御鎮座記念祭の後に「雅楽の夕べ」が開催され、今様「白薄様」、神前舞楽「青葉の舞」、管絃「平調音取」「皇麞急」「陪臚」、御神楽「其駒―人長舞」、神前神楽「萬代の舞」、退出音声「長慶子」が演奏された。また翌十三日には、大崎八幡宮広場特設舞台において、「杜の都の音楽祭 みんなで雅楽を楽しむ会」が開催された。平成二十三年に東日本大震災からの復興を祈念して始まった「雅楽の夕に、」に代わる新たな催しで、杜の都の音楽祭実行委員会主催、伶楽舎・大崎八幡宮の協力によるものである。東京の雅楽団体である伶楽舎と雅楽愛好者、大崎八幡宮の職員が、「平調音取」「越天楽」、童歌「あんたがたどこさ」、舞楽「胡飲酒破」、新曲雅楽「カラ坊風に乗る」（芝祐靖作曲）が演奏された。来場者が楽器演奏を体験するコーナーもあり、雅楽を身近に楽しむ良い機会となったと思われる。

大崎八幡宮広場特設舞台で開催された「杜の都の音楽祭 みんなで雅楽を楽しむ会」

能楽

白石市の碧水園能楽堂で、一月十六日と十七日に、市内の小中学生を対象とした能楽公演が行われ、約四百七十人の児童・生徒が、狂言「柿山伏」と、能「土蜘蛛」を鑑賞し、狂

言の体験も行った。

二月五日、白石市の碧水園能楽堂で「碧水園能 喜多流公演」が開催された。塩津圭介の解説の後、佐藤陽による仕舞「巻絹」と大島輝久による仕舞「大江山」、石田幸雄・中村修一による狂言「富士松」、佐々木多門のシテ、友枝真也のツレによる能「通小町」が上演された。

三月十一日、能-ＢＯＸで仙台市能楽振興協会の「第十六回謡曲大会」が四年ぶりに開催され、十一団体が日頃の稽古の成果を披露した。

東京都在住の観世流能楽師の八田達弥と森田流笛方の寺井宏明による「能楽の心と癒やしプロジェクト」は、三月十一日に気仙沼市鹿折で行われた「東日本大震災十三回忌追善法要」で「松風」を奉納した。

五月二十日、電力ホールで「第二十五回仙台青葉能」が開催された。人間国宝の友枝昭世のシテによる喜多流能「清経」、人間国宝の野村万作らによる和泉流狂言「空腕」、佐々木多門のシテによる喜多流能「鍾馗」が上演された。

夏休みに能-ＢＯＸで開催される山中迂晶による「こどものための能講座」は七月二十一日から八月十一日までの日程で実施された。謡と仕舞の稽古を六回受けた参加者が、八月十一日に発表会で稽古の成果を披露した。新型コロナウイルス感染症の影響により中止していた、こどもたちによる地謡も復活し、賑やかな発表会となった。

八月五日、白石市の碧水園能楽堂で「碧水園能楽堂特別公演 能・狂言鑑賞会」が開催され、観世喜正による素謡「神歌」、善竹十郎らによる狂言「栗燒」、小島英明のシテによる能「百萬」が上演された。

八月十五日から三日間、栗原市の栗原文化会館で「能の仕舞・謡 親子教室」が開催された。文化庁の伝統文化親子教室事業の一環で、喜多流能楽師の内田成信と佐藤寛泰の指導で、約三十人の参加者が謡と仕舞を体験した。

九月十六日、「登米薪能」が登米市登米町の伝統芸能伝承館「森舞台」で、四年ぶりに通常開催された。集まった多くの観客の前で、登米謡曲会の会員により、狂言「附子」や能「橋弁慶」などが上演された。

十一月五日、能-ＢＯＸで仙台市能楽振興協会による「令和五年 囃子と仕舞の会」が開催され、仙台架松会、仙台喜

「こどものための能講座」発表会の様子
（於：せんだい演劇工房 能-ＢＯＸ）

宝会、東北大学喜多会、仙台囃子の会、辰謡会、仙台花修会、仙台康謡会、仙台金春会などの団体が日頃の稽古の成果を披露した。

十一月二十三日、日立システムズホール仙台シアターホールで「第一回 仙臺能」が開催された。平成十一年に始まった「市民能楽講座」が第四十回を迎えるにあたり名称を変更したもので、会場はほぼ満席となった。観世流能楽師の木原康之による「お話し」と仕舞「淡路」、三宅近成のシテによる狂言「梟山伏」、浅見重好のシテ、木原康太のツレによる能「巻絹」が上演された。

新型コロナウイルス感染防止のために休止していた、能―BOXの「能のおけいこ体験講座」が復活し、喜多流の講座が十月から十二月までに五回実施され、十二月十六日に発表会が行われた。

「第１回 仙臺能」チラシ

歌舞伎

三月十九日、名取市文化会館大ホールで「中村勘九郎 中村七之助 春暁特別公演二〇二三」が二回公演の形で開催された。文化庁による子供文化芸術活動支援事業により、県内在住の小学生以上で十八歳以下の二百六十名が無料で招待された。役者によるトークコーナーで始まり、「元禄花見踊」、「仲蔵狂乱」、「相生獅子」が上演された。

七月十五日、東京エレクトロンホール宮城で「松竹大歌舞伎」の公演が四年ぶりに開催された。昼夜二回公演で、『鬼一法眼三略巻』より「菊畑」と、河竹黙阿弥の『新古演劇十種』より「土蜘」が上演され、尾上松緑をはじめとする歌舞伎役者の演技に観客は魅了された。

十月二十八日、東京エレクトロンホール宮城で「十三代目市川團十郎白猿襲名披露巡業」の公演が開催された。昼夜ともに口上と「君が代松竹梅」、「毛抜」が上演された。

文楽

毎年秋に行われる「人形浄瑠璃 文楽」の公演は、文楽協会創立六十周年記念と銘打たれ、十月十七日に電力ホールで

開催された。昼の部は『義経千本桜』より「椎の木の段」と「すしやの段」が、夜の部は『桂川連理柵』より「六角堂の段」「帯屋の段」と「道行朧の桂川」がそれぞれ上演された。

その他

仙台市青葉区の常設寄席「魅知国定席 花座」が四月に開館五周年を迎えた。新型コロナウイルスの影響で断続的な休館を余儀なくされた時期もあったが、東北での寄席文化の定着に大きく貢献している。

小塩（おしお） さとみ
（宮城教育大学　教授）

民俗芸能

民俗芸能は年中行事で演じられるだけでなく、舞台公演や地域おこしのイベントなどでも演じられる。五月に新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが五類感染症となり、芸能活動の規制もなくなったため、久しぶりの開催となった催事も多く見られた。本稿では、令和五年の民俗芸能公演や大会などについて概観し、紙面の許す範囲でそれ以外の活動も報告する。

一月八日、白石市古典伝承の館「碧水園」で舞台開きが行われ、箏や尺八、日本舞踊などと共に、白石市指定民俗文化財である榊流大町神楽も参加した。

二月十二日、登米市の登米祝祭劇場大ホールで「第十六回登米市民俗芸能大会」が開催され、笹流加賀野神楽、佐沼鹿踊、赤谷神楽、岡谷地南部神楽、長下田神楽、加茂流舘神楽、小島願人踊などが参加した。

「第35回民俗芸能のつどい」川前鹿踊・川前剣舞
（於：日立システムズホール仙台、写真提供：仙台市教育委員会）

二月十一日、仙台市教育委員会主催「第三十五回民俗芸能のつどい」が日立システムズホール仙台シアターホールで開催され、若林区の七郷神社丹波神楽、青葉区の大崎八幡宮の能神楽、川前鹿踊・川前剣舞、太白区の秋保馬場の田植踊が披露された。なお、当日の公演のダイジェスト映像がYouTubeで公開されている。

三月五日、名取市震災メモリアル公園で東日本大震災から十二年になるのにあわせて「3・11追悼演奏」が行われ、県内の和太鼓グループ六団体が演奏を行い、フィナーレには、宮城県太鼓協議会の統一曲「鼓音」が合同演奏された。

四月二十二日、栗原市の風の沢ミュージアムでの二〇二三年度の企画展「つづり思考」のオープニングセレモニーで、栗原市内の中野神楽・栗原神楽・城生野神楽・川北神楽の若

「第35回民俗芸能のつどい」秋保馬場の田植踊
（於：日立システムズホール仙台、写真提供：仙台市教育委員会）

手による団体である南部神楽ユニットの神友楽が「五穀舞」と「須佐之男の尊の乱行の場」を披露した。同団体は六月四日にも風の沢ミュージアムで「神楽公演」を行った。

四月二十九日、岩手県一関市の厳美中学校体育館で「第五十回記念岩手県南・宮城県北神楽大会」が四年ぶりに開催され、宮城県からは、栗原市の城生野神楽など五団体が参加した。

五月五日、丸森町の斎理屋敷で「丸森こどもたいこまつり」が開催され、丸森ばやし保存会、丸森夢太鼓、角田市小田地区の子供とくら太鼓が演奏を披露した。

五月十二日、太白区の秋保温泉で先進七カ国（G7）科学技術相会合の歓迎イベント「アキウナイト」が開催され、秋保湯元の田植踊や、すずめ踊りが披露された。

五月二十日・二十一日に、「第三十九回仙台・青葉まつり」が四年ぶりに通常開催され、初日の宵祭では、すずめ踊りが青葉区の勾当台公園市民広場や定禅寺通、アーケード街で行われた。

六月十一日、「第十七回神楽共演石越大会」が登米市石越体育センターで開催され、石越町の長下田神楽・赤谷神楽、登米町の岡谷地南部神楽、栗原市築館の城生野神楽、豊里町の上町法印神楽、栗原市の鶯沢神楽など十団体が参加した。

六月十七日・十八日に青森県青森市で「東北絆まつり」が四年ぶりに開催され、宮城県からは仙台すずめ踊りがパレードに参加した。

六月十八日、栗原市一迫の山王史跡公園あやめ園で「第三十五回みちのく鹿踊大会」が五年ぶりに開催され、栗原市一迫の早川流真坂鹿踊保存会、早川流清水目鹿踊保存会、登米市迫町の行山流佐沼鹿踊伝承会、仙台市青葉区の鹿踊・剣舞保存会などの団体が参加した。

六月二十五日、栗原市一迫の山王史跡公園あやめ園内特設ステージで「第三十三回あやめ祭り神楽大会」が開催され、栗原市内の館下神楽、城生野神楽、桜田神楽会、川北神楽保存会が出演した。

七月十六日に栗原市の旧富野小学校体育館で「第四十三回みちのく神楽大会」が、審査表彰をなくした「神楽鑑賞会」として開催された。城生野神楽鶏舞クラブ、城生野神楽、中野神楽、長下田神楽、赤谷神楽、川北神楽、鶯沢神楽、館下神楽、栗原神楽などが参加した。

七月二十九日・三十日に仙台市の宮城野通で「第十九回夏まつり仙台すずめ踊り」が四年ぶりに開催され、二日間でのべ約六十五団体が踊りを披露した。

七月三十日、女川町海岸広場で「第五十六回おながわみなと祭り」が開催され、前年より復活した「海上獅子舞」には十団体が参加した。

九月三日、石巻市の遊楽館かなんホールで「第四十四回石巻地方神楽大会」が開催され、樫崎法印神楽、江島法印神楽、福地法印神楽、雄勝法印神楽、大沢南部神楽、女川法印神楽、牡鹿神楽古実会、飯野川法印神楽の八団体が出演した。

九月十七日、「登米秋まつり神楽大会」が伝統芸能伝承館「森舞台」で開催され、岡谷地南部神楽と上沼加茂流法印神楽が出演した。

十月七日・八日に「第二十六回みちのくＹＯＳＡＫＯＩまつり」が開催された。一チーム百五十人までの参加を認める通常規模の開催は五年ぶりで、仙台市内の六会場（市民広場や勾当台公園ほか）で全国から集まった百七チームが参加した。

十月十四日、栗原市若柳の平野神社で「第四十三回平野神社奉納神楽大会」が四年ぶりに開催され、赤谷神楽、栗原神楽、鶯沢神楽、城生野神楽、館下神楽、長下田神楽などの団体が参加した。

十月二十八日、仙台市の榴岡公園芝生広場で「れきみん秋祭り二〇二三」が開催され、馬場の田植踊、川前の鹿踊、生出森八幡神楽、雄勝法印神楽、岩手県花巻市の早池峰岳神楽が披露された。

十月二十九日、栗原市金成の延年閣で「南部神楽伝承推進協議会特別公演」が開催され、赤谷神楽、鶯沢神楽、長下田神楽、城生野神楽（特別出演）などの団体が出演した。

十一月二十六日、登米市の豊里公民館で「第十七回登米市民俗芸能大会」が開催され、大網おいとこ踊、森邑おいとこ踊、長谷山打囃子、長谷観世音虎舞、小島願人踊、佐沼鹿踊、とよま囃子・とよま木遣り、加賀野神楽、山ノ神神楽、嵯峨立神楽、赤谷神楽、長下田神楽、加茂流舘神楽、日高見流浅部法印神楽、岡谷地南部神楽、上町法印神楽などが出演した。

十二月十七日、宮城教育大学講堂において「二〇二三年度宮城教育大学民俗芸能交流発表会」が開催され、大学の授業で日本の芸能を学んだ二つのグループと、「ハネコ踊り保存会」、「仙台鬼剣舞同好会」、「連坊太鼓の会 雛鼓」の学外の三グループ、特別賛助出演として石巻市桃生町の寺崎はねこ踊り保存会と岩手県奥州市の大森神楽保存会が発表を行った。

「宮城教育大学民俗芸能交流発表会」での授業成果発表「はねこ踊」（於：宮城教育大学講堂）

地域の年中行事に関しても、中断を経て本年に復活開催されたものが多数あった。

四月二日、岩沼市早股地区の熊野神社で例大祭があり、四年ぶりに早股熊野神楽が奉納された。

同日、栗原市金成の白山神社で例大祭があり、国の重要無形民俗文化財に指定されている「小迫の延年」が四年ぶりに奉納された。

四月九日、山元町中浜区集会所で中浜天神社の祭事が行われ、十三年ぶりに中浜神楽が奉納された。津波で流出した楽器や衣装を新調しての復活は喜ばしいことであった。

四月二十九日、加美町中新田地区の伝統行事である「初午まつり」が四年ぶりに開催され、県の民俗文化財「火伏せの虎舞」が披露された。

十月十四日・十五日に気仙沼市本吉町山田地区で「山田大名行列」が五年ぶりに開催され、五穀豊穣を祈りながら地元の男衆約八十人が地域を練り歩いた。今回が創始二百回目となった。

学校での民俗芸能継承活動もさまざまに行われている。

女川町立女川小学校では、五年生の児童が「女川小獅子振り隊」を結成し、校内で獅子振りを披露している。

大崎市立高倉小学校と大崎市立西古川小学校は三月で閉校となったが、閉校式で高倉小学校は三十年続いた「高倉一番太鼓」を、西古川小学校は伝承活動で学んだ地域の保柳神楽をそれぞれ演じた。

民俗芸能の関わる門戸を広げ、継承方法を考える「仙台げいのうの学校」が実施された。一期は二月から三月にかけての五日間の講座で、仙台市内外の芸能伝承者と市民を募り、芸能鑑賞や交流を通じて民俗芸能の関わり方を討議した。二期は仙台市市民文化事業団の助成事業として、七月から十月にかけて講座や現地鑑賞を五日間行い、多様な主体による支援のあり方を検討した。

小塩（おしお）　さとみ
（宮城教育大学　教授）

三　曲

箏や三絃、尺八など三曲の響きが各所で聴かれるようになり、ようやく日本のあるべき姿に戻った雰囲気がある。伝統音楽の三曲は、たゆまず稽古を続けなければ、その美しい音色が保てないといわれる。新型コロナウイルス感染症の恐怖から解放され、一気に日頃の稽古の成果を発揮せんばかりに演奏会が開かれた。仙台三曲協会の定期演奏会においては、有観客での開催となった。観客の拍手に演奏者は勇気づけられ、一体感が生まれた演奏会であった。演奏者にとっては、稽古の積み重ねに大きな意義をもたらすものであった。

小中学校での三曲の授業においても、感染症が落ち着き、鑑賞だけでなく体験もできるようになった。

とある児童の素直な感想を紹介する。

「六段の調べで引き込まれました。私は尺八の音が気に入りました。滑らかな感じでいい音だなと思いました。やはり日本のものって本当に素敵だし大切にしていこうと思いました。」

子供の心に響いた日本の楽器の音色。そして守っていこうという気持ちが伝わり安堵した。

十二月には、庄子為山氏を中心に尺八だけの授業を仙台市立郡山中学校で行い、七クラス計百七十八名が五日間にわたって各二時間挑戦した。感想の一端を紹介。

「穴が少ないのは逆に難しい。」

「尺八の生を初めて聞いた。ビブラートに日本を感じた。吹き方は自由度が高い楽器だ。」

「尺八は人を感動させる楽器だ。」

「受験後は尺八をやりたい。音が出たのに達成感がある。」

実に本質をついている。庄子氏は、これと同様の授業を仙台市立東長町小学校の五・六年生に、計四日間実施した。彼は大病を患ったが、熱い思いは間違いなく児童に伝わった。改めて日本の楽器の音色を伝えることの大切さを児童から教えられ、励まされたものとなった。

異色の演奏会としては、十一月四日、ＮＨＫ邦楽技能者育成会五十五期生による演奏会が仙台市で開催された。会員である仙台市の斎藤瑞香能氏の献身的な尽力により実現した。「東北民謡による組曲」など新鮮な感覚の曲を披露。

また前年、尺八で唯一の人間国宝になった野村峰山氏が竹の新選組を率いて白石市で公演を行った。

演奏会ではないが、九月から十一月にかけて計五回、「能−ＢＯＸゼミナール二〇二三 今をつらぬく古典の光」が仙台市市民文化事業団主催で開催された。世阿弥や能のほかに、「和楽器店が見る未来」と「昔の尺八」の二つの講座が開講。前者では、秋田県で和楽器を扱う「梅屋」の梅原久史氏が和

楽器の抱える課題をわかりやすく解説。後者では、国見昌史氏の尺八の変遷についてを実技を交えて講義。聞き手は宮城教育大学教授の小塩さとみ氏が務めた。会場であった能-BOXは倉庫を改修した能舞台であるが、今回の試みは日本の伝統文化に光を当てた晴れ舞台となった。

一月

三十一日　**三曲鑑賞授業**

会　場：仙台市立鹿野小学校（六年生 六十名）

演奏者：伊勢雅之園、千葉由美子、宮澤寒山

二月

七日　**三曲鑑賞授業**

会　場：仙台市立東二番丁小学校（四～六年生 八十名）

演奏者：伊勢雅之園、千葉由美子、宮澤寒山

十一日　**TAKE/To 第八回コンサート**

会　場：仙台市市民活動サポートセンター

演奏者：大友憧山、平澤真悟、相澤菫

三月

二十五日　**第九回子供の邦楽コンサート**

共　催：仙台三曲協会、（公社）宮城県芸術協会

会　場：戦災復興記念館

九月

三日　**第三十六回都山流尺八演奏会**

主　催：都山流宮城県支部

会　場：日立システムズホール仙台

演奏者：宮澤寒山ほか

十一月

十二日　**第六十五回仙台三曲協会定期演奏会**

会　場：トークネットホール仙台

演奏者：渡辺悦子ほか

二十四日　**第六回箏曲地歌演奏会**

会　場：戦災復興記念館

主　催：音緒の会

演奏者：増岡陽子ほか

二十六日　**和洋響鳴**

会　場：戦災復興記念館

演奏者：平澤真悟ほか

十二月

一日　**三曲鑑賞・体験授業**

会　場：仙台市立鶴谷東小学校（四・六年生 六十名）

演奏者：宮澤寒山、庄子為山、加賀煌山、林映子、頼住栄、本間典子、斎藤弘子、渋谷幸子

二日　**Koto in Sendai**

邦楽・洋楽ポピュラー琴コンサート二〇二三

会　場：仙台戦災復興記念ホール
演奏者：平澤真悟ほか

六～十四日　**尺八鑑賞・体験授業**
会　場：仙台市立郡山中学校（三年生 百七十八名）
演奏者：庄子為山、加賀煌山、狩野博山

十八日・十九日　**三曲鑑賞・体験授業**
会　場：仙台市立東長町小学校（六年生 百四名）
演奏者：庄子為山、狩野博山、加藤歌峰瑠、
内田歌嵯繭

二十日・二十一日　**尺八体験授業**
会　場：仙台市立東長町小学校（五年生 百二十八名）
演奏者：庄子為山、狩野博山

二十日　**三曲鑑賞・体験授業**
会　場：仙台市立西中田小学校（六年生 六十名）
演奏者：宮澤寒山、田村雅楽徽、曽根美登利、
吉崎喜寿静

宮澤寒山（みやざわかんざん）
（仙台三曲サポート会会長）

第 36 回都山流尺八演奏会

三曲鑑賞授業（仙台市立東二番丁小学校）

三曲鑑賞授業（仙台市立東長町小学校）

三曲鑑賞授業（仙台市立西中田小学校）

野村峰山・裕子による合奏（白石市碧水園）

長　唄

第六十回宮城県芸術祭　長唄演奏会

令和五年十月十五日
トークネットホール仙台（仙台市民会館）小ホール

演奏番組
一、都風流　杵家会（四挺四枚）
一、特別企画「長唄三味線の魅力」
　三味線文化譜宗家六世家元　杵家弥七
一、勝三郎連獅子　杵家会（四挺四枚）
一、喜三の庭　杵屋（二挺二枚）
一、竹生島　合同演奏（五挺九枚）

コロナ禍あけの昨年に引き続き、このたび二年目の開催となった。当日は大雨にもかかわらず、大勢の方々にご来場いただき、支えていただいていることに感謝したい。古典芸能を伝えて行くためには、高い敷居をなくし、体験型の公演などを楽しんでいただく事が、大切なことと確信した年であった。

今年は猛暑期間も長く、体調管理が大変な中での厳しい稽古であったが、出演者も努力を重ね盛会裡に終了した。

第 60 回宮城県芸術祭　長唄演奏会　合同演奏曲「竹生島」

特別企画では、三つ折り三味線を小さなケースからとり出して組立て、「サワリ」や「勘所」の説明など、ユーモアを交えながらの解説で、大変好評であった。そしてまた、感心と興味をもたらした。

第60回宮城県芸術祭　長唄演奏会
特別企画「長唄三味線の魅力」

長唄温習会　春の集い

四月二十三日、仙台市福祉プラザにおいて、長唄杵家会各社中の出演による、長唄演奏会が行われた。

演奏番組

合方集　吾妻八景　梅の栄　勧進帳　竹生島　鞍馬山

勝三郎連獅子　雨の四季

会員の杵家七可佐が、三味線・長唄音楽の魅力を広く、多くの人に知っていただきたいとの思いで令和四年に立ち上げた「ひろがれ三味線」プロジェクトの一環としての演奏会である。今後も三味線を身近に感じていただきたいとの考えのもと、さまざまな活動を展開していく予定である。

（杵家会東北支部　杵家七可佐　記）

青葉区中央市民センター老壮大学

令和五年二月十七日（日）、センターより依頼があり、アトラクションに参加した。三味線の仕組みについて・バチの持ち方・音の出し方などの話を交え、体験レッスンを行った。その後、八名で「神田祭」を賑やかに演じた。観客のほとんどの方は、三味線を目の前で見たり、聞いたり初めてということで、喜んでいただき、会場が一体となって、楽しいひと時であった。

青葉区中央市民センター老壮大学　「体験レッスン」

青葉区中央市民センター老壮大学　「神田祭」

八本松市民センターまつり

二十七回うぶすなフェスティバル

令和五年十一月三日（金）

八本松市民センター

「うぶすなフェスティバル」に参加

○曲　名：藤音頭（出演者：六名）

長唄三味線の演奏をとおして、町の活性化につなげたい。

杵家弥登鈴（きねいえやとすず）

（宮城県芸術協会邦楽部長唄副部長）

うぶすなフェスティバル　「藤音頭」

民　謡

令和五年、新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが五類に引き下げられたことにより、行動制限の措置が緩和され、民謡コンクールなどは、通常開催に戻りつつあった。しかし、新型コロナウイルスや東日本大震災の影響は、ことあるごとに随所で見られるようであった。また、少子高齢化による民謡離れは顕著に見られ、参加者数や鑑賞者数は、前年を下回る状況にある。そのような中ではあるが、令和五年に行われた民謡の活動を紹介する。

◎県内各地で実施されている保存会活動、民謡コンクール及び普及活動、演奏会、公演会等。

第二十二回塩釜甚句全国大会

【主催】塩竈市、塩釜甚句全国大会実行委員会
【会期】二月二十六日
【会場】塩竈市民交流センター遊ホール

鹽竈神社の門前町に根付いた塩釜甚句の唄と踊りの伝承と全国的な普及・発信を目的とする。塩釜甚句の保存活動は、文化庁ふるさと文化再興事業の地域伝統文化伝承事業に認定されている。約百六十人が参加した。

一般の部
優　勝　木村里美（山形県）

優勝者の木村里美
（提供：河北新報社）

第三十八回仙南長持唄大会

【主催】仙南文化協会連絡協議会
【会期】三月十二日
【会場】大河原町中央公民館

仙南長持唄は、婚礼の際の祝い唄として、仙南地域で伝承

されてきた。最大の特徴は、「唄」と「うけ」の二人一組で、二人の声が少しずつ重なって途切れないようにうたわれる。全体で八十一人（一般の部：五十六人、熟年の部：二十五人）の参加があった。

一般の部

優　勝　唄　西崎栄一（柴田町）

　　うけ　佐藤庄一（柴田町）

春の交流民謡まつり

【主催】宮城県民謡交流実行委員会

【会期】三月十九日

【会場】東松島市大曲市民センター

桃水会石巻支部、民謡徳萩会、桃川会参道会、民謡嘉若会、民謡尺八彗月会などの、約百人が参加。東日本大震災からの復興と、民謡活動の復活を願って行われる小規模活動。宮城県を中心とした民謡が七十二曲披露され、新たな春の訪れが祝われた。

第二回えんころ節全国大会in角田

【主催】第二回えんころ節全国大会実行委員会

【会期】七月三十日

【会場】かくだ田園ホール

この唄は新造船の祝い唄で、歌詞に「お斗蔵さまの樫の木を申しおろして船にはぎ」とあるが、角田市の斗蔵寺鏡内には、その歌詞が刻まれた碑が建っている。全体で百四人（一般の部：六十二人、熟年の部：四十二人）の参加があった。

一般の部

優　勝　大川あけみ（秋田県）

準優勝　水戸恵子（角田市）

第三十九回秋の山唄全国大会

【主催】涌谷町、涌谷町観光物産協会

【会期】十一月十二日

【会場】涌谷町勤労福祉センター

この唄は、涌谷地域の山林原野で農作業をしながらうたわれたもの。この唄をうたい、崑岳山の神に五穀豊穣を祈った。全体で百一人の参加があり、一般の部の優勝者は、崑岳山崑峯寺に山唄を奉納した。

一般の部

優　勝　市川元美（愛知県）

準優勝　佐藤美玖（山形県）

寿年の部

優　勝　熊谷昴佑（仙台市）

準優勝　髙橋秀明（大崎市）

少年少女の部
優　勝　畑中みそら（塩竈市）

篠峯寺に山唄を奉納する優勝者の市川元美
（提供：河北新報社）

民謡と共に五十五周年記念 吉目木栄リサイタル

【主催】吉目木栄後援会
【会期】十一月十九日
【会場】美里町文化会館

昭和四十三年から民謡をうたい始めて五十五周年を迎えた、宮城県出身の吉目木栄のリサイタルが開催された。全国各地の民謡や演歌、踊りが披露され、民謡ファンを楽しませた。

第三十八回さんさ時雨全国大会

【主催】宮城県民謡道連合会
【共催】第三十八回さんさ時雨実行委員会
【会期】十一月二十六日
【会場】大崎市岩出山文化会館「スコーレハウス」

「さんさ時雨」は格調高い祝い唄として全国的に知られる宮城県を代表する民謡。この民謡を正しく継承・普及させ、先人から歌い継がれてきた唄を次世代に引き継ぐことを目的とする。全国各地から九十二人の参加があり、「さんさ時雨」は着実に継承されている。

一般の部
優　勝　藤沢和子（塩竈市）
準優勝　大川あけみ（秋田県）

熟年の部
優　勝　西崎栄一（柴田町）
準優勝　佐藤勇（大崎市）

年少の部
優　勝　本郷愛里（仙台市）
準優勝　板橋ひなの（亘理町）

東日本大震災やコロナ禍により失われた時間を取り戻すために奮闘した。そして、民謡界に限られたことではないが、少子高齢化も大きな壁となり、私たちの不安を煽っている。

本原稿執筆中には、能登半島地震があった。東日本大震災を彷彿とさせる大災害に直面した方々にお見舞いを申し上げる。

二代目　藤本和夫（ふじもとかずお）
（民謡・端唄・小唄・現代楽　三味線演奏者）

優勝者の藤沢和子と参加者

演劇

五月八日、新型コロナウイルス感染症は、二類相当から五類へと位置づけを変更されたが、何かが変わったという実感はなく、「自己責任」というお馴染みの言葉が、またもや幅を利かせるようになった。

コロナ禍で自由に公演ができなかったフラストレーションを抱えていたが、温められてきた企画が続々と孵化したことは、今年の特徴と言えよう。

次の四作品が代表例であった。

- 劇場R『**キル**』（作：野田秀樹、演出：武田らこ）
  会期：三月四日・五日
  会場：せんだい演劇工房10-BOX別館 能-BOX
- 劇団I.Q150×ココロノキンセンアワー『**桜の森の満開の下**』（原作：坂口安吾、脚本：岸田理生、演出：笠井賢一）
  会期：六月二日・三日
  会場：エル・パーク仙台 ギャラリーホール
- YONEZAWA GYU OFFICE 大人のための演劇クラブ2023＝番外編＝『**ギラギラの月**』（作：中島淳彦、演出：渡部ギュウ）
  会期：六月二十二日～二十五日
  会場：せんだい演劇工房10-BOX box-1
- （一社）東北えびす渡部ギュウプロデュース公演『**組曲虐殺**』（作：井上ひさし、演出：渡部ギュウ、音楽：榊原光裕）
  会期：九月八日～十日・十三日～十七日
  会場：せんだい演劇工房10-BOX box-1

『キル』は、武田らこ、三島イチローが出演者を公募して集まった十八人が、野田秀樹の壮大な世界観に挑んだ作品。ダブルキャストで視点の異なる二つのバージョンを上演した。また、第二弾として、十一月四日・五日に、せんだい演劇工房10-BOX box-1で、『**流血サーカス**』（作：中屋敷法仁、演出：武田らこ）を上演した。

『桜の森の満開の下』は、丹野久美子・茅根利安・只野展

也（楽師）の出演で、岸田理生アバンギャルドフェスティバル2023（リオフェス2023）参加作品として、東京でも上演された。仙台との縁が深い女優・千賀ゆう子（故人）の代表作を新たなキャストで再生し、女優・丹野久美子が健在をアピールした。

『ギラギラの月』は、若き日の女性漫画家が集う「大泉サロン」を舞台に、三億円事件に揺れた時代を描いた戯曲に「大人のための演劇クラブ」の女優たちが挑んだ。駆け出し漫画家の姿に新人女優の生き様が二重写しになった。

『組曲虐殺』は、作家・小林多喜二を描いた井上ひさしの長編戯曲に、紅絹・鈴木大典・小出天リ・米山陸・鈴木詩乃・高野太地の若手俳優が挑んだ。歌やダンスもあり、演劇の面白さを堪能させてくれる作品。山形県川西町でも上演された。

このように、本県の演劇は、世代継承とともに再生してきた。

一方で、新たな団体も誕生した。

二月二十五日・二十六日に、せんだい演劇工房10-BOX別館 能-BOXで旗揚げ公演をした、りこりた1st『**花の枯らし方**』（作・演出：名塚かずや）は、性暴力を伴う妥協のない表現で独特の世界観を展開し、物議を醸した。SNSを中心とした評価でも、暴力表現に否定的な意見が大半を占めたが、話題になること自体が、関心の高さの表れと考えられ、今後の作品が期待される。

十二月十六日・十七日、せんだい演劇工房10-BOX box-1、劇団ダダ『**或る晩餐**』（作・演出：瀬川鮎）は、前年のとうほく学生演劇祭2022で大賞を得た団体の「初めての本公演」として、話題になった。

人材育成という観点で見れば、令和四年十二月に活動を始めた「週末演劇ひろば」は、三月・五月・七月・九月・十一月と、継続した活動を行っており、若い演劇人が舞台を経験する機会を増やすという目的を順調に達成してきている。

また、インプロ仙台PAGE☆ANTも『**即興パフォーマンスライブ**』を継続的に開催し、演劇手法による自己表現を広めている。

継続的な企画では、第八回せんだい短編戯曲賞の授賞式&リーディング公演が、七月一日・二日（授賞式は一日）、せんだい演劇工房10-BOX box-1で行われた。令和四年十月に公表されていた大賞受賞の河合穂高の『**黄色の森**』をくまがいみさきが演出した。また、第七回の大賞受賞作『**異邦人の庭**』（作：刈馬カオス）を、札幌（演出：町田誠也、出演：明逸人、飛世早哉香）・仙台（演出：大河原準介、出演：明逸人、横澤のぶ）・名古屋（演出：刈馬カオス、出演：

古場ペンチ、あさぎりまとい）の各チームが上演する企画が、九月二十二日～二十四日、せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1で行われた。なお、みやぶんワンコインシアターと仙臺まちなかシアターについては、次のとおり上演が継続された。

みやぶんワンコインシアター

Vol.10『**道の奥には**』（作：大谷努、演出：伊藤み弥）
会期：二月二十三日
恒例となった仙台短編文学賞大賞受賞作品の舞台化。

Vol.11『**飛び花座　宮城野寄席**』（出演：三遊亭花金）
会期：六月八日

Vol.12『**イサムよりよろしく**』
（作：井上ひさし、出演：六華亭遊花）
会期：十月十四日

Vol.13『**妻の女友達**』
（原作：小池真理子、脚本：太田善也、演出：飯沼由和）
会期：十二月二十一日
菊池佳南・横澤のぶ・飯沼由和の出演で舞台化。

仙臺まちなかシアター

『**税務署長の冒険**』（宮沢賢治）
会期：七月八日
会場：ビストロやえがし

『**怪人と少年探偵**』（江戸川乱歩）
会期：七月二十七日
会場：Cafecraft

『**命を弄ぶ男ふたり**』（岸田國士）
会期：九月二日
会場：SENDAI KOFFEE CO

『**手袋をさがす**』（向田邦子）
会期：十月八日
会場：和醸良酒○たけ

『**晩菊**』（林芙美子）
会期：十月二十九日
会場：大石屋

『**金属疲労**』（田辺聖子）
会期：十一月二十四日・二十五日
会場：日本料理華の縁

『**仙臺まちなか怪談Ⅱ**』（内田百閒）
会期：十二月五日
会場：鹿落堂

以下に、月を追いながら演劇の記録を述べる。

一月

○Gin's Bar 色彩シリーズ『Pearl』新作二本立て公演

『サンフランシスコ発、バンクーバー行き』『雪の通い路』

（作：井伏銀太郎、演出：井伏銀太郎・西澤由美子）

会期：一月十四日・十五日・二十一日・二十二日

会場：クォータースタジオ

○短編演劇プログラム「FISH BOOK」vol.1

feblabo『**はこをつくる**』（脚本・演出：池田智哉）

会期：一月二十一日・二十二日

会場：シアターキネマティカ

東京の劇団が、シアターキネマティカが造られる過程を演劇にして上演した。

○短編演劇プログラム「FISH BOOK」vol.1

キコ／qui-co.『**トリコルド**』（脚本・演出 小栗剛）

会期：一月二十九日

会場：シアターキネマティカ

二月

○劇団鳥や公演 2023・如月

『◆―しかく―』『P』『雪見みかん』（作・演出：芦口十三）

会期：二月三日・四日

会場：青葉の風テラス イベントスペース

○ミュージカル集団おむらいす『**ゴーシュの演奏会**』

（脚本・演出：渡部三妙子、音楽：ポケットミュージック・橋元成朋）

会期①：二月五日

会場①：登米祝祭劇場 小ホール

会期②：二月十二日

会場②：エル・パーク仙台 スタジオホール

○劇団麦 創立六十周年記念 第百七回公演

『想い出あずかります～里華と魔法使い～』

（原作：吉野万理子『想い出あずかります』（新潮文庫刊）

上演台本・演出：手塚光弘）

会期：二月十一日・十二日

会場：エル・パーク仙台 ギャラリーホール

○AZ9ジュニア・アクターズ結成三十周年記念公演

『アズランド～つづくつながる物語』

（作：渡辺陽、構成・演出：渡部ギュウ）

会期：二月十一日・十二日

会期：えずこホール 大ホール

○東北大学学友会演劇部二〇二二年度卒業公演

『サバイバーズ・ギルト＆シェイム』

（作：鴻上尚史、演出：小林峻也）

会期：二月十七日～十九日・二十一日～二十三日
会場：東北大学 川内北キャンパス 川内ホール 一〇四号室
○アクターズ仙台『短編劇冬のコレクション』
『風邪ひきジュリエット』
『OH! My Baby ―赤ちゃん万歳―』
『クレーマー・クレーマー ―注文の多い電器店―』
『Prelude ―天使が生まれた日―』
『第二章 ―祈りの環―』
『Tea for Pot ―25日のあなた―』
（作：井伏銀太郎、演出：井伏銀太郎・恋宵・五浄壇）
会期：二月十八日・十九日
会場：クォータースタジオ

三月
○CRAZY 創作集団すぱいしーちきんらいすっ
青春闇劇再演『ふれねみ。』（作・演出：藤原りゅ～い）
会期：三月四日～六日
会場：仙台水煙草喫茶 煙羅煙
○利府町民劇団ありのみ
第二十六回公演『山線ものがたり 16・7‰を越えて行け！』
（作・演出：伊澤美樹）
会期：三月十一日・十二日
会場：利府町文化交流センター「リフノス」多目的ホール
○Whiteプロジェクト 色彩シリーズ Act.14
『紅 ―あさき夢みし』
（作：井伏銀太郎、演出：西澤由美子・井伏銀太郎）
会期：三月十一日・十二日・十八日・十九日
会場：クォータースタジオ
○三角フラスコ ふりだしにもどる公演
『遠くから手をふる』（作・演出：生田恵）
会期：二十四日～二十六日
会場：せんだい3・11メモリアル交流館 交流スペース
瀧原弘子と横山真の二人芝居。

四月
○劇団ヤミ鍋15・5公演『電話』（作・演出：平塚祐里）
会期：四月一日・二日
会場：クォータースタジオ
○演劇集団salad bowl 第七回公演
『Calling me』（作・演出：彼方）
会期：四月八日・九日
会場：クォータースタジオ
○東北大学学友会演劇部二〇二三年度春公演
『スリーアウト・チェンジ』（脚本・演出：河本優希）

会期：四月十五日～十七日・十九日～二十二日
会場：東北大学 川内北キャンパス 川内ホール 一〇四号室
○劇団ひとりっこ 特別公演
『**花いちもんめ**』（作：宮本研、演出：宮なでしこ）
会期：四月二十二日・二十三日
会場：仙台市市民活動サポートセンター 市民活動シアター
出演：武内典子、山本昌子（三味線）
○劇団 短距離男道ミサイル三十八発目
『**BNN**』仙台公演
（脚本・演出：本田椋、inspired by 宮沢賢治「飢餓陣営」）
会期：四月二十五日～五月二日
会場：秋保リゾートホテルクレセント 森林スポーツ公園

五月
○演劇ユニット石川組第四回公演
『**修羅ニモマケズ**』（作：石川裕人、演出：長谷野勇希）
会期①：五月四日
会場①：榴岡公園 野外音楽堂
会期②：五月五日
会場②：閖上公民館 中庭
会期③：五月六日
会場③：錦町公園 つどいの広場
会期④：五月七日
会場④：増田公民館 ホール
石川裕人が宮沢賢治をモチーフに描いた作品を野外劇として上演。

六月
○劇団かげろう 第三回公演
『**レモンキャンディ**』（脚本：福谷圭祐、演出：菊地陽哉）
会期：六月二日～四日
会場：せんだい演劇工房10-BOX box-1
○ Gin's Bar『**桜ひとひら**』『**忘却の海**』二本立て公演
（作：井伏銀太郎、演出・出演：井伏銀太郎・西澤由美子）
会期：六月十日・十一日
会場：クォータースタジオ
○劇団航海記 第十六回公演
『**線引く？**』（構成・演出：星野公紀）
会期：六月十日・十一日
会場：せんだい演劇工房10-BOX box-1
○ Team HacCLose pro.1
『**山田君は就活中。～リローデッド～**』
（作：打土井大、演出：武田らこ）
会期：六月十四日・十五日

会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1

○ろくがつ企画 第三回公演 オムニバス

『ろくがつのたからばこ』（全体演出：近藤由香梨）

会期：六月十八日

会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1

七月

○東北版 〝最強の一人芝居フェスティバル〟

『INDEPENDENT:SND23』

会期：七月六日～九日

会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1

参加作品

・『雨』

出演：伊藤広重×脚本・演出：文月奈緒子（ひびこと）

・『サムライキサラ』

出演：キサラカツユキ×脚本・演出：横山真（丸福ボンバーズ）

・『精神戦士カウンセリンガー』

出演・脚本：丹野貴斗（仙台シアターラボ）×脚本・演出：野々下孝（仙台シアターラボ）

・『Back Back Go』

出演：兵藤かなた（演劇集団ＡＺ）×脚本：佐々木空袈（秋田エンゲキユニットえんむすび）×演出：ゴド吉（劇団@nDANTE）

・『私とあのときのこと』

出演：三品綾乃（Team HacCLose）×脚本：村田青葉（演劇ユニットせのび）×演出：武田らこ（Team HacCLose）

・『竹の籠』

出演・演出：横澤のぶ（1・6畳）×脚本：貫名有貴（アルプス乙女組合）×音楽：金田拓真

・『I dig』

出演：浅井千寿代（劇団わに社）×脚本：鰐塚わに（劇団わに社）×演出：林優（劇団わに社）

○演劇企画集団 LondonPANDA Vol.16

『悪魔の証明』（作・演出：大河原準介）

会期：七月十四日～十七日

会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1

三年五ヶ月ぶりの公演。

○アクターズ仙台 創立二十周年記念公演

色彩シリーズ Act.7『MOMO ―不思議なピーチパイの作り方―』（作：井伏銀太郎、演出：五浄壇）

会期：七月十五日～十七日

会場：クォータースタジオ

○劇団ヤミ鍋 第十六回公演

『**レイと暮らせば**』（作・演出：平塚祐里）
会期：七月二十九日・三十日
会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1

八月

○東北大学学友会演劇部二〇二三年度夏公演
『**雨夜の喜劇**』（作：遠藤雷太、演出：風見仁詞）
会期：八月十日・十一日・十三日・十四日
会場：東北大学 川内北キャンパス 川内ホール 一〇四号室

○（一社）地域舞台創造 TMs オリジナルミュージカル
『**卑弥呼**』（脚本・演出：三木弘和）
会期：八月十二日・十三日
会場：日立システムズホール仙台 シアターホール

○演劇ユニット Wreathe 第三回公演
『**サマールーム・ミーツガール**』（演出：菊池あすみ）
会期：八月十二日・十三日
会場：クォータースタジオ
『**Re: タナトスのガールフレンド**』（原案：辻本直樹、作：つくにうらら）、『**ミーティングスペースシップ**』（作：山田志穂）の短編二本を上演。

○えずこシアター第二十五回演劇公演
『**ヤミツキ**』（演出・振付：遠田誠）
会期：八月二十六日・二十七日
会場：えずこホール 平土間ホール

九月

○『**とうほく学生演劇祭二〇二三**』
会期：九月二日・三日
会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1
審査員：畑澤聖悟（劇団「渡辺源四郎商店」）、
真田鰯（劇団檸檬スパイ）、
くまがいみさき（三桜ＯＧ劇団ブルーマー）

●宮城大学演劇集団 Arco iris『**本の虫**』
（脚本・演出：戸田悠景）

●宮城学院女子大学演劇部『**トロイメライ**』（脚本：加藤愛世）

●東北大学学友会演劇部『**石英の塔**』
（脚本：検見川佐倉、演出：田丸鈴）

●どろぶね『**ノアの泥船**』（脚本：渡邉愛実、演出：染井野花）

●東北学院大学演劇部『**アンファン・ポトフ**』
（脚本：宇吹萌、総演出・舞台監督：夏芽鴉洛）

○アクターズ仙台 創立二十周年記念公演 仙台オリジン色彩シリーズ Act.5『**ORANGE ―モデルルームの鍵貸しますー**』（作：井伏銀太郎、演出：恋宵）
会期：九月十六日～十八日

会場：クォータースタジオ
○せんだい短編戯曲 東西ツアー
『**隣の隣人**』（作：國吉咲貴、演出：武田らこ）
会期①：九月二十三日
会場①：仙台市立作並小学校新川分校跡施設 音楽室
会期②：九月二十四日
会場②：ギャラリー・スケーナ
○仙台シアターラボ公演『**人形**』
（原作：テネシー・ウィリアムズ作「ガラスの動物園」・ヘンリック・イプセン作「人形の家」、構成・演出：野々下孝）
会期：九月三十日・十月一日
会場：せんだい演劇工房10-BOX box-1

十月
○みんなのしるし ミュージカル『**シシ**』
（作曲・演出：前川十之朗、劇作：黒川陽子・矢戸優太郎、音楽監督：福田真一朗、振付：酒井直之・磯島未来・渋谷裕子）
会期：十月十六日～十八日
会場：宮城野区文化センター パトナシアター
○ひびこと第二回公演『**ふかくうずめる**』
（作・演出：文月奈緒子）
会期：十月二十一日・二十二日
会場：クォータースタジオ
○劇団ひとりっこ十周年記念公演
『**カミサマの恋**』（作：畑澤聖悟、演出：野々下孝）
会期：十月二十七日～二十九日
会場：宮城野区文化センター パトナシアター
○いわぬま市民劇団ウィープ 第二十二回定期公演
『**百万年ピクニック**』（作：成井豊＋成井稔、演出：芳賀政信）
会期：十月二十八日・二十九日
会場：岩沼市民会館中ホール

十一月
○何かのかたち『**トマトと、**』
（作：鈴江俊郎、演出：阿部豪毅）
会期：十一月十日～十二日
会場：せんだい演劇工房10-BOX box-1
○東北大学学友会演劇部二〇二三秋公演
『**DOLL**』（作：如月小春、演出：岡元優空）
会期：十一月十一日・十二日
会場：東北大学 川内北キャンパス 川内ホール一〇四号室
○劇団麦 新人公演『**僕のウチ、空いてますよ？？**』

（作：えんたつ、演出：手塚光弘）
会期：十一月十八日・十九日
会場：仙台市市民活動サポートセンター 市民活動シアター
○地域おこし協力隊 本城祐哉 舞台公演『**波書**』
（作・演出・振付・音楽：本城祐哉）
会期：十一月十八日・十九日
会場：亘理町役場 多目的スペース
○演劇ワークショップ「P-egg」演劇公演シーズン八
ＯＨ夢来'Sミュージカル『**I Wish!**』
（脚本・演出：渡部 三妙子、音楽：玉造美奈子、橋元成朋）
会期：十一月二十二日・二十三日
会場：エル・パーク仙台 ギャラリーホール
○劇団檸檬スパイ第二回公演『**エデン５２１**』
（作・演出：真田鰯）
会期：十一月二十三日～二十六日
会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1

十二月
○ A Ladybird Theater Company 第二十回公演
『**テロリストのラブレター**』（作・演出：箱崎貴司）
会期：十二月一日～三日
会場：宮城野区文化センター パトナシアター
○ひのき舞台 Version.1
『**桜の園**』（作：アントン・チェーホフ、脚色・演出・小濱昭博）
会期：十二月九日・十日
会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1
○第二回「伊達の劇王」短編劇コンクール
会期（予選）：十二月九日・十日
会期（決勝）：十二月十六日・十七日
会場：クォータースタジオ
参加団体：演劇集団 saladbowl、劇団ヤミ鍋、劇団鳥や、
利府町民劇団ありのみ、五浄壇プロデュース、
劇団トイホース、演劇集団ＡＺ、
劇団ファットブルーム、ひびこと、
劇団三ヵ年計画
ゲスト審査員：八巻寿文、遠藤瑞知、瀧原弘子
審査の結果、利府町民劇団ありのみ『**センシティブな乙女たち**』が優勝した。
○白鳥英一ひとり芝居 ２０２３／２０２４
『**肝っ玉のちっちぇー父ちゃんと子どもたちのトゥイート**』
（脚本・演出：芦口十三）
会期：十二月二十七日、一月五日・六日
会場：せんだい演劇工房10-ＢＯＸ ｂｏｘ-1

鈴鴨久善（すずかもひさよし）

（演劇ジャーナリスト）

洋舞

新型コロナウイルス感染症がついに五類に移行し、終息時期を迎えつつあることに、安堵感が全身を駆け巡る思いがする。この四年ほどの衝撃的な生活が、やっと落ち着いてきた日々が本当に愛しい。最近では、海外からの公演が次々と舞い込んでくる日が多くなった。日本が、世界が、活発にまわりはじめたことを示唆しているに違いない。

コロナ禍前は、一年先の舞台制作作業に次々と取り組み、ポジティブな毎日であった。今では石橋をたたく感覚が、頭の方隅で見え隠れする。安全性を確保する意味では、大切なことであると納得せざるを得ない。

しかしながら、海外とのコンタクトも順調に進んでいる。円安のためか、海外からの観客が街にあふれているように感じた。この機会を好機と捉え、この四年間を少しでも取り戻せるよう、足場を固めながら日本をあげて、ともに復活を遂げたいものだ。

◎県内のバレエ活動

○バレエスタジオ アン・ユニベール

十周年記念　第六回発表会

主宰：井出和香子

会期：三月十二日

会場：名取市文化会館

演目：眠れる森の美女

○ Soki Ballet International

第十二回バレエの夕べ

主宰：左右木健一、左右木くみ

会期：四月二日

会場：日立システムズホール仙台シアターホール

演目：バリエーション集、ハーブの調べ　ほか

○橘バレエ学校　仙台教室

スプリングバレエコンサート in SENDAI

主宰：仙台教室（校長・三谷恭三）

会期：五月五日

会場：電力ホール

演目：小品集

○仙台ノイエタンツ研究所

現代舞踊公演
主宰：千尋洋子
会期：七月二日
会場：電力ホール
演目：幸せな生活をテーマに創作舞踊「花の園」、小品集

○加藤有華バレエスタジオ
パフォーマンス二〇二三
主宰：加藤有華
会期：七月二日
会場：エル・パーク仙台スタジオホール
演目：パキータのバリエーション ほか

○ SENDAI M&M Ballet Studio
バレエコンサート
主宰：チョ・ミンヨン、三好麻沙美
会期：七月二日
会場：太白区文化センター楽楽楽ホール
演目：眠れる森の美女 第一幕・第三幕

○クラシックバレエ教室 Pied d' Ange
バレエコレクション
主宰：根深真弓
会期：七月十六日
会場：太白区文化センター楽楽楽ホール
演目：アリスのバースデーパーティー、くるみ割り人形

○バレエスタジオプリエ
第七回発表会
主宰：妹尾美由紀
会期：八月十一日
会場：名取市文化会館大ホール
演目：白雪姫、バレエコンサート

○バレエスタジオエスポワール
三十周年記念　第十三回発表会
主宰：太田葉子
会期：八月十一日
会場：多賀城市文化センター大ホール
演目：ドン・キホーテ 第一幕・第三幕、バレエコンサート

○ Rose Marii Ballet Studio
第四回発表会
主宰：スロラク・太田麻里衣
会期：八月十三日
会場：名取市文化会館大ホール
演目：くるみ割り人形 第一幕・第二幕、クライスラー小品集

○ MAYA Ballet Studio
第二回おさらい会

主宰：中村麻弥、森美穂
会期：八月十六日
会場：日立システムズホール仙台シアターホール
演目：パキータ、眠れる森の美女、パ・ド・シス

○エトワールバレエ館
第二十七回ガラ・コンサート
主宰：川村美佐子
会期：九月十七日
会場：広瀬文化センターホール
演目：白鳥の湖 第三幕、親指姫

○まりなバレエスタジオ　フェ・エ・リ
第十四回発表会
主宰：小山真利奈
会期：十月二十九日
会場：太白区文化センター楽楽楽ホール
演目：白鳥の湖 第三幕、小品集

○なとり市民文化祭・第四十八回なとり文化芸術祭
一般公募の参加団体も加わり、個性豊かな作品が華やかに披露された。
会期：十月二十一日・二十二日
会場：名取市文化会館大ホール
振付：千尋洋子（仙台ノイエタンツ研究所）
「村祭りだよ・春駒」ほか
高橋厚子（クレールバレエアトリエ）
「パキータ抜粋&バリエーション」
内海裕子（裕バレエアクト）
「コッペリアより・スケートをする人々」
他出演団体：ステキな仲間（レクリエーションダンス）
ハラウ・ユキフラ・オオリノ（フラダンス）
MAHANA hula Studio（フラダンス）
Team Regalo（チアダンス・バトントワリング）
名取ダンベルクラブ（ダンス）
チェリーズ（チアダンス）
増田 milimili フラダンスサークル

○第五十一回洋舞公演
第四十三回ジュニア洋舞公演
主催：宮城県洋舞団体連合会
会場：東京エレクトロンホール宮城大ホール
会期：十一月二日
出演団体：石巻バレエ研究所
さくらモダンバレエスクール
佐取純子モダンバレエスタジオ
仙台ノイエタンツ研究所
Soki Ballet International

藤井サト子バレエ研究所
Classical Ballet Arts SENDAI
NaNa Ballet Studio

○裕バレエアクト
第二十九回発表会
主宰：内海裕子
会期：十一月十九日
会場：名取市文化会館大ホール
演目：コッペリア、コンサート

◎県外組織団体の公演

○「デンマークからの贈り物」仙台公演
会期：十月十七日
会場：日立システムズホール仙台
出演団体：井上バレエ団
演目：ラ・シルフィード第二幕
ナポリ第三幕よりタランテラ ほか

公演の前半には、事前のワークショップにより無料招待された、仙台市内の生徒（五組 十人）によるデモンストレーションが行われた。

◎コンクール

○第十八回全国ダンスコンペティションin仙台二〇二三
主催：ＤＣＳ実行委員会
共催：宮城県洋舞団体連合会
会期：二月二十五日・二十六日
会場：日立システムズホール仙台シアターホール
出場者：百四十五人（クラシック部門）
三十八人（アンサンブル部門）
百三十六人（モダン部門）
審査員長：尾本安代（クラシック部門）
本間祥公（モダン部門）

○第十回ＮＢＡ仙台バレエコンクール
主催：ＮＢＡバレエ団
会期：三月二十九日
会場：日立システムズホール仙台シアターホール
出場者：二百八十六人

○第十八回ＡＬＬ ＮＩＰＰＯＮ Ｄ．Ａ．Ｔ．Ｅ．
クラシックバレエコンペティションＭＩＹＡＧＩ
（通称：伊達コンペティション）
マスク着用・除菌・検温をした上での開催となった。
会期：三月三十日～四月一日
会場：太白区文化センター楽楽ホール
出場者：二百四十人

審査員：ローランド・ヤーネス（審査委員長）
オリバー・ホークス（ゲスト）
高橋厚子
中村道子
川村美佐子（プレ・コンペティション）
辻真弓（プレ・コンペティション）

◎団体の活動

○二月十八日、仙台大学（柴田町）の学生らがダンスの成果を披露するＤＡＮ　ＤＡＮ　ＤＡＮＣＥ＆ＳＰＯＲＴＳが仙南芸術文化センターであった。有観客開催は三年ぶり。総勢六十人が創作ダンスやバレエ、中国舞踊などキレのある演技を披露した。

○二月二十日、東北大学のストリートダンスサークル「東北大学ＷＨＯ」が、東京都で開催された大学ダンスサークル日本一を決めるJapan Dancer's Championship2023で初優勝した。過去の入賞チームの演技を研究し、息の合った演技を披露。選曲の新規性や盛り上げ方を工夫し、次回開催のシード権を獲得した。

○四月一日、昨年三月に登米市で震度六強を観測した地震で破損したオランダ風車の復旧を祝うイベント**風車復活ＭＡＷＡＲＥ！**が長沼フートピア公園であった。登米市のダンス教室「ガイダンス　スタジオ」の児童ら二十人がダンスを披露。街のシンボルであるオランダ風車は、全国からの支援により復旧した。

○五月二十六日、宮城県佐沼高等学校（生徒六百七十一人）に、台湾の瀛海（インハイ）高級中学（台南市）と嘉華（ジャファ）高級中学（嘉義市）の生徒計四十人が訪れ、日本の学校生活を体験して交流を深めた。心温まるおもてなしに感謝し、ダンスや歌唱を披露した。

○六月四日、障害のある人もない人も一緒に楽しめる**とっておきの音楽祭**が仙台市中心部であった。県内・県外の二百三十グループ・千人以上が、観客と一体となってダンスを披露した。ステージは、勾当台公園や錦町公園など、計二十二か所に設けられ、多彩な音楽が響き渡った。

○八月二十日、宮城県立支援学校小牛田高等学園（美里町）フラダンス部「こごたプルメリア」は、高校生の全国競技大会**フラガールズ甲子園**で、五年連続の奨励賞に選ばれた。地元で知名度が高まっており、イベントへの出演も依頼されている。地元に明るい話題を届けられる日を待ち望み、常に笑顔を大事にして踊り続けている。

○八月二十七日、創立五十周年を迎えた「佐取純子モダンバレエスタジオ」の記念公演として、**創作舞踊　谺～縄文より**が七ヶ浜国際村ホールであった。日本舞踊家の中川雅

寛、石笛奏者の高橋易宏、舞踊家の石井武が出演。絶えない戦争や心ない出来事が多い現代の社会に抗し、縄文人の共生の精神をモダンバレエで伝えた。

○十一月一日、涌谷町・美里町で放課後等デイサービス施設「そよ風」を運営する有限会社タックスは、大崎市に「そよ風心咲」を開設した。ダンスや楽器演奏を通じ、発達障害児の社会性の育成や、コミュニケーション能力の向上を図る「音楽療育」に取り組む。療育の主眼は、五感から受ける情報を整理し、適切な行動につなげる「感覚統合」。学習支援も行う。

○十一月十九日、七ヶ浜町の町民ミュージカルグループ「NaNa5931」のメンバー三十人が、地元を題材にしたオリジナル作品の**海からのハーモニー**を演じた。伸びやかな歌声を響かせながら、息の合ったステップで舞った。演出家の梶賀千鶴子は、「町の歴史や文化を多くの人に伝えたい」と話した。

○十一月二十二日、十七～十八世紀のフランス宮廷などで盛んであった「バロックダンス」を体験するワークショップが、日立システムズホール仙台の交流ホールで開催された。バロックダンスの第一人者として活躍する市瀬陽子を招いたワークショップでは、チェンバロやビオラ・ダ・ガンバに合わせて、参加者がダンスのステップの基礎を体験した。また、翌日には、同会場でダンスをイメージしたコンサートも行われた。

○十一月二十五日・二十六日、仙台を拠点とする団体が音楽・演劇・ダンスなどを披露する**パフォーマンスフェスティバル**が日立システムズホール仙台であった。公募で選ばれた約三十の団体が舞台上でパフォーマンスを発揮した。

○十二月三日、音楽と舞踊を組み合わせて詩を朗読する**言と音が加速する午後**が、仙台市市民活動サポートセンターの市民活動シアターであった。主催は詩誌「ココア共和国」。仙台市の詩人である秋亜綺羅と佐々木貴子が、バイオリンやドラムの演奏、舞踊に合わせて自作詩を情感豊かに朗読した。音と踊りとの融合により、詩の作品世界や言葉が持つ力を深めていった。

○十二月三日、翌年一月に名取市で**白鳥の湖～大いなる愛の賛歌**を公演する東京シティバレエ団による特別レッスンがあった。県内の中高生ら三十四人が、プロのダンサーから心構えなどを学んだ。仙台市出身で、バレエ団ミストレスに所属する長谷川祐子が指導。文化庁の巡回公演事業の一環として開催され、受講者の中からは、実際の公演でプロの団員とともに舞台に立つことのできる約十人が選ばれた。

○十二月七日、白石市民吹奏楽団の演奏会が、白石市立越河

小学校であり、全校児童三十五人と保護者が演奏とともに歌や踊りを楽しんだ。ディズニーの楽曲では、楽団員と児童が一緒に踊り、生の演奏とその迫力に、参加者は心を躍らせた。

○十二月二十六日、仙台市立愛宕中学校の二・三年生が、オンライン上で開かれる**全国小・中リズムダンスふれあいコンクール**に出場した。十一月の予選を経て、三年生は二年連続、二年生は初の大舞台に挑んだ。事前に収録した動画で臨む生徒たちは「日頃の成果を見てほしい」と力を込めた。本コンクールへの出場は、同校教諭の山内翔太が一つにまとまるいい機会と提案し、実現したものである。

◎個人の活動

○大前光市　熊谷駿

義足のコンテンポラリーダンサー大前光市と仙台市のジャズサックス奏者・熊谷駿によるコラボイベント**センダイスケープ**が一月二十七日・二十八日に開催。東京都在住の大前の外側からの視点と、熊谷ら地元の視点とを通して、比べ見た仙台の姿を描こうと企画された。大前が津波で大きな被害のあった沿岸部の復興状況などを見て回り、出会った風景や地域の歴史・文化をダンスに表現し、熊谷が呼応して音楽にしていった。

○下永小百合（カトルカールバレエスタジオ）

米国である国際バレエコンクール**ユース・アメリカ・グランプリ**の最終審査に挑戦した。本コンクールは、プロへの登竜門の一つとされているもので、世界的に活躍するダンサーを輩出している。下永は、五歳でバレエを始め、令和五年は、全国ダンスコンペティションin仙台のクラシック・シニア部門で一位。また、**第十四ＹＢＣ横浜バレエコンクール**の中二・中三部門でも一位に輝き、成長が著しい。今後は、フランス・カンヌのバレエ学校に入学予定。プロに必要なことを海外で学んでほしいと期待されている。

○平多浩子

東京新聞主催の**全国舞踊コンクール**の児童舞踊部・児童舞踊幼児部にて、平成二十四年から現在まで審査員を務めている。

○佐藤陽菜　遠藤大輔

米国・サンディエゴで開催されたダンスの世界コンテストの**ボディー・ロック・ジュニア**で、二人が所属するチームが優勝した。日本チームが大会を制するのは初めて。世界最高峰のコンテストの一つで、米国やメキシコなど世界各国から動画予選を勝ち抜いた十一チームが出

場した。仙台城南高等学校三年の佐藤は、ビックアーティストと共演できるような世界的なダンサーを、宮城県角田高等学校三年の遠藤は、自分が振り付けした作品がコンテストで評価されるような振付師を、と各々の目標は明確である。

○伊藤麗奈

プロ野球球団の東北楽天ゴールデンイーグルスの主催試合でパフォーマンスを披露する公式チアリーダー「東北ゴールデンエンジェルス」の元メンバー。県南でチアダンスチーム「Lovelys（ラブリーズ）」を発足させた。

○菊池樹佳（クレールバレエアトリエ）

第16回伊達コンペティション　菊池 樹佳

ミルウォーキーバレエスクール短期留学

仙台市出身の菊池は、令和三年に開催された**第十六回ALL NIPPON D.A.T.E.クラシックバレエコンペティションMIYAGI**のシニア部門で第一位に輝き、スカラシップ賞を受賞。サラソタバレエスクールや、ミルウォーキーバレエスクールに留学した。令和六年春からは、医師としてバレエ医学に携わりながら、バレエダンサーの活動を行う。今後のバレエ医学の道が開かれて行くことに期待が広がる。

高橋厚子（宮城県芸術協会舞踊部部長）

日舞

●世の中の動向

令和二年一月から世の中に大きな影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が、令和五年五月に二類相当から五類に移行した。

実質的に日常生活における制約がほぼない状態となった。社会活動や経済活動も活性化し、コロナ禍前の状態に復調してきた。規制や自粛をしていたイベントも数年ぶりで開催されるようになり、人流も本格的に回復を見せた。

また、インバウンド需要も復活し、訪日客も顕著に増えた。一方で、飲食業などは感染症の影響をいまだに受けている。

芸能界ではジャニーズ事務所の性加害問題や、宝塚歌劇団の長時間労働やパワハラがクローズアップされた。また歌舞伎役者の市川猿之助の自殺未遂、両親への自殺ほう助の罪での起訴が世間を驚かせた。

ロシアとウクライナの戦争も終息が見通せず、日本国内を見ても物価高やガソリン価格の高騰、人手不足、政治家の裏金疑惑など、コロナ禍が治まってもなお、先行きが見えない不安な世相は続いている。

●新型コロナウイルス感染症の五類移行後の日本舞踊界

昨年から感染対策が緩和され、それまで中止や延期を余儀なくされていた舞踊会が各地で開かれるようになった。日常の稽古も再開されたが、今年は更にコロナ禍以前の環境に戻った雰囲気が感じられて喜ばしいものであった。また、仙台市で開催された**子ども舞踊大会**では参加の社中・参加者ともに増加し、日本舞踊の普及活動による効果が目に見えたことは明るいニュースであった。

その反面、日本舞踊という文化を次代に継承し、発展させていくためには多くの課題がある。

コロナ禍で感染の不安から稽古を中断した弟子の中には、これを機にやめてしまった人も多い。また、稽古場を廃業した指導者も多い。急速に進む人口の高齢化も影響し、舞踊人口減少に拍車をかけている。

少子高齢化、世の中のデジタル化、物価高騰、生涯賃金や年金が見通せない不安、核家族化、女性の社会進出、など日本舞踊を取り巻く環境は、年々厳しさを増している。

都市部では畳や床の間、襖などがない住居はめずらしくな

い。特に子どもは、「畳に正座をする日常」が全くなくなった。かつて生活に密着していた着物や三味線音楽などの日本文化も、戦後の西洋化により、いまでは馴染みのない人には遠い「特別な」ものになった。

そして、現代人は忙しい。子どもは夜遅くまでの塾通い。社会人は正社員と契約社員の待遇の違いもあり、仕事を掛け持ちする時代である。中高年は退職しても、親の介護や孫の世話で時間にもお金にも余裕がない。現代人は、習いごとの時間もお金も、余裕がなくなってきている。

江戸時代の風俗や生活感を描く日本舞踊は、いまや日常とかけ離れ、難しい、敷居が高い、時間とお金に余裕のある人がやるものといったような印象を強く持たれている。日本舞踊を愛好する人は、絶滅危惧種になりつつある。

この状況下で日本舞踊の伝統を後世につなぐためには、日本舞踊を知らない人や間違った理解をしている人に対して、真の日本舞踊の魅力を伝える努力や、踊る楽しさ・見る楽しさを伝える地道な活動が必要である。

そして、「よい風習・習慣として残さなければならないもの」、「時代に合わせて変えなければならないこと」といった時代の構造改革からは逃れられないと感じる。非常に難しいことであるが、考え方もやり方も、しきたりも慣習も変えるべきところは変え、変えてはいけないところは守る。大局的にみて大鉈を振るうことも、微細にみて修正することも必要に応じて行わなければならないだろう。

●日本舞踊が国の重要無形文化財に指定

十月、日本舞踊が国の重要無形文化財に指定された。流儀を越えて、立方（踊り手）四十人、地方（演奏家）十六人が保持者に選ばれる総合認定。総合認定には、保持者が作る団体に、年間二百万円の特別助成金が支給される。認定に当たり新たに設立された「日本舞踊保存会」の会長には、京舞の人間国宝・井上八千代が就任した。日本舞踊が国から認められた芸能であるというお墨付き。保持者の選定には賛否あったが、保持者は日本舞踊発展のために尽力してもらいたい。

●国立劇場の閉場

老朽化に伴う建替えのため、十月末をもって閉場した。日本舞踊公演の殿堂として、平成十年代までは、ほぼ毎日、舞踊や邦楽の公演が行われていた。公演開催希望者が非常に多く、毎年抽選が行われ、主催者が「希望日時ではないが、抽選で当たったから開催する」と、今では考えられない盛況ぶりであった。

閉場まで舞台機構や環境が整った国立劇場の檜舞台で踊ることは舞踊家の憧れであり目標であった。ゆえに、舞踊会の

公演が開催しにくくなったという声が多くあった。舞踊家が目標や意欲を失い、公演数が減れば、おのずと公演を支える裏方職人にも影響が及び、日本舞踊の衰退が懸念される。一日も早い建替え・新開場を望む声はあるものの、残念ながら昨今の建設費・資材・人件費の高騰で建替えの目処が立っていない。

●宮城県内のホール会館の移転・新築

東京エレクトロンホール宮城やトークネットホール仙台）に加え、電力ビルの建替えに伴うホールの整備と、仙台市内の主要三ホールの移転新築が話題となった。

東京の国立劇場の閉場により、日本舞踊を披露する一会場がなくなり、意欲や意識の低下による日本舞踊の衰退が危惧されている中、宮城県でも時期を同じくして同様の不安と心配の声が広がっている。

日本舞踊は、舞台の寸法や花道の代替え設備、出演者・裏方の楽屋や大道具転換のためのスペースなどを考慮し、会場選びが重要視される。仙台の主要三ホールの建替えは、一定期間、宮城県の日本舞踊の公演が上演回数を減少させ、日本舞踊文化の衰退や舞踊人口の減少、裏方の廃業に影響しかねない。時期をずらした建替えはできないものかとの声も挙がった。

県内の舞踊家には、新しいホールが日本舞踊を上演しやすい舞台機構や機能をもった設備となるよう、主体的な働きかけを期待する。現状のままでは人口だけではなく、文化の流出も止められないだろう。

●（公社）日本舞踊協会宮城県支部六十周年記念表彰式

会期：令和五年四月二十九日

会場：江陽グランドホテル

（公社）日本舞踊協会宮城県支部の創立六十周年にあたり扇の会総会において、これまで貢献のあった次の者が、功績を讃えられ、表彰の栄に浴した。

【表彰者】

大須賀豊（宮城県芸術年鑑執筆）

峰正和（大道具）

【顕彰者】※各流舞踊公演の出演が十回以上。

藤間勘そめ（出演回数：二十七回）

水木歌泰（出演回数：十八回）

藤間寿和枝（出演回数：十六回）

花柳寿々仁（出演回数：十六回）

花柳登代尋（出演回数：十三回）

藤間香園（出演回数：十回）

【顕彰社中】

※歳末たすけ合い各流舞踊大会の出演が二十回以上。

藤間勘そめ 社中（出演回数：五十九回）
花柳登代尋 社中（出演回数：五十回）
花柳寿々仁 社中（出演回数：四十六回）
水木歌泰 社中（出演回数：三十九回）
花柳雅好 社中（出演回数：三十九回）
若柳政世 社中（出演回数：三十七回）
若柳尋寿賀 社中（出演回数：三十六回）
花柳尋葉奈 社中（出演回数：三十五回）
吉村花照 社中（出演回数：三十二回）
藤間寿和枝 社中（出演回数：三十二回）
廣川歌洲 社中（出演回数：二十回）

●舞踊公演の記録

○花柳流日本舞踊公演　第二回　寿美衡會

会期：四月三十日
会場：太白区文化センター楽楽楽ホール
会主：花柳寿美衡

・長唄『宝船』　花柳純郎
子ども舞踊　『京の四季』『玉兎』『野崎小唄』　ほか 計八曲
小品集　『荒城の月』『河水』『紅葉の橋』　ほか 計六曲
・長唄『女伊達』　花柳登代瑠璃　花柳登代仁之助
・長唄『猩々』　花柳奈留衡　花柳寿美衡
・長唄『浅妻船』　花柳弥菜
・創作舞踊　花柳美風菜　花柳藍ひら　ほか 計十人
『証城寺のスケルツォ』
・長唄『鷺娘』　花柳優和沙
・清元『傀儡師』　花柳寿美衡
ほか 計十八番

仙台市を中心に郡山市、猪苗代町、奥州市などで活躍する舞踊家の花柳寿美衡が、コロナ禍を経て七年ぶり二回目の寿美衡會を開催。花柳寿美衡は門弟の指導はもとより、子ども向けの教室をとおして、日本舞踊の普及活動に注力している。また、花柳会東北支部の委員として流儀をまとめ、（公社）日本舞踊協会宮城県支部や（公社）宮城県芸術協会でも活躍している。宮城県の次代を担う存在の一人である。

「日本舞踊を未来へ！」のキャッチフレーズのもと、子どもから大人まで幅広い年代が出演。古典を中心に創作・小品と、活気のある会であった。子ども舞踊の小品集では、大勢の子どもが大舞台を体験し、いきいきと踊って表現した。「長唄『女伊達』」は、花柳登代瑠璃が子息と親子共演。所作ダ

テの華やかさを見せる。「長唄『猩々』」では、花柳寿美衡の酒売りを相手に花柳奈留衡が猩々を踊った。急の舞を格調高く、要所に美しいきまりの形があった。花柳弥菜は「長唄『浅妻船』」を優雅に披露。「創作舞踊『証誠寺のスケルツォ』」は、箏曲に関野由美子、尺八に大友憧山を迎え、若い弟子が元気に楽しい踊りを見せた。「長唄『鷺娘』」は花柳優和沙。白無垢姿はしっとりと、引き抜いて町娘になってからは華やかに、地獄の責めは壮絶さの中に哀れさがにじんだ。大喜利は、会主・花柳寿美衡の「清元『傀儡師』」。江戸時代、首から提げた箱から人形を出して見せ物をみせる芸人の踊り。三人の息子や歌舞伎の役柄を軽やかに、鮮やかに踊り分け、古典舞踊の味わいを見せた。

花柳寿美衡は、六月十八日に福島県郡山市で**第一回　郡山寿美衡会**も開催した。

○直派若柳流舞踊会

会期：五月二十一日
会場：国立劇場大劇場
主催：直派若柳流

● 長唄『英執着獅子』　若柳梅京

コロナ禍を経て直派若柳会が四年ぶりに開催され、（公社）日本舞踊協会宮城県支部役員で、白石市と仙台市を中心に活躍する若柳梅京が、女形舞踊の大作『英執着獅子』を踊った。前半は、赤い衣裳をまとって恋に執着する赤姫に、後半は獅子の精になり、捕手二人と所作タテを見せながら石橋の上で勇壮な毛振り（狂い）をみせる大曲。梅京の姫は美しく品格があり、大劇場の舞台の広さを感じさせない姫振り。恋ゆえに病になるほどの切々とした執着を優雅に品よく、妖艶に表現した。手にした獅子の精が姫に乗り移り、大道具が御殿から天竺清涼山にダイナミックに転換すると、花道から拵えを変えた梅京の獅子が登場。後半は、捕手との所作ダテと獅子の毛振りをみせた。芸力・気力・体力と三拍子がそろわないと踊れないが、迫力のある所作ダテと獅子の毛振り（狂い）が見事に石橋の上にきまった。

○第三回宮城県各流子ども舞踊大会

会期：七月二十九日
会場：仙台市福祉プラザふれあいホール
主催：（公社）日本舞踊協会宮城県支部
共催：宮城県扇の会　（公社）宮城県芸術協会
出演：二十八人（十四社中）
三回目の開催を迎え、技術の向上はもちろんのこと、舞台

での立ち居振る舞いなども身についてきた。なにより子どもが踊る喜びに満ちあふれていたことが微笑ましかった。

日本舞踊を次世代に継承し、子どもの活動の場を広げる趣旨で始まった「子ども舞踊大会」。開催するたびに参加者数が増加しており、定着しつつあることが喜ばしい。子どもが社中の垣根を越え、他の社中・他の流儀で習う子どもと出会い、刺激を受けられる舞台であり、また、家族や友人といった関係者が日本舞踊を見ることのできる貴重な機会でもある。日頃の稽古の発表の場として、一つの目標として、今後とも盛会裏に発展することを願っている。（藤間寿和枝：談）

子ども舞踊大会出演者

○第一回　水木歌惣の会

会期：十一月五日
会場：電力ホール
主催：水木歌惣

- 長唄『水木の槍をどり』　水木歌惣
- 尺八演奏『鹿の遠音』　佐藤皖山　佐藤將山
- 長唄『鷺娘』解説　大須賀豊
- 長唄『鷺娘』

立方　水木歌惣
長唄　今藤政貴　今藤長龍郎
囃子　望月太喜右衛門

水木歌惣がリサイタルを開催。東京水木会理事長の水木佑歌と師である水木歌泰の力添えがあり、水木流の許しものである『水木の槍をどり』と『鷺娘』を踊った。

序幕、「長唄『水木の槍をどり』」は、水木流の流祖である江戸時代の歌舞伎役者・水木辰之助の当たり芸で、由緒ある演目。幕開きには、後見による口上があり、演目の由縁を述べる。古風な大道具に毛槍を持った歌

『水木の槍をどり』

『鷺娘』

惣の若衆姿が映え、みずみずしく華麗に踊る。大鳥毛を振るくだりは拍子の間も心地よく、錦絵のような古風な味わいを余すところなく踊った。

女形舞踊の代表曲『鷺娘』は三十年ぶりの再演ということだが、娘の感情がよく込められたドラマチックな舞台であった。水辺にたたずむ幻想美。丁寧な仕草に思いがこもっていた。引き抜きも鮮やかに、クドキ、傘尽くしのくだりは華やかに、地獄の責めは壮絶な表現で魅了した。本リサイタルを弾みとして、是非、回を重ねてもらいたい。

○日本舞踊キャラバン　宮城公演

会期：十二月十五日
会場：電力ホール
主催：（公社）日本舞踊協会

●長唄『操り三番叟』
花柳梨道　花柳寿美衡

《宮城県支部会員出演演目》

●長唄『水仙丹前』
水木歌惣　吉村花照　水木和歌那
若柳佳つ尋　藤間宝園　若柳梅京

●清元『神田祭』
藤間いく子　花柳寿太一郎

●清元『吉原雀』
猿若清三郎　花柳笹公

●長唄『連獅子』
西川大樹　泉秀樹　坂東はつ花　花柳寿紗保美

全国十一か所で開催された日本舞踊キャラバン。文化芸術に触れる機会の回復と地域文化の活性化を全国規模で図ることを目的として文化庁による支援を受けて実施された。宮城公演でも流儀を越えた舞踊家による五演目が上演され、そのうち「長唄『水仙丹前』」は、（公社）日本舞踊協会宮城県支部会員演目として披露され、息の合った舞台をみせた。

多彩な演目を鑑賞することができ、日本舞踊の魅力を発信できる良い機会であった。しかし、なぜ年末の平日昼間からの開演であったのかと素朴な疑問が残った。上演の都合もあったことだろうが、需要回復公演の趣旨のとおり、多くの人の来場が見込まれる時期の休日に開催してほしかった。

『水仙丹前』

○歳末たすけ合い　第六十回各流舞踊大会

会期：十二月三日
仙台：電力ホール
主催：（公社）日本舞踊協会宮城県支部
共催：宮城県扇の会
出演：『松島』（御祝儀）
水木歌惣 社中『萬歳』
水木歌泰 社中『箏曲による民謡集』
花柳登代尋 社中『宝船』『寿』
若柳梅京 社中『若みどり』
藤間寿和枝 社中『奴さん』『さのさ』『初春三番叟』
吉村花照 社中『門松』『春日影』
水木和歌那 社中『汐汲』
若柳尋寿賀 社中『雨の五郎』『汐汲』『雨の四季』　ほか
藤間宝園 社中『城』
ほか 計二十五社中

第六十回を記念して、（公社）日本舞踊協会宮城県支部役員と宮城県扇の会委員による「常磐津『松島』」が序幕に上演された。本公演の収益は、ＮＨＫ歳末たすけ合い・宮城県社会福祉基金・仙台市社会福祉協議会へ寄附された。

『松島』

ご挨拶

新型コロナウイルス感染症の落ち着きもあり、ここ数年で最多となる約八百人の観客が、師走のひとときに日本舞踊を堪能した。

大須賀　豊（おおすか　ゆたか）
（日舞名取・歌舞伎大向弥生会副会長）

茶道

令和五年五月、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが二類相当から五類に移行し、感染状況が落ち着きをみせ、（公社）宮城県芸術協会茶道部による**研修茶会**（四流派参加）が、五月に輪王寺において開かれたことを皮切りに、**宮城県芸術祭茶会**が十月十四日・十五日の両日、輪王寺において開かれ、六流派が参加した。これらは実に四年ぶりの復活であり、喜ばしいことであった。全流派の参加に向けての希望となったようである。

各流派とも茶会や講演会、研修会の開催に取り組まれたようであり、感染予防に徹しながらも、平常に戻りつつあった。

○第二十七回杜の都大茶会

（公社）宮城県芸術協会茶道部（加入十一流派）と（株）河北新報社との共催で「杜の都大茶会」は毎年五月に開催されていたが、今年も昨年同様、コロナ禍のため中止となった。

○茶の湯文化にふれる市民講座

表千家同門会宮城県支部による講演会が、三月十一日に仙台市福祉プラザにおいて開催された。

講師は釜師の大西清右衛門で、「茶の湯釜～その魅力～」をテーマに、大西家の歴史、釜の形や製法、釜の扱い方などの内容を講演し、有意義な時間となった。

○千玄室に首相顕彰授与「茶道で平和外交」

茶道裏千家前家元の千玄室（百歳）に四月二十日、岸田文雄首相から、茶道を通じた国際文化交流の発展に尽力したとして、内閣総理大臣顕彰が授与された。「日本文化の精神を世界に広め、平和外交の推進に貢献した」と長年の功績をたたえられた。

千玄室に首相顕彰授与「茶道で平和外交」
（提供：河北新報社）

○（公社）宮城県芸術協会茶道部「研修会」

五月二十一日、四流派（裏千家・武者小路千家・江戸千家・遠州流茶道）により、輪王寺において茶会が開かれた。コロナ禍のため中止していた茶会を四年ぶりに再開することもあり、試行的な茶会であったが、盛会裏に終了した。

４年ぶりに復活した茶会

○鉄砲館薫風茶会

五月二十一日、丸森町の金山城伊達・相馬鉄砲館が無料開放され、茶道裏千家による「薫風茶会」が開かれた。当施設は、令和四年に開館された。

○茶道・書道で日本文化を体験（米国高校生が来仙）

六月一日、アメリカ合衆国のコロンビアハイツ高校の生徒が、宮城県仙台東高等学校を訪れて茶道や書道をとおして交流した。コロンビアハイツ高校の生徒は、「学校はきれいで、生徒はみんな礼儀正しい。米国にいては知ることのできない日本を経験できた」と目を輝かせた。

異国で深まる絆　米国高校生が来訪
（提供：河北新報社）

○宮城県高等学校文化連盟栗原登米支部第三十回総合文化祭

六月二十四日・二十五日の両日、栗原市の若柳総合文化センターで行われた。栗原市・登米市の七つの高校が参加し、展示とステージの二部門で活動の成果を発表した。行事は四年ぶりに一般公開され、茶道では、立礼式のお点前で来場者をもてなした。

茶道や美術　腕前を披露
（提供：河北新報社）

○茶室の由緒 講談で説く ～大條家茶室比君亭～

九月二十三日、東日本大震災で被災した山元町文化財「大條家茶室此君亭」の由緒や価値を分かりやすく伝える講談会が、大條家菩提寺である徳本寺で開かれた。演目は、「伊達の血筋を守った男 大條道直」。講談師には村田琴之助。今回のために手掛けた台本を本堂で語った。

○第六十回宮城県芸術祭茶会

十月十四日・十五日の両日、輪王寺において開催。参加流派は六流派に留まったが、四年ぶりに開催され、参加者は和やかなひとときを過ごすことができた。全流派による芸術祭茶会に向けての一歩となった。

【茶席】

十四日：江戸千家　（千葉宗泰）
煎茶道三彩流　（星千丈）
武者小路千家（若林守有）

十五日：裏千家　（秋田宗優）
遠州流茶道　（高橋宗敬）
表千家　（白岩宗郁）

〈表彰〉

令和五年度宮城県芸術協会功績者表彰

佐藤宗安　（表千家）
五十嵐宗知（江戸千家）
菅原桂泉　（煎茶道三彩流）
石川宗悦　（宗偏流）
石澤晋方　（玉川遠州流）
嘉藤晋紅　（玉川遠州流）
澤田晋緑　（玉川遠州流）
松田晋好　（玉川遠州流）

宮城県文化の日表彰（教育文化功労）

安並妙美　（武者小路千家）

〈慶弔〉

桜田宗和　（宗偏流）　三月十六日
大槻守哲　（武者小路千家）　七月二十六日

主な茶会と関連事項

一月

八　日　織田流煎茶道明徳会初煎式
（ホテルメトロポリタン仙台）

九　日　煎茶道三彩流初煎会新年会
二十二日　裏千家新春の集い並びに茶名披露式
（ホテルメトロポリタン仙台）

二月
五　日　表千家宮城県教授者会　月釜
同　日　玉川遠州流支部総会並びに初釜茶会
（トークネットホール仙台）
十二日　江戸千家仙台支部初釜

三月
四　日　織田流煎茶道　塩竈公民館まつり茶席
（塩竈市公民館）
五　日　表千家宮城県教授者会　月釜
十一日　表千家同門会　第八回茶の湯文化にふれる市民講座
（仙台市福祉プラザ）
十一日
十二日　裏千家第一回研究会
（茶道裏千家淡交会宮城支部研修道場・Zoom 視聴）
十二日　煎茶道三彩流総会
十五日　玉川遠州流（渡邉晋祥）
日本伝統文化プロジェクトによる茶会
（茂ヶ崎庵）
二十六日　裏千家宮城支部総会（書面）

四月
二　日　表千家宮城県教授者会　月釜
十六日　石州清水流道閑会総会及び茶会
（家元邸）
同　日　煎茶道三彩流三世家元星悠丈七回忌・家元代理星清華三回忌追悼茶会
二十三日　大日本茶道学会 第五十三回仙台支部総会
（江巖寺）
二十九日　織田流煎茶道 第五十一回多賀城支部茶会
（鹽竈神社）

五月
七　日　表千家宮城県教授者会 月釜
同　日　玉川遠州流（渡邉晋祥）
城下町せんだい未来プロジェクト緑化フェア
（仙台緑彩館）
十一日　表千家宮城県青年部青葉茶会
二十一日　宮城県芸術協会研修茶会
（輪王寺）
【茶席】
裏千家　武者小路千家　江戸千家
遠州流茶道
【参加】
大日本茶道学会　石州清水流道閑会

同　日　煎茶道三彩流 第六十六回全国煎茶道大会
二十三日　裏千家 政宗忌（法要のみ）　（瑞鳳寺）
二十八日　遠州流茶道仙台支部研修茶会
同　日　石州清水流道閑会
未来の杜せんだい二〇二三緑化フェア茶会
（仙台緑彩館）

六月

四　日　織田流煎茶道家元研修会（仙台戦災復興記念館）
同　日　表千家宮城県教授者会 月釜
五　日　裏千家 栄西忌（法要のみ）　（瑞鳳寺）
十　日
十一日）　裏千家第二回研究会
（茶道裏千家淡交会宮城支部研修道場・Zoom 視聴）
十七日　織田流煎茶道 多賀城あやめまつり茶席
（多賀城市花あやめ園）
二十五日　大日本茶道学会本部並びに東北地区
各支部との交流・座談会（リモート開催）

七月

二　日　玉川遠州流第一回勉強会（風炉）
（トークネットホール仙台）
同　日　表千家宮城県教授者会 月釜
二十三日　裏千家定期巡回講演会
（茶道裏千家淡交会宮城支部研修道場）
三十日　石州清水流道閑会朝茶会　（家元邸）

八月

五　日
六　日
七　日）　裏千家 仙台七夕茶会
（茶道裏千家淡交会宮城支部研修道場）
六　日　表千家宮城県教授者会 七夕茶会

九月

九　日　一番町ストリート茶会
【茶席】
表千家井宮城県青年部　裏千家宮城青年部
十　日
十一日）　裏千家第三回研究会
（茶道裏千家淡交会宮城支部研修道場・Zoom 視聴）
十七日　織田流煎茶道 萩まつり茶席　（仙台市野草園）
二十四日　織田流煎茶道明徳会献茶式
（仙台市戦災復興記念館）

十月

一　日　表千家宮城県教授者会 月釜
同　日　玉川遠州流（渡邉晋祥）
城下町せんだい日本伝統文化体験フェア

（沖野市民センター）

四　日　裏千家宮城支部設立八十周年記念行事
（仙台国際ホテル）

五　日　裏千家塩竈神社献茶式・茶会　（鹽竈神社）
濃茶席（佐藤宗寿）薄茶席（松本宗眞）

八　日　織田流煎茶道 塩竈市芸術文化祭茶席
（塩竈市民交流センター遊ホール）

同　日　織田流煎茶道 史都多賀城万葉まつり茶席
（多賀城駅前）

十四日　第六回宮城県芸術祭茶会　（輪王寺）
【茶席】江戸千家（千葉宗泰）
煎茶道三彩流（星千丈）
武者小路千家（若林守有）
【参加】大日本茶道学会

十五日　第六回宮城県芸術祭茶会　（輪王寺）
【茶席】裏千家（秋田宗優）
遠州流（高橋宗敬）
表千家（白岩宗郁）
【参加】大日本茶道学会

十五日　石州清水流道閑会
開山玉舟和尚毎歳忌並びに
片桐石州三百五十周年忌法要及び茶会
（慈光院（奈良県））

二十一日
二十二日
二十三日　遠州流茶道全国大会（奈良県）

二十二日　玉川遠州流（渡邉晋祥）
日本伝統文化プロジェクトによる茶会
（茂ヶ崎庵）

二十九日　織田流煎茶道 七ヶ浜芸術文化祭茶席
（七ヶ浜国際村）

十一月

三　日　織田流煎茶道 多賀城芸術文化協会文化祭茶席
（多賀城市文化センター）

同　日　表千家同門会宮城県支部茶会

四　日　遠州流茶道 泉区文化祭茶会
（日立システムズホール仙台）

五　日　織田流煎茶道 泉区文化祭茶会
（日立システムズホール仙台）

同　日　玉川遠州流（伏見晋冲）しばた茶会（柴田郷土館）

同　日　表千家宮城県教授者会 月釜

十一日
十二日　裏千家第四回研究会
（茶道裏千家淡交会宮城支部研修道場・Zoom 視聴）

十二日　江戸千家支部茶会
十九日　玉川遠州流第二回勉強会（炉）
（トークネットホール仙台）
同　日　石州侯忌及び二代動閑忌茶会　（家元邸）
同　日　大日本茶道学会仙台支部研修茶会　（江厳寺）
二十五日　煎茶道三彩流 第三十二回東京大茶会
十二月
三　日　玉川遠州流（渡邉晋祥）
城下町せんだい日本伝統文化体験フェア
（西多賀市民センター）
九　日　玉川遠州流（渡邉晋祥）
年納めの茶会　（青峰堂）
十七日　裏千家 宗旦忌・茶筅供養（法要のみ）（瑞巌寺）

児玉宗睦（こだまそうぼく）
（裏千家宮城支部参与）

華道

五月八日、長らく続いた新型コロナウイルス感染症は五類へと移行した。それまでなにかと制限されていた商業活動や経済活動は元に戻り、マスク着用や外出の自由は、本来の姿に戻った。一方で、自衛の意味でマスクの着用や手指の消毒をする人もおり、選択の自由がうかがえた。

長かった。一言で表せばこれに尽きる。世界が団結して感染拡大防止に努めた当初から数年が経過した頃、芸術活動に参画しているというニュースを見れば、相変わらず一定間隔に席の空いた会場、マスクを着用した人々、感染予防の呼びかけが報じられ、その現状に歯がゆく、悔しさを感じることも多い日々であった。ゆえに、新型コロナウイルス感染症が五類に移行された日は、感慨深かった。我慢を強いられた芸術家がいよいよ雌伏の時を経て、貯められたエネルギーは令和五年の宮城の芸術シーン、そして華道界で多く感じられた。

まず紹介したいのは筆者がメンバーに名を連ねる八仙花。**八仙花inSENDAI～八仙花　宮城にいける～**である。

五類移行前夜とも言うべき、五月六日から八日まで、八仙花の第三回目となるいけばな展がせんだいメディアテーク五階を会場に開催された。〝東北ならでは・宮城ならでは〟に企画段階からこだわって開催したいけばな展。メンバー個々の気持ちが伝わるものになったのではないかと自負している。八仙花は、志を同じくする八人の華道家によって平成三十一年に結成。全員が一九七〇年代生まれという共通項を持ちながら、個性の異なる集合体が、お互いに切磋琢磨しながらいけばなの魅力を発信し、これからの華道界がより一層輝くようにという思いで活動している。メンバーの活動拠点は宮城県・群馬県・東京都・神奈川県・京都府・兵庫県とさまざまで、令和元年九月、兵庫県の生田神社会館にて発会記念展を開催。丹波焼と、グループ名「八仙花」の由来となった紫陽花とのコラボレーションを行った。その後のコロナ禍により、二年間の活動休止期間を経て、令和四年六月、紫陽花（八仙花）の美しい様子が見られる神奈川県の円覚寺にて第二回展を開催。今後、メンバー各地の拠点を巡回し、いけばなの魅力をさまざまな形で発信していく予定である。メンバーは大津智永（都未生流副家元／京都府）、岡田広山（広

山流家元／東京都）、佐伯一甫（未生流（庵家）家元／兵庫県）、塚越応駿（いけばな松風家元／群馬県）、西阪保則（専慶流家元嗣／京都府）、西村一観（清泉古流家元／宮城県）、藤原素朝（梶井宮御流家元／神奈川県）、望月義瑄（宏道流家元／東京都）である。

今展の目玉の一つは（公社）宮城県芸術協会工芸部の協力を仰ぎ、工芸作品を用いていけばな作品をいけるというコラボレーション。タイトル「宮城にいける」の由来ともなった企画である。花器の個性をいけばながどのように引き立てられるか、華道家としてチャレンジ精神が試されるコラボレーションであった。この試みは来場者の大好評を得て、のちに華道と工芸のコラボレーションの機会を増やしていくこととなる。

コラボレーション概要は次のとおり。

浅井裕子（陶芸）　×　佐伯一甫
浅野治志（陶芸）　×　藤原素朝
小川和子（陶芸）　×　西阪保則
加藤　晋（陶芸）　×　大津智永
鍋田尚男（ガラス）×　岡田広山
馬場興彦（陶芸）　×　望月義瑄
樋田　隆（陶芸）　×　西村一観
村山耕二（ガラス）×　塚越応駿

もう一つのコラボレーションは、宮城県内で最大規模のバラ生産農園である「宮城野バラ工房　梶農園」（名取市）。鮮度が良く、綺麗に咲く品質の高いバラを多く出荷している。今回はメンバーそれぞれが、梶農園で栽培されたバラの中から好みの品種を選び、作品に取り入れた。残る一席はそれぞれの個人席とし、テーマは設けず自由にいける席とした。

また、今回は初日に公開生け込みを行った。作品公開までに数作品は仕上げられ、未完成の作品は、公開中にいけ上げられた。システムとして荒削りなところも多く、実演形式としては望んでいるようなものではなかった。しかし、普段見せることのない、汗をかいて真剣に花をいける姿に、来場者も固唾をのんで見守る場面が見受けられた。次回の公開生け込みにつながる教訓を得られた機会であった。

会期中はあいにくの天候であったが、多くの来場者でにぎわいをみせた。いけばなへの情熱を肌で感じられ、次回のいけばな展への弾みとなった本展であった。次の本展が宮城県で開催されるのは、早くても八年後。心技体ともに成長した姿で全国のいけばなをお目にかけたいと願っている。

さて、前年と比較して、更に活発化した令和五年の宮城県の華道界。（一社）宮城県華道連盟の活動記録の一例を紹介する。

○全国都市緑化フェア

会期：四月二十六日～六月十八日

会場：仙台市内各所

仙台市での開催は平成元年の**89グリーンフェアせんだい**以来、三十四年ぶりとなった。五十四日間の期間のうち、六月五日から十日までは、（一社）宮城県華道連盟に加盟する全流派による大作二点が展示された。梅雨の時期であいにくの空模様な日が多かったが、客足は絶えず、大変嬉しいことであった。

○花と緑のココロ博二〇二三

会期：四月二十一日～二十三日

会場：夢メッセみやぎ

令和二年以来、三年ぶりの開催となった本展。こちらは、池坊・小原流・古流松藤会・清泉古流・仙昇池坊・道風流・本原遠州流・龍生派の八流派がそれぞれ大作を発表し、会場に伝統文化の華を添えた。

○オンラインいけばな展二〇二三

せんだいメディアテークの全面改修工事を受けて、当館を会場として開催されてきた**春のいけばな展**は中止となった。その代わりとして、ＹｏｕＴｕｂｅ上でオンラインいけばな展を開催し、多くの会員が〝マイベスト〟と自負する作品を出品した。

○一般社団法人宮城県華道連盟　認証式

長らく理事長を務めた朴澤一堂が勇退し、西村一観が新理事長に就任した。四十九歳での就任は歴代最年少で、これまで事務局長として連盟を支えていた。理事長として宮城県の華道文化の発展のために、引き続き精進することを誓った。

次に各流派の華道展・いけばな展を紹介する。

≪龍生派≫

○龍生派宮城県支部いけばな展～さわやかに～

会期：五月十三日～十五日

会場：せんだいメディアテーク五階

サブテーマが「さわやかに」とのことで、五月の若葉・新緑をイメージしていたが、見た目や香り、色彩に爽やかさを感じさせる構成であった。心爽やかになるいけばなを目の当たりにし、感心させられた花展であった。

≪本原遠州流≫

○本原遠州流いけばな展二〇二三　～秋・華・彩～

会期：十月十四日～十六日

会場：せんだいメディアテーク六階

毎回おなじみとなったテーマであるが、今回も花席に趣向

を凝らし、来場者を楽しませる花展となっていた。

《池坊》

○池坊仙台支部いけばな池坊展　時を超えて―夢・花・絆―

会期：十月二十一日～二十四日

会場：せんだいメディアテーク五階

古典から現代までの幅広い作品が並び、古典花の格調高いすばらしさと、普段から稽古の延長としての作品にも力を入れていることが伝わり、時を超えるという意味が確かに伝わる作品群であった。本来は、令和三年に開催予定であったが、コロナ禍にあって中止となった。それでも今回の開催にたどり着いた、仲間たちとのかけがえのない絆が感じられたいけばな展であった。

○第十回　保の里　池坊いけばな展

会期：十月二十八日～十一月三日

会場：秋保・里センター

○成澤志磨社中展　キュンするお花たち！

会期：十一月二十三日～二十五日

会場：せんだいメディアテーク一階

池坊では、有志によるいけばな展や宮城支部の成澤志磨社中によるいけばな展も開催された。特に成澤社中による社中展は、いけ手がキュンとする花・花器・花型をいけることを命題にした、とても意欲的な花展であった。流派を超えてもなお継続してほしい花展であった。

《小原流》

○花の輪・人の輪―みんなの花展～花のあるくらし～

会期：十月二十八日・二十九日

会場：せんだいメディアテーク一階

こちらのいけばな展は、会場の利点を活用した「外から見える展示」に興味を持った若者が多く足を運んでいたことが印象深かった。また、役員の大作がすばらしいことは言うまでもなく、サブテーマ「花のあるくらし」に倣い、生活雑器にいけた作品が多く、とても可愛らしくて目を惹いた。瓶や籠がとても良い器になると再認識した人も多かっただろう。

《草月流》

○丹野霞園展『結い』

会期：五月二十七日～三十一日

会場：せんだいメディアテーク六階

八十五歳と思えぬダイナミックで力強い作品群に圧倒された。これからも後進の指導をお願いしたい宮城県華道界の重鎮の一人である。

コロナ禍以前よりも活発になったかのように感じる宮城県の華道文化。このご時世に怯えていれば、大きな壁を乗り越えるための筋肉が萎縮したままかもしれない。動けるときこそ積極的に活動し、心も体も身軽になって自然を友とし、花をいけ、語らい、いけばなの良さを大いに広めていければと祈っている。

この時をこそ大切に。

西村一観（にしむらいっかん）

（一般社団法人宮城県華道連盟　理事長）

八仙花 in SENDAI ～八仙花　宮城にいける～
公益社団法人宮城県芸術協会工芸部とのコラボレーション作品

浅井裕子×佐伯一甫

浅野治志×藤原素朝

小川和子×西阪保則

加藤晋×大津智永

鍋田尚男×岡田広山

馬場興彦×望月義瑄

樋田隆×西村一観

村山耕二×塚越応駿

メディア芸術

宮城県芸術年鑑に「メディア芸術」部門が開設された平成二十八年度から執筆を担当してきた。二十一世紀に入ってから用いられるようになった「メディア芸術」という名称だが、この年鑑における執筆に際しては、既存の定義に限定されず、メディアと芸術の意味や関係性を常に確認する視点を示してきたつもりである。年度ごとに、そうした注意を払わなければならないほど、この名称の意味する範囲は広く、また、それを限定している国の定義は行政的に都合の良いものだからである。昨今、デジタル化された社会における今日的な事案として、芸術表現の行政上の区分の見直しが行われていることから、「メディア芸術」を起点として、改めて私たちの社会における芸術の分類や形式化について考えたい。

「メディア芸術」という言葉は、平成十三年に制定された文化芸術振興基本法（現：文化芸術基本法）で定義された。第三章第九条で「映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術」とされている。文化産業を振興する政策的な意図として、サブカルチャーも含め、範囲が広く設けられていることは折り込み済みだとしても、その意味するところは漠然としている。何らかの方法でコンピューターを用いた芸術を示す程度の条文だが、メディアとは言うまでもなく、本来の意味においてコンピューターや電子機器だけを示すものではない。身体そのものを含めて、メディアを介さない表現は存在せず、全てはメディア芸術だとみなすこともできる。英語圏においては、コンピューターなどのデジタル機器を用いた表現を焦点化する際には、「ニューメディア」という名称が用いられてきた。それによって伝統的なメディアと線引きしつつ、日進月歩する過渡的なデジタル技術については、新旧の概念によって、今後も解釈できるよう幅が持たされている。逆にいえば、たかだか、新しいか古いかの違いを示すだけであり、表現とメディアの関係性を普遍的なものとする前提に立っての言葉の運用である。これに対して日本社会が、メディアをマジックワードのように用いて、芸術の区分を行政的に新造してしまったことについては恥じるほかない。

さて、芸術の区分をめぐる問題は、メディア芸術だけにとどまるものではない。こうした曖昧なジャンルが新造される

淵源は、「美術」における形式主義への傾倒に見てとれる。近年になって国の組織では芸術の区分についての見直しが実施されている。日本芸術院の分科の改定と、国の芸術選奨の区分の改定がそれであるが、これらに見られる共通点とは、旧態依然とした形式主義を見直し、美術の区分を整理し拡大したことである。

文化芸術の功労者への顕彰機関である日本芸術院は、大正八年発足の帝国芸術院を前身とし、戦後の昭和二十二年に現在の名称に改められた。日本芸術院は、三つの「部」と、その中をいくつかの「科」に分けて構成されている。第一部は美術、第二部が文芸、第三部が音楽・演劇・舞踊である。この日本芸術院の分科が令和三年度に改定された。それ以前にも幾度か分科は変更されてきたが、このたびの改定は画期的なものであったといえる。特に、帝国美術院から変更のなかった美術の分科が、実に一世紀以上ぶりに改定されたのである。第一部である美術では、日本画と洋画は版画とともに「絵画」として統一された。また「建築・デザイン」、「写真・映像」などが美術に加わっている。第二部である文芸には、「評論・翻訳」と「マンガ」が加わり、また第三部である音楽・演劇・舞踊に、「映画（アニメーション、放送、脚本含む）」が加えられるなどしている。日本芸術院の分科は、形式主義の象徴であり、もはや変更は不可能かと思っていたが、関係各位の強い意志によって、今日的な姿に修正されたのである。

また一方では、文化庁による芸術選奨の区分が、令和五年度に変更された。こちらは、美術について、美術Ａと美術Ｂに分けられた。美術Ａの対象が、絵画（版画含む）・彫刻（インスタレーション含む）・工芸・書等の作家。美術Ｂの対象が、建築・デザイン・写真・映像・メディアアート・その他の新傾向の作家、となっている。そして、「メディア芸術」については、美術とは別に、デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等となり、エンターテインメント要素に統一された。

これらに比べて、宮城県のほうはどうだろうか。宮城県芸術年鑑の区分は、昭和五十六年度版で「音楽」が洋楽と邦楽に分けられ、平成八年度版からは「邦楽」が、邦楽と芸能に細分された。そして、しばらく時間をあけて、平成二十八年度版に「メディア芸術」が追加されている。しかし、美術に関する区分の修正がないままメディア芸術が追加されたことで、かなり歪んだものになってしまっているのではないだろうか。二十一世紀に入り二十年が経過した現在、もはや「洋画」という区分はナンセンスであるといわざるをえず、「写真」とメディア芸術が区別されていることも説明がつかない。さらには、今日では支配的な表現形態である「インスタレーショ

ン」をどう位置付けるかも示されないままである。

メディア芸術という名称については、文化芸術基本法に、その名が登場する以上、法改正をしない限り文化庁など国の機関は今後も用い続けるのだろう。ただし日本芸術院の分科には、メディア芸術の名称はない。こちらではアニメ、マンガ、映像はそれぞれ別個のジャンルとして扱われている。メディウム／メディアとそれに伴う表現形態の差異に基づくのが、こうした区分であると考えれば、日本芸術院の分科ほうが適切であるといえるだろう。メディア芸術という経済産業政策に片足を置いた曖昧な言葉を、文化芸術のための法律に用い、その内容を定義するように記述してしまったことが重ねて悔やまれるが、前述のような国の組織の文化芸術に対する認識の変更を受けて、当然、宮城県も何らかの対応が必要になるだろう。その整理は、大きく二つの方向に絞られるはずである。文化庁のように美術の領域を拡大して、メディア芸術の中のファインアートの要素を、美術や音楽、演劇などの区分で吸収し、商業的なデジタル文化全般の部門をメディア芸術とするか、日本芸術院のように、メディア芸術という言葉の中に複数のメディアがひとまとめにされた状態を開き、個々の独立したジャンルとして立ち上げるかのいずれかである。現状の宮城県芸術年鑑は、日本芸術院における部と科が混在しており、特に美術の分野において整理を難しくしている。もちろん、規模の違いから国と同じように区分することが得策でない場合もあるだろうし、また県独自の区分があってしかるべきだが、少なくとも現状維持という選択は難しいのではないかと思われる。

もともと「美術」はドイツ語の「工芸芸術」や「視覚芸術」の訳語であるが、そもそも視覚芸術においてファインアート（純粋芸術）が概念からして存在しなかった日本では、明治六年のウィーン万博に出品する際、工芸品などのアプライドアート（応用芸術、応用美術）に対して「美術」を用いた。その後、明治九年に工部美術学校が開かれ、近代化政策の一環として、西洋の絵画技法と彫刻技法が「美術」として教育される。その際にはファインアートが美術の前提になっている。そして工部美術学校の廃校から六年後の明治二十二年に、工部美術学校を統合再編するとして、東京美術学校が開校するが、その当時は国粋主義の隆盛もあって、開校時の学科は、日本画・木彫・彫金・漆工であり、ファインアートについての教育というよりは伝統文化の再興に主眼がおかれた。そして開校から七年を経て、絵画・図案・塑造・西洋美術が追加されていくことになり、結局のところ、ファインアートとアプライドアートの領域が曖昧なまま、高等教育機関が設置されてしまい、戦争を経てもほぼ未整理なまま現在に至っているのである。そして、二十一世紀に新設した「メディア芸術」

という枠組も、ファインアートと、大衆芸術である映画やマンガ、アニメを一括りにしたものであり、過去の経緯が活かされず視覚芸術の中に複雑な入れ子構造を作っている。

アナログからデジタルへとメディアの形式が移行し、さらにインターネットとクラウドコンピューティングによってデータの交換や閲覧が中心になってきた時代にあってこそ、危機感を持ってメディアと表現の関係性を見直そうとする必要があるだろう。メディアという言葉と同様に、実のところ曖昧だった「芸術」や「美術」という言葉の上に成立した日本型の形式主義にとどまっていては、結果的に、同質化を目的とした技術の優劣を競うだけの様式美的な探求に終始していくことになる。また、誤解されがちであるが、メディアと表現の関係性を、現在の状態に即して整理することは、伝統を軽視するものでは全くない。多くの伝統文化の従事者がいうように、伝統とは技術的な継承の上に、現在における発展を志向しなければ廃れてしまうのである。そのため、過去からの技術を用いながら、表現の主題が現在に求められることは当然の帰結である。そして今日では、芸術に対して、純粋性や実用性という観点ではなく、主題とコンセプトの関係性によってその質を問うようになった。すなわち、表現者がこの世界に対してどのような意志を持ち、それをどのような方法で具現化して伝達するか、そのアイデアや構築術が問われている。メディウムが生む技法の差異は、その構想全体の一部分でしかないのである。

＊

最後に、私たちの社会の現在と、メディウム／メディアの関係性を問うクリティカルな活動を紹介したい。

「建築ダウナーズ」は、菊池聡太朗、千葉大、吉川尚哉による建築を土台としたデザインチームである。メンバーはいずれも東北大学大学院都市建築学専攻出身で、それぞれ個人でもアートやデザインの活動をおこなっている。建築ダウナーズは、これまでに、せんだいメディアテークのいくつかの什器の設計と制作をしたほか、仙台市沿岸部に小屋を建てるプロジェクトや、複数の美術家の展示什器制作や美術館での会場設計などをおこなっている。そうした彼らが、現在、制作の拠点としている六丁の目のスタジオで、令和五年二月七日から三月十一日に、木材をめぐる調査活動の成果展「ウッズ・イン・ザ・バックミラー」を開催した。

新型コロナウイルスのパンデミック以降、ウッドショックと呼ばれる世界的な木材の高騰が起きた。伐採から輸入にかかわる作業員が不足し、サプライチェーンが滞ったことで、令和三年ごろから顕著な供給不足がおき、ホームセンターなど小売店での値段が跳ね上がったのである。木工によって制作を行う彼らは、直接的な影響を受けた。また、他方では、

毎年春先に本州全域で多くの人が花粉症に悩まされている状態がある。これは戦後復興において木材確保を目的に実施した「拡大造林政策」によって全国の山々にスギやヒノキといった針葉樹を植えた結果、もたらされた事態である。現在、国土の森林の四割が人工林であり、そのうち七割が木材のためのスギとヒノキの森林である。にもかかわらず、実際には輸入木材がシェアの大半を占めているのだ。これは一体どうなっているのか。このウッドショックをきっかけとして、彼らは林業や木材の実態について調べることにしたのである。

六丁の目の印刷工業団地の中に間借りしたスタジオ内には、丸森町で切り出された製材加工前のスギの原木や、県内各地で林業や製材に従事する人たちへのインタビューをまとめた冊子や映像が配置されている。展示していた内容は以下のとおりである。

一. 丸森町の研修森「親林」から伐り出したスギの丸太
二. 丸森町の材木店で製材したスギの材木（乾燥の工程も含む）
三. インタビュー記録冊子
　森川輝雄（くりこまくんえん（栗原市））
　刈田路代（Woods and People MARUMORI 代表（丸森町））
　佐藤秀夫（元木材運搬業（丸森町））
　杉原敬（木工房 瑞（南三陸町））
四. 映像
　丸森町の「親林」で木を伐り出し、材木店へ運ぶ様子
　丸森町から仙台の工場まで丸太を運ぶ様子
　材木店で丸太を製材する様子
五. 丸太を使った家具や構造物のアイデアスケッチ
六. 丸太の皮を剥ぐ工程の実物展示

記録はどれもいきいきと、山林と関わる人の営みの魅力を伝えている。しかし、その反面で現実は厳しい。林野庁の令和四年度版森林白書によれば、国内では、昭和六十年に十二万六千人だった林業従事者は、令和二年には四万人三千人と三分の一に減っている。従事者の高齢化率（六十五歳以上の従事者）は若干の若返り傾向が見られるものの、二十五％と高い。また、年間平均給与も、全産業平均と比べ百万円ほど低い状況のようである。明らかに、林業の従事者の確保が難しくなっていることが分かる。山林の管理が行き届かず、間伐がなされない人工林は、日照不足により、太い幹を持つ木が育たなくなる。そして、輸送のコストを上乗せしてもなお輸入材がシェアの六割を占めている現実がある。これを見れば、現状のまま競争原理に任せていても埒が明か

ないのは明白である。人工林の植生自体を見直す観点の取り組みは徐々に始められているようだが、戦後に増やしすぎたスギを積極的に伐採して消費し、その後に広葉樹を植林することで、長い時間をかけて植生の割合を調整する大型の公共事業へと、本格的に舵を切っていく必要があるのではないだろうか。ただし、こうした状況に接しても、建築ダウナーズは悲観的ではない。樹木は日本の社会や文化にとっての根源的なメディアであるが、それ以前に成長に長い年月を要する生命であって、だからこそ、ＳＮＳをはじめとする昨今のメディアに翻弄され、見通しを失いつつある私たちに、あるべき未来の環境を想定させるのである。彼らの活動は、この時代にそうした木というメディアを再発見した喜びにこそ根ざしている。

　このプロジェクトのタイトル「ウッズ・イン・ザ・バックミラー」の元になったわけではないようだが、メディア論で有名なマーシャル・マクルーハンに次のような言葉がある。〈われわれはバックミラーを通して現代を見ている。われわれは未来に向かって、後ろ向きに進んでゆく〉

　この言葉は、運転中の車のバックミラーに馬車が映っているイラストでよく説明される。メディアが、ラジオからテレビ、そしてインターネットと進化するにつれて、過去のメディアは、新たなメディアに内包され、そのコンテンツとして扱われるようになること。それよって私たちは、新しいメディアを認識しているということの説明である。マクルーハンにとってメディアとは、ただの媒体ではなく、テクノロジーであり、人工物（アーティファクト）と同義であった。私たちは、人工物の進化だけを映すバックミラーをこの百二十年あまり見続けてきた。自然はミラーの外側に無限に広がっていると考えてきたのである。しかし、もはや普遍の象徴であった自然は、人の手でコントロールして保全することが必要な時代に入っている。自然はミラーのフレームの内部に収まっているのだ。まして人工林は名の示すとおりである。ただし、マクルーハンのテーゼは、自然環境との共存を考える上ではむしろ好都合なのだ。私たちは、過去に壊した環境が少しずつ回復していくさまを、常にバックミラーに捉え続けられるからである。その意味でも、建築ダウナーズのこのプロジェクトは、等身大の目線から木材というメディアの現在をリサーチし、バックミラーの真ん中に据えて焦点化することで、社会の課題を提起した画期的なものであった。

　デジタルメディアが身体と分かち難くなった時代に入って、私たちは、過去から用いてきた数値化以前のメディアとの関係性を見失いつつある。それは若い世代ほど自覚的であり、遡及的に探求する過程で得た情報や経験を、未来に向け

た創造的遺産として再構築し、メディアを主題とする芸術として実践的に提示しはじめている。

清水建人（せんだいメディアテーク企画事業係長／学芸員）

建築ダウナーズ「ウッズ・イン・ザ・バックミラー」　　写真撮影：長崎由幹

建築ダウナーズ「ウッズ・イン・ザ・バックミラー」　　写真撮影：長崎由幹

広域文化団体の文化活動記録

（県内の文化団体のうち二十団体を掲載。（令和五年十二月三十一日現在））

（公社）宮城県芸術協会
宮城県文化協会連絡協議会
（公社）日本舞踊協会宮城県支部
宮城県吹奏楽連盟
宮城県合唱連盟
宮城県おかあさん合唱連盟
仙台三曲協会
宮城県能楽振興協会
宮城県洋舞団体連合会
宮城県歌人協会
宮城県俳句協会
宮城県川柳連盟
宮城県詩人会
（一社）宮城県華道連盟
宮城県民芸協会
（公財）日本民謡協会宮城県連合会
全国民謡連盟宮城県連合会
宮城県民謡道連合会
宮城県写真連盟
宮城県文化財友の会

■凡　例

㊫…… 所在地
㊬…… 電話番号
㊭…… 代表者
㊮…… 構成員数
㊯…… 所属流派
㊰…… 構成員の資格
㊱…… 創立年月
㊲…… 定期刊行物

公益社団法人　宮城県芸術協会

㊫ 〒九八〇―〇八〇二　仙台市青葉区二日町十六―一二日町東急ビル五―B

電 〇二二―二六一―七〇五五

代 理事長　吉田　利弘

数 千八百七十人

格 正会員になるためには会員二名以上の推薦を受け、理事会の承認を得なければならない

創 昭和三十九年五月

刊 機関誌「はなやま」（年四回発行）

「宮城県文芸年鑑」（年一回発行）

開催月日	催事名	場所
3／12	みやぎミュージックフェスタ in くりはら	栗原文化会館
3／25	第九回子供の邦楽コンサート	仙台市戦災復興記念館
7／14	東北・北海道芸術文化団体協議会創立五十周年記念シンポジウム	仙台国際センター
7／29	第三回宮城県各流子ども舞踊大会	仙台市福祉プラザ
11／8～12	第四回杜のみやこ工芸展	TFUギャラリーミニモリ
11／20～26	第六十回宮城県芸術祭絵画展受賞者作品展	東京エレクトロンホール宮城
11／29～1／19	書道部による県内小中学校の講師派遣事業	県内小中学校七校
12／11～17	第十回定禅寺フォトコンテスト展	東京エレクトロンホール宮城
〈第五十九回宮城県芸術祭〉		
2／13	第四十三回音楽コンクール予選	日立システムズホール仙台
3／19	第四十三回音楽コンクール本選（ピアノ部門）	日立システムズホール仙台
3／26	第四十三回音楽コンクール本選（ヴァイオリン部門）	日立システムズホール仙台
〈第六十回宮城県芸術祭〉		
9／23	開会式	せんだいメディアテーク
9／23～26	写真展	せんだいメディアテーク
9／23～26	フォトサミット in Sendai 2023	せんだいメディアテーク
9／23～26	絵画展（公募の部）	せんだいメディアテーク
9／23～26	彫刻展・彫刻公募展	せんだいメディアテーク
9／30～10／3	絵画展	せんだいメディアテーク
10／7～10／10	華道展	せんだいメディアテーク
10／7～10／10	書道展	せんだいメディアテーク

9／24	第四十三回音楽コンクール ガラコンサート	日立システムズホール仙台
10／5	文学散歩	奥州市・一関市方面
10／14・15	茶会	輪王寺
10／15	「宮城県文芸年鑑」発行	
10／15	長唄演奏会	トークネットホール仙台
10／28	文芸祭	東京エレクトロンホール宮城
10／28	音楽会	日立システムズホール仙台
11／8～12	工芸展	TFUギャラリーミニモリ
12／1	表彰式	ホテルメトロポリタン仙台

宮城県文化協会連絡協議会

㊫ 〒九八六―〇八三二　石巻市泉町三丁目一―六三
石巻市文化協会内

㊫ ○二二五―二二―四六八九

㊫ 会長　足立　岳志

㊫ 六十一文化協会（約三万三千五百人）

㊫ 宮城県内市町村を単位とした文化・芸術協会

㊫ 昭和五十三年六月

㊫ 会報「くぐなり」（年一回発行）
宮城県文化協会運営状況「心の華」（二年に一回発行）

開催月日	催事名	場所
11／11・12	第二十六回みやぎ県民文化祭	美里町文化会館
12／6	第四十二回宮城県文化協会運営研修会	石巻グランドホテル

本会は、宮城県内の文化（芸術）協会相互の連絡調整を図り、その発展を助長するとともに文化芸術活動を通じて県民文化の振興と向上に寄与することを目的として活動している。

大きな事業として、加盟文化団体の作品や演目を発表する「みやぎ県民文化祭」を主催し、各加盟協会の活動事例報告や意見交換の場としての「文化協会運営研修会」を、ブロックごとに持ち回りで開催し、交流を図っている。

主な事業は、昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症の完全な終息の見えない状況の中であったが、盛会のうちに終了した。今後は、会員の獲得や新事業の展開といった諸課題に取り組み、文化活動の更なる発展を目指している。

（会長　足立　岳志）

公益社団法人日本舞踊協会宮城県支部

㊫ 〒九八〇―〇〇二三　仙台市青葉区北目町四―三―九〇一（藤間寿和枝方）
㊟ 〇二二―二一一―六七〇一（藤間寿和枝方）
㊥ 支部長　水木　歌泰
㊨ 二百人
㊩ 公益社団法人日本舞踊協会会員であるとともに宮城県支部会員（扇の会会員含む）、師範名取・普通名取であること
㊧ 昭和三十五年十一月

開催月日	催事名	場所
7／29	（公社）日本舞踊協会宮城県支部第三回宮城県各流子ども舞踊大会	仙台市福祉プラザふれあいホール
12／3	（公社）日本舞踊協会宮城県支部歳末たすけ合い第六十回各流舞踊大会	電力ホール
12／15	文化庁統括団体によるアートキャラバン事業　宮城公演	電力ホール

宮城県支部に加盟している各流派は、それぞれ活動をした。

令和六年六月九日「（公社）日本舞踊協会宮城県支部第三十五回各流舞踊公演」開催予定

令和六年八月十日「（公社）日本舞踊協会宮城県支部第四回宮城県各流子ども舞踊大会」開催予定

令和六年十二月一日（公社）日本舞踊協会宮城県支部「歳末たすけ合い第六十一回」開催予定

その他（公社）日本舞踊協会本部の指示による事業への協力並びに県下、関連団体との連絡提携及び地域交流の親睦を深めることに努めている。

（庶務　吉村　花照）

宮城県吹奏楽連盟

㊫ 〒九八一―〇九〇四　仙台市青葉区旭ヶ丘三―三四―一〇 キャピタル旭ケ丘三〇二
㊟ 〇二二―二七五―六七六一
㊥ 会長　鈴木　芳夫
㊨ 八千九百五十八人（三百三十二団体）
㊩ 宮城県内の小学校・中学校・高等学校・大学・職場・一般の吹奏楽団体
㊧ 昭和三十三年

㊐ すいそうがく（全日本吹奏楽連盟発行）（年四回発行）
HP「宮城県吹奏楽連盟」www.ajbaor.jp/miyagi/
Facebook「楽器BANK　宮城県吹奏楽連盟」

開催月日	催事名	場所
1／14・15	第五十六回宮城県アンサンブルコンテスト	トークネットホール仙台
5／20・21	第三十八回宮城県管打楽器ソロコンテスト予選	仙台市立上杉山通小学校
6／4	第三十八回宮城県管打楽器ソロコンテスト	中新田バッハホール
8／3～6	第六十六回宮城県吹奏楽コンクール	マルホンまきあーとテラス
9／2・3	第六十六回東北吹奏楽コンクール	マルホンまきあーとテラス
9／16	第四十二回全日本小学生バンドフェスティバル宮城県大会	カメイアリーナ仙台
9／16	第三十六回全日本マーチングコンテスト宮城県大会	カメイアリーナ仙台
11／23	みやぎスーパーバンド第二十七回演奏会	広瀬文化センター
12／24	第四十五回東北吹奏楽の日演奏会	トークネットホール仙台

令和五年は、新型コロナウイルス感染症が五類に移行したことに伴い、できる限りコロナ禍以前の内容に戻しながら事業を進めた。吹奏楽コンクールは会場の都合もあり、一定の制限は設けたものの、そのほかの事業はコロナ禍以前の運営方法に戻し、多くの方々に足を運んでいただくことができた。また、「みやぎスーパーバンド演奏会」を四年ぶりに開催したが、前回大会以上の客足があり、大盛況で終えることができた。

令和六年は、五年ぶりの「六十二万石吹奏楽祭」の開催に向け、加盟団体や各関係機関と協力していく方針である。

今後の事業については、「宮城県吹奏楽連盟ホームページ」と「Facebook 宮城県吹奏楽連盟」などのSNS等で随時お知らせする。

（事務局長　菊地　憲昭）

宮城県合唱連盟

㊝ 〒九八〇―〇〇〇一　仙台市青葉区中江二―二四―五
（八巻輝子方）

電　〇九〇―二九五七―二九七五
代　理事長　水口　裕子
数　千九百五十人
格　宮城県内の中学校・高等学校・大学・職場・一般の合唱団
創　昭和二十四年五月
刊　ハーモニー（全日本合唱連盟発行）（年四回発行）

開催月日	催事名	場所
1／9	第二十四回男の合唱まつりinみやぎ 第一部（コンサート） 第二部（交流会）の開催は中止	日立システムズホール仙台
5／20・21	第七十五回宮城県合唱祭 講師：坂崎隆浩　三野宮まさみ 内部講師：水口裕子　馬目佳代子 佐藤亮　早川幹雄	名取市文化会館
6／11	第四十六回全日本おかあさん合唱コーラス東北支部大会 推薦委員：大志万明子　辻裕久 なかにしあかね	日立システムズホール仙台
7／29・30	宮城県合唱講習会 （正会員講習会を兼ねる） 講師：辻秀幸 内容：合唱団のための講座	太白区文化センター
8／27	第七十五回全日本合唱コンクール宮城県大会 審査員：北原幸男　清水敬一 廣澤敦子	名取市文化会館
12／17・18	第三十五回宮城県合唱アンサンブルコンテスト 審査員：吉川和夫　近藤裕子 福永一博	広瀬文化センター

コンクールの審査結果や今後の行事等については、宮城県合唱連盟のホームページをご確認いただきたい。

（事務局長　八巻　輝子）

宮城県おかあさん合唱連盟

所　〒九八三―〇八二一　仙台市宮城野区岩切新宿前二六（石井文子方）
電　〇二二―二五五―六一一一（石井文子方）

㊐ 理事長　原田　博之
㊖ 四百五十人
㊗ 宮城県内の女声合唱団で当連盟に加入していること
㊐ 昭和四十八年十月
㊒ 機関紙「うたごころ」（年二回発行）

開催月日	催事名	場所
2／14	総会及び第一回幹事会	仙台市戦災復興記念館
6／8	第二回幹事会	エル・パーク仙台
6／8	機関誌「うたごころ」九十三号発行	
7／21・22	第五十一回宮城県おかあさん合唱祭	日立システムズホール仙台
11／11	合唱講習会	仙台市戦災復興記念館
	定例理事会（年七回）	

仙台三曲協会

㊐ 〒九八二―〇〇一二　仙台市太白区長町南三―一八―一（渡辺悦子方）
㊑ ○二二―二四七―八五二八（渡辺悦子方）
㊐ 会長　渡辺　悦子
㊖ 四百七十二人
㊗ 協会所属の各流派会員で教授資格の有する者並びに日本音楽を愛好する者
㊐ 昭和三十年十月
㊒ 仙台三曲協会三十年史（昭和六十二年九月発刊）
仙台三曲協会年史・続編一（平成三年十一月発行）
仙台三曲協会年史・続編二（平成八年十一月発行）
仙台三曲協会年史・続編三（平成十三年十一月発行）
創立五十周年記念仙台三曲協会年史（平成十八年十一月発行）
仙台三曲協会年史・続編五（平成二十四年十一月発行）

開催月日	催事名	場所
1／31	三曲鑑賞授業	仙台市立鹿野小学校
2／7	三曲鑑賞授業	仙台市立東二番丁小学校
3／25	第九回子供の邦楽コンサート	仙台市戦災復興記念館
9／3	第三十六回都山流宮城県支部尺八演奏会	日立システムズホール仙台
11／12	第六十五回仙台三曲協会定期演奏会	トークネットホール仙台
11／24	第六回箏曲地歌演奏会	仙台市戦災復興記念館
12／1	三曲鑑賞・体験授業	仙台市立鶴谷東小学校

12／6～14　尺八体験授業　仙台市立郡山中学校
12／18・19　三曲鑑賞・体験授業　仙台市立東長町小学校
12／20　三曲鑑賞・体験授業　仙台市立西中田小学校
12／20・21　尺八体験授業　仙台市立東長町小学校
（仙台三曲サポート会会長　宮澤　寒山）

宮城県能楽振興協会

㊐ 〒九八一―八〇〇二　仙台市泉区南光台南三丁目一二―一九
（鈴木敏彦方）
電 〇二二―二五二―一四七〇（鈴木敏彦方）
代 会長　鈴木　敏彦
数 六百七十人
格 謡曲・仕舞・囃子・狂言の指導者及びその指導者に師事している者
創 昭和四十九年六月
刊 ＨＰで公開中
ＨＰ https://sendai-nogaku.org/

開催月日	催事名	場所
1／22	第三十九回市民能楽講座　喜多流能「融」大蔵流狂言「清水」	日立システムズホール仙台シアターホール
2／5	碧水園能　喜多流能「通小町」和泉流狂言「富士松」	白石市碧水園能楽堂
3／11	第十六回謡曲大会　素謡八番、連吟三番	能-ＢＯＸ
3／18・19	謡曲・仕舞講習会	登米公民館
6／2	仕舞講習会	登米公民館
6／16	登米中学校能体験事前講義	登米市立登米中学校
6／23	登米中学校能体験学習　声の出し方・仕舞の所作など	伝統芸能伝承館「森舞台」
8／5	碧水園能楽堂特別公演能・狂言鑑賞会	白石市碧水園能楽堂
9／16	観世流能「百萬」大蔵流狂言「栗焼」	伝統芸能伝承館「森舞台」
10／21・22	第四十六回登米薪能　登米能「橋弁慶」狂言「附子」仕舞	登米公民館
11／5	謡曲・仕舞講習会　囃子と仕舞の会　仕舞十番　居囃子三番　独調一番	能-ＢＯＸ
11／5	伝統芸能伝承会　登来能「橋弁慶」、狂言「附子」、仕舞	伝統芸能伝承館「森舞台」
11／23	第一回仙臺能　観世流能「巻絹」大蔵流狂言「梟山伏」	日立システムズホール仙台シアターホール

○仙台市

一　仙台市能楽振興協会の事業

（一）新型コロナウイルス感染の対応が五類に移行したことに伴い、能楽に係る活動が正常な状態に戻ってきた。

（二）一般市民を対象とした「能のおけいこ体験講座」が、喜多流、宝生流、金春流の三流がそれぞれ発表会を含めて全六回、能-ＢＯＸにおいて実施された。

（三）（公財）仙台市市民文化事業団が主催する「能-ＢＯＸゼミナール」～今をつらぬく古典の光～が、ゲストスピーカーの話を中心に五回開催され、仙台市能楽振興協会は協力の立場で参画した。

○白石市

白石市歴史文化を活用した地域活性化実行委員会事業である「白石市・子ども能楽教室」が、月二回・年間十六回、碧水園能楽堂で開催され、延べ百八十三人の子供が参加した。

○登米市

（一）登米謡曲会の月並会が伝統芸能伝承館「森舞台」及び登米公民館において、計十一回行われた。

（二）登米謡曲会主催で登米市の各施設において、登米能、狂言、謡の指導や鑑賞および公演が行われた。

（会長　鈴木　敏彦）

宮城県洋舞団体連合会

㊫　〒九八一―三二〇一　仙台市泉区泉ヶ丘三―四―二一
横田アートスタジオ

㊬　〇二二―三七三―五五一三

㊦　会長　横田　百合子

㊥　八団体

㊧　宮城県内に在住し、洋舞活動をしている団体の主宰者及び指導者

㊨　昭和四十五年十一月

㊩　洋舞公演十年の歩み（昭和五十五年四月発行）
洋舞公演二十年の歩み（平成三年三月発行）
洋舞公演三十年の歩み（平成十二年十月発行）
洋舞公演四十五年の歩み（平成二十八年三月発行）

開催月日	催事名	場所
2／25	第十八回全国ダンスコンペティション in仙台（クラシック部門）（アンサンブル部門）	日立システムズホール仙台シアターホール
2／26	第十八回全国ダンスコンペティション in仙台（モダンダンス部門）	日立システムズホール仙台シアターホール

11／12　第五十一回洋舞公演　東京エレクトロンホール宮城
第四十三回ジュニア洋舞公演　大ホール
（理事長　佐取　純子）

宮城県歌人協会

㊫ 〒九八二―〇二五二　仙台市太白区茂庭台一丁目一四―二四（佐野督郎方）
㊬ ○二二―二八一―三九〇八（佐野督郎方）
㊥ 会長　佐野　督郎
㊮ 加入団体：十五団体（二百四人）
個人会員：十八人
㊧ 宮城県内の短歌結社等の団体に所属する者、又は宮城県内に在住し若しくは活動する歌人
㊨ 昭和二十四年四月
㊪ 宮城県歌人協会年報（年一回発行）
第三十四回宮城県短歌賞作品集二〇二三（年一回発行）

開催月日	催事名	場所
6／9	第七十回宮城県短歌大会	仙台文学館
11／26	第三十四回宮城県短歌賞授賞式・歌人の集い	東京エレクトロンホール宮城

（会長　佐野　督郎）

宮城県俳句協会

㊫ 〒九八三―〇八五二　仙台市宮城野区榴岡四―一一―一―七〇二（篠沢亜月方）
㊬ ○二二―三五五―八七五七（篠沢亜月方）
㊥ 会長　高野　ムツオ
㊮ 二百六十四人
㊧ 宮城県在住者及び出身者で、本会の目的に賛同する者
㊨ 昭和二十九年六月
㊪ 宮城県俳句協会会報（年三回発行）

開催月日	催事名	場所
1／9	新春賀詞交歓会	仙台市シルバーセンター
2／26	定時総会	東京エレクトロンホール宮城
4／29	第五十三回宮城県俳句大会	東京エレクトロンホール宮城
11／12	第六十九回松島芭蕉祭・全国大会	瑞巌寺・松島町文化観光交流館

第四十七回宮城県俳句賞は伊藤一男が受賞。準賞には平山北舟、坂下遊馬。
（幹事長　篠沢　亜月）

宮城県川柳連盟

㊫ 〒九八〇―〇〇一一　仙台市青葉区上杉二丁目四―八
朝日プラザ上杉六〇七
㊥ 〇二二―二二七―〇五七五
㊦ 理事長　雫石　隆子
㊨ 二百五十人
㊩ 加盟結社（吟社）二十三社の会員
㊧ 昭和四十八年九月
㊪ 宮城県川柳連盟会報（年一回発行）
宮城県川柳大会報（年一回発行）

開催月日	催事名	場所
4／17	第五十回宮城県利府川柳大会（事務局長　堀之内　稔夫）	東京エレクトロンホール宮城

宮城県詩人会

㊫ 〒九八〇―〇八〇五　仙台市青葉区大手町二―二五―五〇三（汐海治美方）
㊥ 〇二二―七二一―三一五八
㊦ 会長　佐々木　洋一
㊨ 三十六人
㊩ 宮城県在住または出身者及びそれに準ずる者で、詩作品の実作者及び研究者
㊧ 平成十七年三月
㊪ 宮城県詩人会会報（年一回発行）
アンソロジー『宮城の現代詩』（年一回発行）

開催月日	催事名	場所
2／18	ポエトリーカフェ①『宮城の現代詩二〇二二』を読む	オフィス汐
3／25	ポエトリーカフェ②詩の素人が詩を読む㈠	オフィス汐
5／27	ポエトリーカフェ③詩が伝えられること	オフィス汐
7／15	ポエトリーカフェ④詩の素人が詩を読む㈡	オフィス汐
8／26	ポエトリーカフェ⑤詩集『でんげん』から	オフィス汐
9／26	ポエトリーカフェ⑥朗読パフォーマンス「湾をめぐって」	オフィス汐
10／7	ポエトリーカフェ⑦『仙台明石屋物語』	オフィス汐

11／18　ポエトリーカフェ⑧　オフィス汐
小高生まれの憲法学者鈴木安蔵さん
11／25　ポエトリーカフェ⑨　オフィス汐
『伝記』（竹内英典著）を読む
12／10　ポエトリーカフェ⑩　オフィス汐
玉田尊英氏のお仕事

宮城県詩人会は平成十七年に発足して以来、詩に関係する者の交流・切磋琢磨する場となってきた。コロナ禍の期間は、カフェや詩祭など交流行事は中止となり、会報とアンソロジーの発行のみの活動であったが、令和五年は「ポエトリーカフェ」を、二月十八日を皮切りに、十二月十日まで計十回実施した。カフェ開催の場所は、大町西公園駅から一分の「オフィス汐」であり、県民にも開かれた会場として毎回好評であった。

（理事長　汐海　治美）

一般社団法人宮城県華道連盟

㊫ 〒九八〇―〇〇一四　仙台市青葉区本町一丁目四―四十五（西村方）
㊬ 〇九〇―二六〇五―四六四五（西村一観方）
㊤ 理事長　西村　一観
㊥ 二百十人
㊦ 池坊、小原流、古流松藤会、清泉古流、仙昇池坊、道風流、本原遠州流、龍生派
全八流派
㊧ 華道教授者（諸流師範）の資格を有し、門下を育成する者
㊨ 昭和十二年三月
㊩ 会報「はないづみ」年一回発行

開催月日	催事名	場所
11／18	講習会「金継ぎ」	
12／18	講師：加藤楓／SEN・繕	
	施設訪問	宮城県啓佑学園

〈主催いけばな展〉
オンラインいけばな展二〇二三　YouTube
※会場となるせんだいメディアテークの全面改修により、オンライン動画を五部構成で作成。
〈参加イベント〉
4／21～23　花と緑のココロ博二〇二三　夢メッセみやぎ
6／5～10　全国都市緑化仙台フェア　仙臺緑彩館（展示場所）

〈加盟流派いけばな展〉

5／13～15　龍生派宮城県支部いけばな展　せんだいメディアテーク
～さわやかに～

10／7～10　公益社団法人宮城県芸術協会　せんだいメディアテーク
第六十回宮城県芸術祭
華道展（全八流派）

10／14～16　本原遠州流いけばな展　東北電力グリーンプラザ
二〇二三～秋・華・彩～

10／21～24　池坊仙台支部いけばな池坊展　せんだいメディアテーク
時を超えて―夢・花・絆―

〈その他の活動〉

1月～12月　宮城県庁　挿花　宮城県庁
連盟所属の八流派が毎月
交代で担当

（理事長　西村　一観）

宮城県民芸協会

㊞　〒九八〇―〇八一一　仙台市青葉区一番町一丁目四―一〇
（光原社内）

㊟　〇二二―二二三―六六七四（光原社内）

㊞　会長　伊達　廣三

㊞　五十一人

㊞　昭和四十三年一月

㊞　「民芸みやぎ」（年一回発行）

開催月日	催事名	場所
3／18	新春きものの会	緑水庵
4／12	盛岡の菓子びつを訪ねる会	いずみ工芸
6／10	「柳緑花紅　芹沢銈介の植物もよう」見学	TFUギャラリーミニモリ
7／9	総会	COMPASS（仙台協立第一ビル）
9／2	「自然児、棟方志功～師・柳宗悦との交流～」鑑賞会	仙台市市民活動サポートセンター
10／14	「祖父・棟方志功を語る」石井頼子氏講演会	東北大学片平さくらホール
11／11	茶話会	カフェ・ド・ギャルソン
12／23	芹沢銈介美術工芸館　見学	芹沢銈介美術工芸館

（事務局長　及川　陽一郎）

公益財団法人日本民謡協会宮城県連合会

㊞　〒九八二―一一〇二　仙台市太白区袋原六丁目七―二七

電　〇二二―二四一―八一七六
代　宮城県連合委員長　阿部　勝造
数　四百五十人
格　公益財団法人日本民謡協会に入会していること
創　昭和二十五年六月二十四日
刊　公益財団法人日本民謡協会会報（年六回発行）

開催月日	催事名	場所
8／20	公益財団法人日本民謡協会民謡民舞宮城県連合大会	七ヶ浜国際村国際村ホール
9／24	民謡民舞東北地区指導資格認定試験	ホテルニュー水戸屋

（参与　小野　春城）

全国民謡連盟宮城県連合会

所　〒九八九―六一二二　大崎市古川桑針字谷地中一四
（及川政芳方）
電　〇二二九―二三―一〇九〇（及川政芳方）
代　会長　及川　政芳（桃城）
数　六十人
格　民謡の好きな方
創　昭和五十三年十月
刊　会報本部作成（年一回発行）
（本部連合会常務取締役　及川　政芳（桃城））

宮城県民謡道連合会

所　〒九八〇―〇〇〇二　仙台市青葉区福沢町一―四三
電　〇二二―二二三―四四一一
代　会長　衣川　喜仁
数　二十五人
格　民謡指導者・プロ伴奏者・プロ歌手・各会の会主
創　昭和五十五年七月

開催月日	催事名	場所
2／22	令和四年度定期総会	仙台市福沢市民センター
7／26	第三十八回さんさ時雨全国大会実行委員会 令和五年講習会	仙台市福沢市民センター
9／26	第三十八回さんさ時雨全国大会全体会議	仙台市福沢市民センター
11／26	第三十八回さんさ時雨全国大会	岩出山公民館

（事務局長　二代目　藤本　和夫）

宮城県写真連盟

㊫ 〒九八一―八〇〇三　仙台市泉区南光台七―二八―二
（髙橋方）
㊫ ○二二―二五一―六二四一（髙橋方）
㊫ 会長　永井　優
㊫ 百十二人
㊫ 宮城県写真展に参加し、会費を納入した方
㊫ 昭和五十四年四月
㊫ 会報（年一回発行）

開催月日	催事名	場所
6月	役員会	まるまつ成田店
12月	役員会	まるまつ成田店

「宮城県写真展」は、例年会場である宮城県美術館の長期休館により中止した。

（事務局長　髙橋　潤一）

宮城県文化財友の会

㊫ 〒九八四―〇〇四二　仙台市若林区大和町一丁目一六―二三
（遠藤方）
㊫ ○二二―二三九―一三二四（遠藤方）
㊫ 会長　遠藤　哲雄
㊫ 五十一人
㊫ 文化財保護に関心を持ち、文化財に関する認識を深めようとする者
㊫ 昭和四十九年八月
㊫ 宮城県文化財友の会だより（年二回発行）

開催月日	催事名	場所
6／10	白石方面歴史散歩	刈田嶺神社、片倉家御廟所、孝子堂、白石城、武家屋敷
10／7	宮城野区鉄砲町・二十人町界隈の歴史散歩	X橋車町通元寺小路、藤村広場、名掛丁塩釜神社、車延命地蔵尊、金神大明神、和光神社、矢先神社

（会長　遠藤　哲雄）

宮城県における文化行政の概要

（消費生活・文化課、長寿社会政策課、障害福祉課、生涯学習課、文化財課、宮城県図書館、宮城県美術館、東北歴史博物館、（公財）宮城県文化振興財団、（公財）慶長遣欧使節船協会における令和五年度の概要を掲載。（一月から三月までに実施したものは令和六年に行われた。）

一　知事部局関連

（一）消費生活・文化課

1　表彰

令和五年文化の日（教育文化功労）表彰受賞者

○尾﨑　行彦＝画家・版画家

○小埜寺　純子（藤間　寿和枝）＝日本舞踊家

○仙台短篇映画祭実行委員会

○佐々木　敏子（佐々木　恒風）＝華道家

○安並　美代子（安並　妙美）＝茶道教授

○玉田　尊英＝詩人

○安藤　令子＝七宝作家

2　文化行政の基礎づくり

県民ロビーコンサートの開催

県庁舎を県民により開かれたものとし、文化の香り高い交流の場にするため、県民ロビーにおいてコンサートを開催した。

開催日	出演者
四月二十六日	仙台フィルハーモニー管弦楽団（オーケストラによるクラシック演奏）
五月二十四日	Ensemble Pecora（歌とオーボエ・チェロ・ピアノによる演奏）
六月二十八日	古川学園高等学校吹奏楽部（ステージマーチングによるパフォーマンス演奏）
七月二十六日	鎌田　光彦　大郷町コール・カッコー（ピアノとコーラスによる演奏）
八月　九日	熊谷　駿　齋藤　めぐむ（サックスとピアノによるジャズ演奏）
八月二十三日	仙台城南高等学校吹奏楽部（管弦楽を中心としたソロ・アンサンブル演奏）
九月二十七日	山川　充　北村　裕子（ピアノとソプラノによるクラシック演奏）
十月　十一日	さとう　宗幸　榊原　光裕（ギター弾き語りとピアノによる演奏）
十月二十五日	コンフント　トラピチェ（民俗楽器を使った中南米民俗音楽の演奏）
十一月二十二日	M-duo（ヴァイオリンとピアノによるクラシック演奏）

開催日	出演者
十二月二十日	宮城県白石高等学校マンドリン部（マンドリン・ギター合奏）
一月二十四日	琴伝流大正琴　白鳥の里アンサンブル（大正琴と尺八の演奏）
二月二十八日	佐々木　杜洋　佐々木　奏（チェロとピアノによる演奏）
三月二十一日	聖ドミニコ学院小学校合唱団（小学校合唱団による合唱）

3　文化創造の風土づくり

みやぎ県民文化創造の祭典（芸術銀河）

広く県民に対して優れた芸術文化の鑑賞や活動成果発表の機会を拡充するとともに、宮城らしい創造的な芸術文化圏を創出することを目的として、平成九年度から開催。九月から十一月までを重点期間として、主催事業（十一事業）、共催事業（十一事業）及び協賛事業（二十三事業）を県内各地で開催した。

〈主催事業〉

①舞台ワークショップ（市町村事業）

〔目的〕

舞台芸術（演劇・ダンス等）で活躍している方を講師に迎え、体験型のワークショップを開催し、舞台芸術に触れる機会の少ない人へ体験する機会を提供するとともに、将来の地域文化の担い手を育てる。

〔内容〕

各市町村等の主催により、小学校や文化ホールにおいて、市民が参画してミュージカルを創り上げるワークショップや、音楽に合わせてさまざまなことを身体で表現するワークショップなどを実施した。

○名取熊野三社勧請九百年記念祭　名取老女ミュージカル公演事業

会期　六月十八日～十一月四日

会場　名取市文化会館

講師　朝日雅宏

実施団体　名取市

○ＩＳＯＰＰの完全燃焼!!ヒップホップダンス体験教室

会期　十月十六日～十八日

会場　白石市立大平小学校、角田市立桜小学校、角田市立横倉小学校、蔵王町立遠刈田小学校、川崎町立富岡小学校

講師　ＩＳＯＰＰ

実施団体　えずこ芸術のまち創造実行委員会

○楠原竜也とダンスであそぼ！
会期　九月四日～六日
会場　白石市立白石第一小学校、柴田町立槻木小学校、村田町立村田小学校
講師　楠原竜也
実施団体　えずこ芸術のまち創造実行委員会
○かくだ田園ホール新春寄席
会期　一月四日
会場　かくだ田園ホール
講師　六華亭遊花、ねづっち
実施団体　角田市教育委員会
○舞台スタッフ・ラボ二〇二三
会期　一月十八日～二月十八日
会場　宮城野区文化センター
　せんだい演劇工房10-BOX
　日立システムズホール仙台
講師　劇団ポトフ
実施団体　多賀城市文化センター指定管理者JM共同事業体
○WAKU☆WAKU☆プロジェクト
「みんなで創る、リーディング演劇」
会期　二月四日～二十三日
会場　多賀城市民会館大ホール
講師　石井忍 ほか
実施団体　（公財）仙台市市民文化事業団

②舞台ワークショップ（普及事業）

〔目的〕
県民に広く舞台芸術に触れる機会を提供するとともに、ワークショップ体験参加型事業の普及促進を図る。

〔内容〕
年齢や障害の有無に問わず、多様な人が芸術に触れることができる機会の提供に取り組む団体「NPO法人アートワークショップすんぷちょ」の運営により、主に聴覚障害のある子どもや保護者を対象としたダンスワークショップを実施した。また、多様な人がアートを楽しめるよう、人々とアートを繋ぐ担い手としての活動に取り組む団体「ARCT」の運営により、主に子どもを対象とした、サーカスワークショップや人形劇ワークショップを実施した。

【NPO法人アートワークショップすんぷちょ】
○聴覚障害のあるなし問わず幼児が主体となり創造するダンスワークショップ
会期　二月二十一日
会場　大和すぎのここども園
講師　渋谷裕子

○手話通訳つき親子ダンスワークショップinこども園
会期　三月七日
会場　大和すぎのここども園
講師　渋谷裕子
【ＡＲＣＴ】
○チィキィ＊パークゥのサーカスワークショップ
会期　十二月十日・十一日
会場　名取市文化会館、鹿折こども園、
　　石巻市こどもセンターらいつ
講師　Witty Look
○てんたん人形劇場の人形劇と舞台ワークショップ
会期　二月二日
会場　丸森ひまわりこども園
講師　てんたん人形劇場
③美術ワークショップ（市町村事業）
〔目的〕
　県内等で活躍する芸術家を講師に迎え、体験型のワークショップを開催し、参加者が作品の制作をとおして文化芸術活動への関心を高め、新たな愛好者層の拡大を図る。
〔内容〕
　各市町村等の主催により、主に県内で活躍する芸術家が講師となって、文化会館や美術館等において、参加者にアートの鑑賞機会を提供するとともに、実際に絵画やアート作品を制作する体験型ワークショップを実施した。
○多賀城創建一三〇〇年プロジェクト関連事業
「一三〇〇人でつくる【わたしの多賀城・みらいの多賀城】夏のアートワークショップ」
会期　七月二十二日・二十三日
会場　多賀城市中央公民館
講師　古山拓
実施団体　多賀城市文化センター指定管理者ＪＭ共同事業体
○加川広重アートプロジェクトvol.８「巨大絵画を描こう」
会期　九月十日
会場　蔵王町ふるさと文化会館
講師　加川広重
実施団体　蔵王町
○漆の文化を学び作品を作ろう
会期　十月五日
会場　宮城県南郷高等学校
講師　佐藤建夫
実施団体　宮城県南郷高等学校
○絵画講座「柘榴を描く」
会期　十一月二十五日

会場　塩竈市杉村惇美術館
講師　渡辺雄彦
実施団体　塩竈市杉村惇美術館指定管理者仙台湾燻蒸(株)
○こども探偵事務所　指令三十二
会期　十二月十六日
会場　塩竈市杉村惇美術館
講師　川角由
実施団体　塩竈市杉村惇美術館指定管理者仙台湾燻蒸(株)
○絵画ワークショップ～油彩編～
会期　一月六日～二十八日
会場　登米祝祭劇場
講師　亀井陽逸、亀井武宏、石川喜生子
実施団体　(公財)登米文化振興財団

④美術ワークショップ（普及事業）

〔目的〕
県民に広く芸術に触れる機会を提供するとともに、ワークショップ体験参加型事業の普及促進を図る。

〔内容〕
塩竈市でアートスペースを運営する団体「ビルド・フルーガス」の運営により、さまざまな会場で多様な方を対象に、本物の植物を用いてつくる版画や、カラフルなチョークボードにチョークで自由に表現する体験型のワークショップ等を実施した。また、障害者の表現活動を支援する団体「NPO法人エイブル・アート・ジャパン」の運営により、主に障害のある子どもを対象として、コラージュ素材を切ったり、貼ったりすることで自由な作品を制作するワークショップを実施した。

【ビルド・フルーガス】
○Taneのすみあそび
会期　七月六日
会場　地域交流センター「あすも」
講師　櫻井育子（コーディネーター）
○植物刷り版画で季節を記録する
会期　九月十六日
会場　大衡村ふるさと美術館
講師　あるがあく（版画家）
○Taneのすみあそび
会期　十月十三日
会場　古民家ギャラリー「母家」
講師　櫻井育子（コーディネーター）
○キラリとひかる防災バッグづくり
会期　十一月十一日
会場　多賀城市立多賀城中学校
講師　すがわらじゅんいち（美術家）

○Ｔａｎｅのすみあそび
会期　十一月二十八日
会場　田尻徳十郎屋
講師　櫻井育子（コーディネーター）
○船を磨く、保存する
会期　十二月二日
会場　風の沢ミュージアム
講師　浅野友理子（画家）
○うつわで絵画をつくってみよう
会期　十二月九日、一月二十日
会場　多賀城市立第二中学校
講師　後藤有美（美術家）
○季節の草花染め
会期　一月十八日
会場　子ども広場にこま～る
講師　齋藤寛子（イラストレーター／農家）
○チョークであそぶ
会期　二月十六日
会場　放課後等デイサービス KEY'S 2nd
講師　丹野優香（チョークアーティスト）
○日本画の絵画を知る、つくる
会期　三月二日
会場　宮城県本吉響高等学校
講師　只野彩佳（画家）
○気仙沼発信世界につながる弁当レシピ
会期　二月～三月（複数回）
会場　くるくる喫茶うつみ
講師　門脇篤（美術家）
○植物刷り版画で身近な造形を記録する
会期　三月六日
会場　たがじょう子どもの心のケアハウス
講師　あるがあく（版画家）
○デジタル工作マシンを用いたものづくり体験
会期　三月九日
会場　ぴぁてらす／（社福）仙萩の杜
講師　（一社）ファブリハ・ネットワーク、
（一社）Fab lab Sendai FLAT
○木っ端でカタチをつくろう
会期　三月十八日
会場　公営住宅清水沢東集会所
講師　佐野美里（彫刻家）
○ゲーム・アニメの音の作り方
会期　三月二十五日
会場　横倉児童クラブ

講師　菅原宏之（サウンドデザイナー／自然録音家）

【ＮＰＯ法人エイブル・アート・ジャパン】

○まざってみる⁉ニューカマーとコラージュ

（第六回障害のある人と芸術文化活動の大見本市）

会期　三月二十五日

会場　せんだいメディアテーク

講師　佐竹真紀子（美術作家）、

しょうじこずえ（アーティスト）

⑤音楽アウトリーチ（市町村事業）

〔目的〕

音楽アーティストを講師に、普段はなかなか触れることのできない楽器の面白さや音楽の魅力を伝え、音楽愛好者層の拡大を図る。

〔内容〕

各市町村等の主催により、小・中学校や文化ホール等において、生演奏を間近で体験できるコンサートや講話等を実施した。

○田村緑のキラキラひかるピアノの世界

会期　九月十一日・十二日

会場　大河原町立金ヶ瀬小学校、柴田町立柴田小学校、丸森町立丸森小学校、白石市立白川小学校

出演　田村緑、大森智子

実施団体　えずこ芸術のまち創造実行委員会

○和太鼓ワークショップ

会期　九月二十五日～十月四日

会場　大和町立鶴巣小学校、大和町立落合小学校、大和町立宮床小学校、大和町立吉田小学校、大和町立吉岡小学校、大和町立小野小学校

出演　佐藤三昭、高橋理沙

実施団体　大和町文化振興協会

○超一流の音楽を間近で体感！迫力のオペラとピアノ

会期　十月十一日～十三日

会場　七ヶ宿町活性化センター、川崎町立川崎小学校、川崎町社会福祉協議会デイサービス、柴田町立船迫小学校

出演　村上敏明、中川賢一

実施団体　えずこ芸術のまち創造実行委員会

○令和五年度地域プロアーティストによる訪問コンサート（音楽アウトリーチ）事業

会期　十一月一日・二日

会場　登米市立米谷小学校、登米市立豊里小学校、登米市豊里中学校、児童発達支援センターこじか園

出演　宮崎ゆかり、簗田ちゆり

実施団体　（公財）登米文化振興財団

○令和五年度音楽アウトリーチ事業
会期　十一月七日・八日
会場　大郷町立大郷小学校
出演　安田ミュージックオフィス
実施団体　大郷町
○令和五年度小学校芸術鑑賞事業
仲道郁代音楽アウトリーチ
会期　十一月七日～九日
会場　七ヶ浜町立松ケ浜小学校、七ヶ浜町立亦楽小学校、七ヶ浜町立汐見小学校
出演　仲道郁代、高見秀太朗
実施団体　七ヶ浜国際村事業協会
○文化センター×山響アウトリーチ in 多賀城
会期　二月十三日、三月十三
会場　児童発達支援センター太陽の家、多賀城市民会館、多賀城市立図書館、多賀城市桜木保育所
出演　山形交響楽団弦楽三重奏
実施団体　多賀城市文化センター指定管理者ＪＭ共同事業体

⑥音楽アウトリーチ（普及事業）

〔目的〕
音楽アーティストを講師に、日々の生活の中で感じる苦痛やストレスを、音楽の鑑賞・体験で和らげ、生きる力を育むとともに、普段はなかなか触れることのできない楽器の面白さや音楽の魅力を伝え、音楽愛好者層の拡大を図る。

〔内容〕
「（公財）音楽の力による復興センター・東北」の運営により、音楽に触れる機会の少ない人たちに、生のコンサートや楽器に触れる機会を提供した。
○プロと交流！たのしく作曲、コンサート
会期　十月七日
会場　登米市立南方中学校
講師　小林直央、清川貴子、米良眞寿美
○クリスマスコンサート
会期　十二月四日
会場　東松島野蒜デイサービスセンターみのり
講師　Bouquet of Music（叶千春、菅野明子）
○弦楽コンサート
会期　十二月十一日
会場　宮城県立小松島支援学校
講師　杜の弦楽四重奏団
（叶千春、駒込綾、齋藤恭太、塚野淳一）
○歌とピアノの彩コンサート ～ Happy Christmas! ～
会期　十二月十七日

会場　気仙沼バプテスト教会礼拝堂
講師　Clover for
（岩瀬りゅう子、佐藤祐貴、山形佑輔、遠藤弥生）
○クリスマスコンサート
会期　十二月二十五日
会場　気仙沼リンデンバウムの杜
講師　西沢澄博、芦澤暁男、文京華
○ちょっとおくれてやってきた♪ クリスマスコンサート
会期　十二月二十六日
会場　気仙沼ケアハウスみなみ
講師　西沢澄博、芦澤暁男、文京華
○ちょっとおくれてやってきた♪ クリスマスコンサート
会期　十二月二十六日
会場　気仙沼市立病院
講師　西沢澄博、芦澤暁男、文京華
○ふゆのキラキラコンサート！
会期　一月二十四日
会場　亘理いちょうの実幼稚園
講師　佐藤淳一、佐藤明子、佐藤瑛利子
○ほっこり♪ ぬくもりコンサート
会期　一月三十日
会場　気仙沼市教育サポートセンター自立支援教室
「かなエール」
講師　小関佳宏、千葉展子
○杜の里 春が来たコンサート
会期　三月十二日
会場　特別養護老人ホーム 成仁杜の里仙台
講師　杜の弦楽四重奏団
（叶千春、駒込綾、齋藤恭太、塚野淳一）

⑦みやぎ芸術銀河作品展

〔目的〕
県民が優れた文化芸術作品に触れる機会を提供し、宮城県の文化芸術の振興・発展に寄与する。

〔内容〕
令和四年度及び令和五年度宮城県芸術選奨、同新人賞受賞者のうち希望する七名に対し、本賞の受賞記念として開催する作品展等の企画に対し、支援を行った。

【令和四年度受賞】
○個展「わすれそうな場―そして」
受賞者　森眞澄（美術（洋画））
会期　十二月二十二日～二十七日
会場　せんだいメディアテーク
○「言と音が加速する午後」詩、音楽、舞踏のコラボ公演
受賞者　秋亜綺羅（文芸）

会期　十二月三日
会場　せんだいメディアテーク
○作品展「星と水と」
受賞者　酒井美雪（美術（日本画））
会期　十二月二十二日～二十七日
会場　せんだいメディアテーク
○個展「追廻住宅の石碑、その空洞」
受賞者　佐々瞬（芸術（彫刻））
会期　十二月十五日～一月十四日
会場　Gallery TURNAROUND
○写真展「荒野と庭」、トークイベント
受賞者　かんのさゆり（芸術（写真））
会期　二月十日～二十七日
会場　曲線
○受賞記念ＣＤの作成及び配布
受賞者　小野綾子（音楽）
会期　八月十八日～一月二十八日
会場　名取市文化会館
【令和五年度】
○写真展「結いの心・もてなしの心」…東和町土沢（花巻市）…
受賞者　海老名和雄（美術（写真））
会期　令和六年三月三十日～四月三日
会場　せんだいメディアテーク

⑧青少年育成総合事業

〔目的〕
県内の高校生の文化芸術に係る表現力を育み、強化するとともに、宮城県の文化芸術の振興・発展に寄与する。

〔内容〕
宮城県高等学校文化連盟の運営により、吹奏楽、郷土芸能の二つの専門部において、各界の著名人や専門家を講師に迎え、講習会や研修会を実施した。
○第八回宮城高校吹奏楽祭
会期　十月一日
会場　美里町文化会館
講師　小串俊寿、田村修平、水口俊彦、織田浩司、鈴木沙友里
○第十一回高校生のための吹奏楽部運営講座
会期　十一月五日
会場　エスポールみやぎ
講師　小串俊寿、田村修平、水口俊彦、織田浩司、鈴木沙友里
○第三回マーチング・バトントワリング講習会
会期　一月二十一日

会場　宮城県宮城広瀬高等学校
講師　小串俊寿、田村修平、水口俊彦、織田浩司、鈴木沙友里
○郷土芸能専門部研修会
会期　十月九日
会場　名取市文化会館
講師　プロ和太鼓チーム「Atoa.」

⑨地域文化発信支援事業（民俗芸能等伝承支援事業）
〔目的〕
地域特有の民俗芸能を伝承し、継続した活動を支援することで、宮城県の民俗芸能の振興・発展に寄与する。
〔内容〕
未指定の無形民俗文化財を伝承・継承する活動に対し、支援を行った。
○伝承・修繕事業
対象　竹浦獅子振り保存会

⑩みやぎ発信劇場場（県民ロビーコンサート四百回記念事業）
〔目的〕
令和五年十月の定期コンサートで四百回を迎える県民ロビーコンサートについて、長年にわたり愛していただいている県民に対し感謝を表するとともに、宮城県の音楽文化の更なる発展に寄与する。
〔内容〕
出演者として、さとう宗幸、榊原光裕を迎え、スペシャルコンサートを開催した。また、四百回を記念したパネル展示を開催したほか、障害者アートを活用した記念グッズを制作し、来場者に配布した。
会期　十月十一日
会場　宮城県庁

⑪出前講座
〔目的〕
地域の施設・団体等が自ら主体的に障害者の地域活動を支えられるよう、それらに対し、アート活動によるノウハウ習得を促す支援する。
〔内容〕
「ＮＰＯ法人エイブル・アート・ジャパン」の運営により、障害者の地域活動を支える地域の施設や団体に対し、出前講座を行った。
会期　十一月四日
会場　宮城県松島自然の家
○内容　クラフト活動
会期　十一月十九日
会場　気仙沼市松岩公民館
○内容　音楽イベント

4　文化活動の促進

(1)　令和五年度宮城県芸術選奨の顕彰

授賞式　十一月三十日

宮城県行政庁舎十一階 第二会議室

(2)　文化芸術関係行事の後援、知事賞の贈呈等

後援行事　百十六件

知事賞交付　三十六行事

（賞状六十五点、うち賞品（楯）十六点）

(3)　文化事業への助成

県内文化団体事業への補助（(公財）仙台フィルハーモニー管弦楽団ほか）

(4)　文化振興基金の造成

民間と行政が一体となって文化活動の助成を図るため、文化振興基金を設置し、昭和六十二年度から基金の造成を図っている。

(5)　宮城県芸術年鑑の発行

(二)　長寿社会政策課

第三十一回宮城シニア美術展

高齢者の創作による作品（日本画・洋画・書・写真・工芸）の募集・展示を通して、高齢者の文化活動を促し、ふれあいと生きがいづくりを促進するとともに、第三十六回全国健康福祉祭とっとり大会（ねんりんピックはばたけ鳥取二〇二四）への宮城県代表作品として選考することを目的に開催した。

出品　百七十四点

会期　十二月二十三日～二十五日

会場　せんだいメディアテーク

東京エレクトロンホール宮城

主催　社会福祉法人宮城県社会福祉協議会

共催　宮城県・公益財団法人宮城県老人クラブ連合会

(三)　障害福祉課

1　とっておきの音楽祭

障害の有無に関わらず参加できる音楽祭が開催された。仙台市内でのステージ発表に加え、オンライン配信を行い、延べ二百三十三団体が参加した。

会期　六月四日

主催　ＮＰＯ法人とっておきの音楽祭

2　表彰

(1)　「第二十七回ピュア・ハーツアート展」（仙台市知的障害者芸術文化協会主催）の優秀作品を「宮城県知事賞」として表彰を行った。（一月二十七日）

○笠松亮介（絵画）

(2)「第九回Ａｒｔ ｔｏ Ｙｏｕ！東北障がい者芸術全国公募展」（公益社団法人東北障がい者芸術支援機構主催）の入賞作品のうち一点を「宮城県知事賞」として表彰を行った。（十月十五日）

○丸尾義久（絵画）

3　障害者による芸術文化活動の支援

令和五年度宮城県障害者芸術文化活動支援事業

県内障害者の芸術文化活動の振興を図ることを目的に、宮城県障害者芸術文化活動支援センターを設置し、以下の事業を実施した。

(1)　相談・支援

芸術活動を行う障害者本人や家族、支援者等からの相談に応じ、支援を行った。

(2)　障害者芸術文化活動を支援する人材の育成支援

芸術文化活動の支援方法やデジタルアート、「音楽・演劇・舞踏」に関する研修等を行った。

①　十月十九日

「障害のある人とデジタルアート」

②　十月二十八日

「出張創作室～オープンアトリエ～」

③　一月二十八日

「障害のある人とつくるパフォーミングアーツ研究会」

(3)　展示会開催

第六回　障害のある人と芸術文化活動に関する大見本市

「きいて、みて、しって、見本市。」

会期　一月二十七日～三十一日

会場　せんだいメディアテーク

二　教育委員会関連

（一）生涯学習課

1　表彰

令和五年度地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞者

○〈文化財〉桃生町樫崎法印神楽保存会：文化財保護（石巻市）

○〈文化財〉熊野堂神楽保存会：文化財保護（名取市）

2　文化芸術の振興

(1)　第六十回宮城県芸術祭

共催　（公社）宮城県芸術協会、宮城県、仙台市、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、（株）河北新報社、（公財）宮城県文化振興財団、（公財）仙台市市民文化事業団

会期　九月二十三日～三月十七日

会場　せんだいメディアテーク　ほか

書道、工芸、絵画、写真、華道、彫刻等の展示及び音楽コンクールが行われた。

(2)　宮城県高等学校文化連盟事業

①　第三十回宮城県高等学校総合文化祭

テーマ　「笑顔満天！青春Ｆｅｓｔｉｖａｌ！」

ア　総合開会式

○展示発表

会期　十月二十一日・二十二日

会場　トークネットホール仙台

○式典・ステージ発表

会期　十月二十一日

会場　トークネットホール仙台

イ　部門別開催

○英語

〔第七十六回宮城県高等学校英語弁論大会〕

会期　九月七日

会場　仙台白百合学園高等学校

〔第七十回宮城県高等学校英作文コンクール〕

会期　十月二十五日

会場　宮城県仙台二華高等学校、県内各地区会場校

○吹奏楽

〔第八回みやぎ高校吹奏楽祭〕

会期　十月一日

会場　美里町文化会館

○演劇

〔第六十一回宮城県高等学校演劇コンクール地区大会・中央大会〕

会期　十月三日～二十六日、十一月十五日～十九日
会場　県内各地区会場、広瀬文化センター

○文芸
〔第三十回宮城県高総文祭文芸部門交流会・研修会〕
会期　十月十一日・十二日
会場　東京エレクトロンホール宮城、仙臺緑彩館

○囲碁
〔第二十四回宮城県高等学校囲碁九路盤大会〕
会期　十月十三日
会場　宮城県仙台第二高等学校

○ダンス
〔第三十一回宮城県高等学校ダンスフェスティバル二〇二三〕
会期　十月十六日～十八日
会場　広瀬文化センター

○新聞
〔第十回宮城県高等学校新聞コンクール〕
会期　十月二十一日・二十二日
会場　トークネットホール仙台

○放送
〔第四十二回宮城県高等学校放送コンテスト新人大会〕
会期　十月二十一日～十一月十一日
会場　仙台白百合学園高等学校 ほか

○小倉百人一首かるた
〔第三十二回宮城県高等学校小倉百人一首競技かるた大会〕
会期　十月二十四日
会場　宮城県武道館

○自然科学
〔第七十六回宮城県高等学校生徒理科研究発表会〕
会期　十月二十七日
会場　東北大学サイエンスキャンパスホール

○器楽・管弦楽
〔第四十六回宮城県高等学校音楽祭〕
会期　十月三十日
会場　日立システムズホール仙台

○将棋
〔第四十回宮城県高等学校将棋新人戦〕
会期　十一月二日
会場　エスポールみやぎ

○軽音楽
〔第二十回宮城県高等学校対抗バンド合戦新人大会〕
会期　十一月四日
会場　デジタルアーツ仙台

○合唱
〔第七回みやぎ高校合唱祭〕
会期　十一月八日
会場　日立システムズホール仙台
○日本音楽
〔第三十二回宮城県高等学校文化連盟日本音楽定期演奏会〕
会期　十一月九日
会場　多賀城市文化センター
○郷土芸能
〔第十回宮城県高等学校郷土芸能大会〕
会期　十一月九日
会場　名取市文化会館
○写真
〔第三十回宮城県高等学校写真展〕
会期　十一月十日～十五日
会場　せんだいメディアテーク
○書道
〔第七十二回宮城県高等学校書道展覧会〕
会期　十一月十日～十五日
会場　せんだいメディアテーク
○工業
〔第三十二回宮城県高等学校生徒活動成果発表会〕
会期　十一月十一日
会場　宮城県工業高等学校
○弁論
〔第十回宮城県高等学校弁論大会
兼第五回吉野作造記念高校生弁論大会〕
会期　十二月八日
会場　吉野作造記念館
○商業
〔プログラミング研修会〕
会期　十二月二十七日
会場　東京ＩＴプログラミング＆会計専門学校仙台校
○美術・工芸
〔第七十六回宮城県高等学校美術展〕
会期　一月十三日～十七日
会場　せんだいメディアテーク
②
第四十七回全国高等学校総合文化祭鹿児島大会
会期　七月二十九日～八月四日
会場　鹿児島県内七市一町
本県生徒百七十一人が総合開会式及び次の部門に参加（合唱、吹奏楽、器楽・管弦楽、日本音楽、郷土芸能、

美術・工芸、書道、写真、放送、囲碁、将棋、弁論、小倉百人一首かるた、新聞、文芸、自然科学、軽音楽）

③　専門部事業

ア　演劇

〔第三十一回宮城県高等学校演劇総合研修会〕

会期　七月二十九日・三十日

会場　宮城野区文化センター

〔第三十三回宮城県高等学校演劇リーダー研修会〕

会期　七月十五日～十七日

会場　宮城野区文化センター

イ　合唱

〔第七十五回宮城県合唱祭〕

会期　五月二十日・二十一日

会場　名取市文化会館

〔令和五年度発声・課題曲講習会〕

会期　六月四日

会場　宮城野区文化センター

〔令和五年度合唱講習会〕

会期　八月一日～三日

会場　仙台市戦災復興記念館 ほか

〔第九十回ＮＨＫ全国学校音楽コンクール宮城県大会〕

会期　八月二十日

会場　多賀城市民会館

〔第七十五回全日本合唱コンクール宮城県大会〕

会期　八月二十七日

会場　名取市文化会館

〔第三十五回宮城県合唱アンサンブルコンテスト〕

会期　十二月十六日

会場　広瀬文化センター

〔令和五年度パート別発声講習会〕

会期　一月二十八日

会場　宮城県仙台三桜高等学校 ほか

ウ　吹奏楽

〔第六十六回宮城県吹奏楽コンクール〕

会期　八月三日

会場　マルホンまきあーとテラス

〔第十一回高校生のための吹奏楽部運営講座〕

会期　十一月五日

会場　エスポールみやぎ

〔第四十五回東北吹奏楽の日演奏会〕

会期　十二月二十四日

会場　トークネットホール仙台

〔第五十七回宮城県アンサンブルコンテスト〕

会期　一月十四日

会場　トークネットホール仙台

エ　器楽・管弦楽

〔マンドリン部楽器別講習会〕

会期　六月二十五日

会場　石巻好文館高等学校

〔マンドリン部合奏講習会〕

会期　十月十五日

会場　石巻好文館高等学校

〔ギター部合奏講習会〕

会期　十二月二日

会場　聖和学園高等学校

〔管弦楽楽器別講習会〕

会期　八月八日

会場　尚絅学院中学校・高等学校

オ　美術・工芸

〔各地区美術展〕

〔仙南、仙台、泉・黒川、塩釜、大崎、登米・栗原、石巻、本吉〕

会期　七月八日～十二日（仙台地区）

会場　せんだいメディアテーク（仙台地区）

カ　放送

〔春季校内放送研修会〕

会期　五月十三日

会場　仙台白百合学園高等学校

〔第七十回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト宮城県大会〕

会期　六月十日～十六日

会場　日立システムズホール仙台 ほか

〔夏季校内放送研修会〕

会期　八月八日

会場　仙台市立仙台商業高等学校

〔冬季校内放送研修会〕

会期　一月二十七日

会場　宮城県仙台第三高等学校

キ　囲碁

〔第四十七回文部科学大臣杯

全国高校囲碁選手権大会宮城県大会〕

会期　六月二十四日～二十六日

会場　宮城県仙台第一高等学校、

宮城県仙台第二高等学校

〔第四十一回宮城県高校囲碁新人大会〕

会期　一月二十八日

会場　東京エレクトロンホール宮城

ク　将棋

〔第五十九回全国高等学校将棋選手権宮城県予選大会〕

会期　五月二十二日・二十三日
会場　エスポールみやぎ
ケ　自然科学
〔第一回生徒研修会〕
会期　七月九日
会場　広瀬文化センター
〔第二回生徒研修会兼全国高総文祭最終選考会〕
会期　十二月二十六日
会場　仙台市戦災復興記念館
コ　写真
〔第三十一回春季写真撮影大会〕
会期　五月二十七日・二十八日
会場　青葉山コモンズ、仙台市福祉プラザ
〔第二十回夏季写真撮影大会〕
会期　八月八日～十日
会場　トークネットホール仙台
〔第十回冬季写真撮影大会〕
会期　一月二十八日
会場　太白区文化センター
サ　小倉百人一首かるた
〔第四十七回全国高総文祭小倉百人一首かるた部門宮城県予選〕
会期　五月十九日
会場　宮城県武道館
〔第四十五回全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会宮城県予選〕
会期　六月六日
会場　宮城県武道館
〔第十六回東北・北海道高等学校小倉百人一首かるた選手権大会〕
会期　七月七日
会場　宮城県武道館
シ　日本音楽
〔令和五年日本音楽研修会〕
会期　十一月九日
会場　多賀城市文化センター
ス　ダンス
〔第三十五回全日本高校・大学ダンスフェスティバル〕
会期　八月七日～十日
会場　神戸文化ホール
〔ダンス技術リーダー講習会〕
会期　十二月十六日
会場　宮城県宮城第一高等学校
セ　軽音楽

〔第二十九回宮城県高等学校対抗バンド合戦〕
会期　七月十六日
会場　デジタルアーツ仙台
〔第8回 High School Premium Live 2023〕
会期　八月八日
会場　仙台PIT
〔第九回宮城県高等学校対抗バンド合戦一年生大会〕
会期　十二月十六日
会場　デジタルアーツ仙台
ソ　文芸
〔文芸部研修会〕
会期　六月二十四日、十月五日、十一月十一日
会場　仙台文学館 ほか
〔文芸部新人研修会〕
会期　十二月二十五日
会場　仙台市戦災復興記念館
〔第二十回高校生文芸作品コンクール〕
タ　新聞
〔前期研修会〕
会期　七月八日
会場　宮城県工業高等学校
〔後期研修会〕
会期　十月七日
会場　東松島市震災復興伝承館、
（株）東松島ファーム
チ　吟詠剣詩舞
〔強化練習会〕
会期　六月二十八日・三十日、七月十二日、
八月二日・二十三日、九月六日、十月三十日、
十一月一日・六日・七日
会場　宮城県古川黎明高等学校
④　支部事業
ア　仙台北・仙台南（合同）
〔第三十三回仙台支部総合文化祭「ふれんどりぃと～く」〕
会期　十月二十二日
会場　トークネットホール仙台
〔広報誌『にしき木』第三十二号発行〕
発行　二月九日
イ　仙南
〔第二十九回仙南支部高等学校総合文化祭〕
会期　十月七日～十八日
会場　岩沼市民会館、仙南芸術文化センター、
白石市中央公民館
〔専門部研修会〕

会期　八月七日～十月十二日
会場　白石市中央公民館　ほか
ウ　大崎
〔第五十一回古川地区高等学校演劇祭〕
会期　六月三日
会場　大崎市生涯学習センター
〔令和五年度古川管内高等学校美術クラブ連合展〕
会期　十月七日
会場　美里町近代文学館
〔第三十一回大崎支部総合文化祭〕
会期　十月七日
会場　美里町文化会館、美里町近代文学館、
美里町中央コミュニティセンター
〔令和五年度アンサンブルコンテスト大崎地区大会〕
会期　十二月十六日
会場　岩出山文化会館
〔第十八回大崎吹奏楽祭〕
会期　二月四日
会場　美里町文化会館
エ　東部
〔第五回東部支部地区高等学校美術展〕
会期　七月二十一日～二十三日
会場　松島町文化観光交流館
〔第六回東部支部総合文化祭〕
会期　十一月四日・五日
会場　東松島市コミュニティセンター
〔第六回東部支部合同音楽会〕
会期　十一月九日
会場　東松島市コミュニティセンター
オ　栗原・登米
〔第三十回栗原・登米支部総合文化祭〕
会期　六月二十四日・二十五日
会場　栗原市若柳総合文化センター、若柳公民館
カ　本吉
〔第十八回本吉支部総合文化祭〕
会期　七月一日・二日
会場　気仙沼市はまなすホール、本吉公民館
〔第六十一回気仙沼・本吉地区高等学校美術展
「けせもい展」〕
会期　九月六日～十日
会場　リアス・アーク美術館
〔本吉支部写真展示会〕▲中止
（代替として、各校が「イオン気仙沼店高校生アート作品展」に出品）

〔第三十一回気仙沼・本吉地区生徒科学研究発表会〕
会期　十二月二十三日
会場　宮城県気仙沼高等学校

⑤　定通部事業

〔第五十一回宮城県高等学校定時制通信制生徒の集い〕
会期　九月九日
会場　宮城県佐沼高等学校

〔第七十一回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表宮城県大会〕
会期　十月十四日
会場　気仙沼中央公民館

⑥　その他

〔機関紙『高文連ニュース第三十三号』発行〕
発行　十月二日

〔宮城県高等学校文化連盟ＰＲ事業〕
会期　十月二十三日～十一月二日
会場　宮城県庁

〔宮城県高等学校体育連盟・宮城県高等学校文化連盟連携事業　美術・工芸専門部作品展〕
会期　十月二十四日～二十九日
会場　セキスイハイムスーパーアリーナ

〔令和五年度宮城県高等学校文化連盟賞表彰式〕
会期　二月十四日
会場　ホテル白萩

〔年間集録『みやぎ高文連年報三十二号』刊行〕
発刊　三月十五日

(3)　文化庁事業

①　舞台芸術等総合支援事業（学校巡回公演事業）

六月二十三日	蔵王町立遠刈田中学校	人形浄瑠璃	
六月二十六日	柴田町立槻木中学校	演劇	
六月二十七日	気仙沼市立唐桑中学校	ミュージカル	
六月二十八日	大崎市立岩出山小学校	オーケストラ等	
六月二十八日	石巻市立大谷地小学校	ミュージカル	
六月　三十日	気仙沼市立階上中学校	オーケストラ等	
七月　十二日	塩竈市立玉川小学校	歌舞伎・能楽	
七月　十三日	七ヶ浜町立松ヶ浜小学校	歌舞伎・能楽	
七月　十四日	大崎市立鳴子小学校	演劇	
七月　十四日	気仙沼市立新月中学校	歌舞伎・能楽	
九月　十二日	気仙沼市立津谷小学校	演劇	
九月　十四日	東松島市立矢本西小学校	児童劇	
九月　二十日	川崎町立川崎第二小学校	演劇	
九月　二十日	栗原市立築館小学校	メディアアート等	
九月二十五日	七ヶ浜町立汐見小学校	オーケストラ等	

九月二十五日	大崎市立古川西中学校	歌舞伎・能楽
九月二十六日	気仙沼市立津谷中学校	オーケストラ等
九月二十六日	登米市立東和中学校	歌舞伎・能楽
九月二十七日	古川学園中学校	オーケストラ等
九月二十八日	柴田町立槻木小学校	オーケストラ等
九月二十八日	塩竈市立第三小学校	音楽劇
十月　二日	登米市立佐沼小学校	児童劇
十月　三日	大崎市立三本木小学校	合唱
十月　五日	村田町立村田第二中学校	合唱
十月三十一日	加美町立西小野田小学校	オーケストラ等
十一月十三日	塩竈市立第二中学校	バレエ
十一月十四日	石巻市立貞山小学校	バレエ
十一月二十九日	気仙沼市立九条小学校	演芸
十一月三十日	多賀城市立多賀城八幡小学校	演芸
十二月　四日	東松島市立大曲小学校	邦楽
十二月　五日	東松島市立鳴瀬未来中学校	邦楽
十二月十三日	東松島市立鳴瀬桜華小学校	人形浄瑠璃
十二月十八日	村田町立村田第一中学校	歌舞伎・能楽
十二月十九日	加美町立賀美石小学校	歌舞伎・能楽

② 文化芸術による子供育成推進事業（芸術家の派遣事業）

六月　七日	聖ウルスラ学院英智高等学校	生活文化
六月二十六日	宮城県仙台向山高等学校	演劇
六月二十七日	宮城県仙台向山高等学校	演劇
六月二十八日	多賀城市立多賀城小学校	舞踊
六月二十九日	多賀城市立多賀城小学校	舞踊
六月　三十日	多賀城市立多賀城小学校	舞踊
七月　四日	宮城県立支援学校小牛田高等学園	音楽
七月　五日	聖ウルスラ学院英智高等学校	生活文化
七月　十三日	宮城県田尻さくら高等学校	大衆芸能
七月　十四日	塩竈市立第一中学校	音楽
七月二十四日	宮城県東松島高等学校	演劇
七月二十六日	宮城県東松島高等学校	演劇
七月二十七日	宮城県東松島高等学校	演劇
八月　三十日	宮城県柴田農林高等学校川崎校	音楽
八月三十一日	宮城県岩出山高等学校	音楽
九月　十三日	宮城県立支援学校小牛田高等学園	音楽
九月　十三日	多賀城市立山王小学校	舞踊
九月　十四日	多賀城市立山王小学校	舞踊

九月　十五日　多賀城市立山王小学校　舞踊
九月二十二日　塩竈市立浦戸小学校　演劇
九月二十八日　塩竈市立浦戸小学校　演劇
九月二十九日　多賀城市立高崎中学校　音楽
十月　五日　宮城県田尻さくら高等学校　音楽
十月　六日　西山学院高等学校　音楽
十月　七日　西山学院高等学校　音楽
十月　八日　西山学院高等学校　音楽
十月　十三日　塩竈市立浦戸小学校　演劇
十月二十五日　塩竈市立第一小学校　伝統芸能
十月二十五日　塩竈市立月見ヶ丘小学校　舞踊
十月二十六日　塩竈市立月見ヶ丘小学校　舞踊
十月二十七日　塩竈市立月見ヶ丘小学校　舞踊
十月三十一日　東松島市立矢本東小学校　音楽
十一月　一日　宮城県立支援学校小牛田高等学園　音楽
十一月　六日　亘理町立亘理小学校　音楽
十一月　六日　亘理町立逢隈小学校　音楽
十二月　一日　塩竈市立玉川中学校　生活文化
十二月　七日　宮城県田尻さくら高等学校　演劇
十二月　八日　塩竈市立玉川中学校　生活文化
十二月十五日　塩竈市立玉川中学校　生活文化
一月　十三日　聖ウルスラ学院英智高等学校　生活文化

③　文化芸術による子供育成推進事業（子供夢・アートアカデミー）
九月二十二日　美里町立北浦小学校　美術

④　文化芸術による子供育成推進事業（ユニバーサル公演事業）
十一月十三日　石巻市立渡波小学校　演劇

⑤　文化芸術による子供育成推進事業（芸術家の派遣事業）〔東日本大震災復興支援対応〕
会期　九月六日～一月二十九日
「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」みやぎ実行委員会が委託を受け、県内四十四の小学校・中学校・義務教育学校・県立学校に講師を派遣して、四十六公演を実施。

(4)　宮城県巡回小劇場

①音楽
・ハンガリーの風コンサート（県内五会場）
共催　宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、（公財）日本青少年文化センター
会期　十月十七日～十月十九日
出演　古館由佳子、土山如之、鳥羽亜矢子
鑑賞者数　九百八十二人

②演劇

・演劇一「あした あさって しあさって」（県内七会場）

共催　宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、

（公社）日本児童演劇協会

会期　九月二十七日～十月五日

出演　劇団野ばら

鑑賞者数　九百六十七人

・演劇二「めっきら もっきら どおんどん」（県内五会場）

共催　宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、

（公社）日本児童演劇協会

会期　十月二日～六日

出演　劇団風の子北海道

鑑賞者数　八百六十八人

(5)　青少年劇場小公演

地域の児童生徒に優れた生の芸術を鑑賞する機会を提供した。（二十三公演）

会期　六月二十二日、九月二十五日～十一月二日

内容　オーボエとヴァイオリン デュオコンサート　器楽

（鍵冨弦太郎、和歌山建太）

ひとりオペラ「ベロ出しチョンマ」　声楽

（境信博、山田明美）

はなしの伝統芸能　落語　伝統芸能

（柳家禽太夫）

鑑賞者数　二千六百七十七人

(6)　宮城県地方音楽会

共催　開催市町村教育委員会

①アンサンブル公演

・九月　三日　南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナ

観賞者数　約百二十人

・二月　四日　蔵王町ふるさと文化会館ございんホール

観賞者数　約三百人

②オーケストラ公演

・二月　十日　七ヶ浜国際村

鑑賞者数　約五百二十一人

・二月十一日　気仙沼市民会館

鑑賞者数　約九百人人

(7)　国民文化祭派遣事業…石川県

(8)　地方青年文化祭

県内青年の文化活動の促進、青年相互の交流、地域文化の振興を目指すもの。

（十月～二月、教育事務所ごとに県内七地区で実施。）

(9) 第七十一回宮城県青年文化祭
各部門へ最優秀賞と優秀賞を授与した。
会　期　六月十八日
会　場　蔵王町ございんホール
参加団体　ダンス、合唱、舞台発表、中学生による発表等
来場者　三百九十五人

(10) 第七十五回宮城県青年体育大会
会　期　八月二十七日
会　場　大郷町フラップ21、大郷町野球場
出　場　バスケットボール、軟式野球、フットサル
参加者　二百五十人

(11) 第七十一回全国青年大会
会　期　十一月十日～十三日
会　場　東京体育館　ほか
出　場　バスケットボール、軟式野球、フットサル、写真、合唱
参加者　六十五人

(二) 宮城県図書館

情報拠点としての図書館の機能を強化し、県民のより充実した生涯学習を支援するため、各種の展示や講座、子どもの本の移動展示会等多様な活動を展開している。

1　展示

(1) 常設展
「本と人の文化史　―アジア・日本を中心に―」

(2) 企画展
① 「東日本大震災文庫展13『図書館 復興のあゆみ』」
令和五年三月四日～五月二十八日
② 「みやぎと文学賞」
六月三日～八月二十七日
③ 「紙芝居のあゆみ 現代に受け継ぐ紙芝居の魅力」
九月二日～十一月二十六日
④ 「公文書館展『追憶のみやぎ：昭和の県庁を訪ねて』」
※宮城県公文書館による展示
十二月二日～二月二十五日
⑤ 「東日本大震災文庫展14
『震災と交通機関―未来へつなぐ復興の礎―』」
令和六年三月二日～五月二十六日

(3) 子どもの本展示会

四月二十一日～五月十一日
入場　三千八百五十八人
子どもの本移動展示会
・県内市町村図書館・公民館　二十一会場
入場　八千七百五十七人
・県内小中学校・特別支援学校　三十七会場
入場　九千七百四十四人

(4) 一般図書・児童視聴覚・資料情報・震災文庫各フロアでの季節・催事等に関する資料展示
四月～三月
開催回数　百五回

(5) 情報エントランス（外部機関・団体によるパネル等展示）
四月～三月
開催回数　二十五回（二十四機関・団体）

2　講座・講演会等

(1) ビブリオバトル
会　期　七月二十二日
参加者　バトラー　六人
オーディエンス　二十四人

(2) ベガ号天体観望会
会　期　十一月二日
参加者　二十九人

3　各種上映会（DVD・16ミリ）
上演回数　十五回

(1) 上映会
会　期　五月～三月の月一回（一月を除く）

(2) こども映画会
会　期　七月一日
三月九日

(3) 懐かしの16ミリ映画フィルム上映会
会　期　六月四日
十月十三日
一月二十日

4　おはなし会
会期　四月～三月
（第一・第四土曜日、毎週金曜日・日曜日）
実施団体　六団体

5　親子新聞スクラップ道場
会期　七月十五日
参加　十四人（五組）

6　複製資料貸出
県内高等学校、市町村図書館ほか二十二会場　四十六点

(三) 宮城県美術館

さまざまな美術文化活動に、積極的に参加できる多角的機能を備え、また、美術と関わりの深い表現領域にも接することのできる施設として、展覧会（常設展・特別展）や、多くの講演会・各種の講座等多彩な鑑賞・創作普及活動を積極的に展開している。

1　常設展

令和五年六月、リニューアル工事により長期休館となったことから、これまでの常設展で、四半期ごとに開催していた従来の展示とは趣を変え、所蔵品の中から選りすぐりの作品を数多く展示した。

(1)　リニューアル直前！宮城県美術館の名品勢ぞろい！
会期　四月一日～六月十八日

2　特別展

(1)　特別展「伊達政宗と杜の都・仙台」
会　期　四月二十六日～六月十八日
鑑賞者数　一万一千九百三十八人

講 演 会　四月二十九日
展示解説　五月十三日・二十日、六月十日

3　教育普及活動

自由に創作活動を楽しめるオープンアトリエ、各種教育プログラム、一般や高校生を対象にした実技と鑑賞の講座等、多彩な教育普及活動を実施した。また、休館中は創作室の機能を持ち出すなど、各種プログラムを実施した。

(1)　通常活動
①　美術なんでも相談
開館中随時
②　オープンアトリエ
開館中随時
③　造形遊戯室
開館中随時
④　教育プログラム
ア　概要説明「宮城県美術館の特色等の概要説明」
随時、団体の要望に応じて実施
イ　展示解説「学校等団体に向けたコレクション展、特別展の解説」
随時、団体の要望に対して実施
ウ　美術館探検「概ね十歳未満の来館者を対象に、美

術館施設を活用した丁寧に見る活動」

エ　美術探検「概ね十歳以上の来館者を対象に、コレクション展を活用した対話型の鑑賞活動」

オ　ワークショップ「学校団体等を対象に、創作室等で行う要望に応じた表現などの活動」

カ　建物見学「美術館施設の機能性を見学」
　　随時、団体の要望に応じて実施

キ　自主活動「自主的な鑑賞活動等」
　　随時、団体の要望に応じて実施

(2)　特別活動

①　公開講座

ア　実技ワークショップ

○「かたちをさがす（想像から逃げる）」
　会期　四月二十一日・二十三日

○「せんをさがす（意思を手繰る）」
　会期　五月十九日・二十一日

○「組み合わせる、料理するように」
　会期　六月十七日・十八日

イ　出張創作室

・大衡村ふるさと美術館
　会期　七月二十九日

・伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター
　会期　十月二十八日

・角田市市民センター
　会期　十二月十七日

ウ　どようびキッズ・プログラム
　毎月第一土曜日

○四月一日「北庭であそぶ日」

○五月六日「土とあそぶ日」

○六月三日「水とあそぶ日」

エ　出張キッズ・プログラム

・「山であそぶ日」
　会期　九月十七日
　会場　蔵王自然の家

・「海であそぶ日」
　会期　十月七日
　会場　志津川自然の家

②　美術講座

ア　まちなか美術講座
　会期　六月三日、八月二十六日、十一月二十五日、二月三日
　会場　東北工業大学一番町ロビー
　講師　美術館学芸員

イ　県民大学（美術館担当分）

○「リニューアル直前！コレクションに見る時代の風」
会期　六月十七日・十八日
講師　美術館学芸員

ウ　美術館講座
○「日本画」とは何か。
会期　五月二十一日・二十八日
講師　古田亮（東京藝術大学大学美術館教授）
荒井経（東京藝術大学大学院教授・日本画家）

③　学校との連携　※休館以降に実施
ア　アウトリーチ
会期　九月二十日、十月四日・十七日・二十四日、十一月十四日・十七日・二十一日・二十八日・三十日、十二月七日・十二日・二十一日

④　ハイビジョンギャラリー
上映日　毎週土曜日、日曜日、祝日
上映内容
令和五年
○四月「日本の巨匠たち その一、その二」
○五月「連作の魅力」「日本の巨匠たち その二」
○六月「十九世紀の画家たち」

(3)　特別展
①　関連事業
講演会「伊達政宗騎馬像と『杜の都・仙台』の確立」
会期　四月二十九日
講師　中武敏彦（仙台市博物館）

コレクション展示ギャラリー・トーク

(4)
①　ギャラリー・トーク
リニューアル休館に際し、「リニューアル直前！今見ておきたい○○」とした特集を組んだ。
ア　特集：山脇百合子
会期　四月二十二日
イ　特集：佐藤忠良
会期　四月二十九日
ウ　特集：ＧＵＴＡＩの作家たち
会期　五月六日
エ　特集：クレーとカンディンスキー
会期　五月十三日
オ　特集：洲之内コレクション
会期　五月二十日
カ　特集：日本の近現代美術
会期　五月二十七日
キ　特集：学芸員のおすすめ
会期　六月三日
ク　特集：山脇百合子

会期　六月十日

ケ　特集　日本画を中心に

会期　六月十七日

4　県民ギャラリーの運営

県民の創作活動の発表及び鑑賞の場を提供するため、県民ギャラリーを運営した。

5　美術に関する調査研究

美術館の事業を充実するため、その基礎となる調査研究を行った。

6　美術作品の収集、保存

優れた美術作品や資料の散逸・損傷・亡失を防ぎ、これらの作品等を後世に伝えるため、正確な基礎調査に基づいて、美術作品・資料の収集、保存を行った。

7　広報

休館後からは、これまで年四回発行していた「宮城県美術館ニュース」を、休館中限定号として、出張創作室や学校アウトリーチなど館外へ出向いて実施した事業のほか、工事の状況、収蔵品の引っ越しの様子など、休館中の美術館の活動の情報を掲載して発行した。

また、美術館ホームページや、X（旧ツイッター）を利用し、広報活動の積極的な推進に努めた。

8　刊行物の出版

「美術館年報／研究報告」を発行し、美術館活動の成果を公表した。

（四）文化財課

表彰関係

令和五年度地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞者

○桃生町樫崎法印神楽保存会（石巻市）

○熊野堂神楽保存会（名取市）

（五）東北歴史博物館

1　特別展

(1)「悠久の絆 奈良・東北のみほとけ展」

会期　四月十五日～六月十一日

〈関連行事〉

①　講演会

・「聖徳太子のこころ」

会期　四月十五日

講師　古谷正覚（法隆寺 管長）
・「奈良の名品 徹底解説」
会期　四月二十九日
講師　有賀祥隆（総監修 東北大学名誉教授）
・「鑑真和上と仏舎利と取経行脚僧」
会期　五月六日
講師　岡本元興（唐招提寺 長老）
・「一味和合と興法利生」
会期　五月十三日
講師　松村隆誉（西大寺 長老）
・「美術に見る奈良仏教の人と思想」
会期　五月二十日
講師　長岡龍作
監修　東北大学大学院文学研究科教授

②　ワークショップ
・「絵うちわまきワークショップ」
会期　五月五日

(2)「古墳をつくる人びと ―はにわ工人，ハジベ君！―」
会期　七月十五日～九月二十四日

〈関連行事〉

①　展示解説
会期　毎週日曜日
解説　東北歴史博物館職員

②　体験ワークショップ「はにわをつくってみよう！」
会期　七月二十二日・二十九日、八月五日・十二日

③　一日体験イベント
「八月二〇日は「は（八）に（二）わ（〇）の日！
れきはくはにフェス二〇二三」
会期　八月二十日

④　体験企画「はにわの甲冑を着てみよう！」
会期　九月二日・九日・十六日・十八日

⑤　関連イベント「クイズに挑戦！はにわマスター！」
開催日　九月十八日

2　パネル展

(1)「令和四年度宮城の発掘調査」
会期　八月二十九日～九月二十四日
主催　宮城県教育庁文化財課
共催　東北歴史博物館

(2)「海図で見る～東北の港の昔と今～」
会期　九月五日～九月十八日
主催　第二管区海上保安本部
共催　東北歴史博物館

3　館長講座

「東北グローバル考古学 part3
　　―いにしえから、今を考える―」

講師　東北歴史博物館長

第一回　「石器時代の経済学」
　会期　四月二十二日

第二回　「太古のアート：具象と抽象との間」
　会期　五月二十七日

第三回　「日本人・日本文化はどこから来たか」
　会期　六月二十四日

第四回　「教育と史跡：仙台城二の丸から」
　会期　七月二十二日

第五回　「隣の国と考古学１：サハリン」
　会期　八月二十六日

第六回　「隣の国と考古学２：韓国」
　会期　十一月二十五日

第七回　「北米先住民と開拓者の文化財保護」
　会期　一月二十七日

第八回　「縄文の思考・弥生の思考と現代」
　会期　三月二日

4　博物館講座

(1)　古文書講座

講師　東北歴史博物館職員

入門編
　会期　九月十日・二十四日・十月八日

中級編
　会期　十月二十九日、十一月二十六日、
　　一月十四日、二月十八日

(2)　史料講読講座

講師　東北歴史博物館職員

第一回　「「道中記」にみる江戸時代の旅①」
　会期　八月六日

第二回　「「道中記」にみる江戸時代の旅②」
　会期　九月三日

第三回　「「道中記」にみる江戸時代の旅③」
　会期　十月一日

(3)　民俗講座

講師　東北歴史博物館職員

第一回　「七歳の登拝 ―羽田のお山がけ―」
　会期　一月二十八日

第二回　「十五歳の水祝儀 ―切込の裸カセドリ―」
　会期　二月二十三日

(4) 考古学講座

第一回 「多賀城の資料① ―多賀城の機能―」
会期 三月三日

第二回 「多賀城の資料② ―多賀城周辺で行われた祭祀―」
会期 三月十日

(5) れきはく講座

講師 東北歴史博物館職員

第一回 「発掘された木製品を守る」
会期 一月十三日

第二回 「シルクロードへのいざない」
会期 一月二十日

第三回 「古代都市のようすと人々のくらし ―山王・市川橋遺跡から―」
会期 二月三日

第四回 「国防の第一線、『満洲』へ渡った子どもたち」
会期 二月十七日

第五回 「東北先史社会の交流・物流」
会期 三月九日

第六回 「『我田引水』―幻の農民文学―」
会期 三月十六日

5 体験教室

(1) 夏の体験教室

第一回 「縄文ポシェットを作ろう！」
会期 七月二十九日

第二回 「松川だるまの絵付けをしよう！」
会期 八月五日

第三回 「ミニ屏風を作ろう！」
会期 八月十二日

(2) 冬の体験教室

第一回 「レプリカを作ってみよう！」
会期 一月六日

第二回 「昔の絵具を作ってみよう！」
会期 一月八日

第三回 「とんぼ玉を作ろう！」
会期 一月十三日

第四回 「昔の絵具を作ってみよう！」
会期 一月二十日

6 展示解説

会期 随時

講師 東北歴史博物館職員

7　多賀城跡巡り

会期　五・六・九・十・十一月の主に第二・第四日曜日
（十一月は第二日曜日のみ）

講師　東北歴史博物館職員

8　民話を聞く会

会期　五月二十一日・七月十六日・九月十七日・十月十五日

語り　多賀城民話の会・利府民話の会

9　体験イベント

(1)「秋の〝見〟覚まるかじり博物館二〇二三」

会期　十月七日

(2)「冬も元気にはくぶつかん！二〇二四」

会期　二月十日

10　調査研究

歴史・文化に関する分野を対象とし、東北全体を視野に入れた調査研究活動を展開して、その成果を定期的に公開した。

三　（公財）宮城県文化振興財団

（平成四年十月一日設立　理事長　阿部　正直）

1　文化芸術に係る鑑賞及び参加の機会の提供並びに情報の発信

(1)　鑑賞機会の提供

イ　東京エレクトロンホール宮城における鑑賞及び参加の機会の提供

①　宮城県文化振興財団創立三十周年記念
フジコ・ヘミング　ピアノソロ・コンサート
会　期　六月十一日
会　場　東京エレクトロンホール宮城
曲　目　リスト　パガニーニ大練習曲第三曲
「ラ・カンパネラ」ほか
出　演　フジコ・ヘミング

②　宮城県文化振興財団創立三十周年記念
笑いイチin仙台
会　期　六月十八日（二回公演）
会　場　東京エレクトロンホール宮城
内　容　コント、漫才
出　演　サンドウィッチマン　ほか

③　宮城県文化振興財団創立三十周年記念公演
松竹大歌舞伎
会　期　七月十五日（昼夜二回公演）
会　場　東京エレクトロンホール宮城
演　目　鬼一法眼三略巻「菊畑」
新古演劇十種の内「土蜘」
出　演　尾上松緑　ほか

④　宮城県文化振興財団創立三十周年記念
笑いの芸術　野村万作・萬斎狂言公演
会　期　十月二十七日
会　場　東京エレクトロンホール宮城
演　目　狂言「墨塗」「魚説法」「棒縛」
出　演　野村万作、野村萬斎　ほか

⑤　十三代目市川團十郎白猿襲名披露巡業
会　期　十月二十八日（昼夜二回公演）
会　場　東京エレクトロンホール宮城
演　目　十三代目市川團十郎白猿襲名披露「口上」、
歌舞伎十八番の内「毛抜き」ほか
出　演　市川團十郎　ほか

⑥
ディズニー・オン・クラシック
まほうの夜の音楽会
会　期　十一月四日
会　場　東京エレクトロンホール宮城
曲　目　美女と野獣　ほか
出　演　オーケストラ・ジャパン　ほか

⑦
第十回 定禅寺フォトコンテスト展
会　期　十二月十一日～十七日
会　場　東京エレクトロンホール宮城
内　容　宮城県文化振興財団賞「凛として」　志田伸一
　　宮城県芸術協会賞「踊る指先」　斎藤　清
応募数　全百三十点

ロ　地域文化会館との共催事業

①
かくだ田園ホール寄席「十一代目桂文治独演会」
会　期　五月二十日
会　場　かくだ田園ホール
演　目　落語「ラーメン屋」「源平盛衰記」ほか
出　演　桂文治、桂空治

②
パリ管弦楽団 ブラス・クインテット
会　期　六月二十七日
会　場　仙南芸術文化センター
曲　目　クロード・ル・ジュヌ歌曲集「春」より
　　〝春はまためぐりくる〟ほか
出　演　パリ管弦楽団 ブラス・クインテット

③
航空自衛隊航空中央音楽隊コンサート二〇二三
会　期　七月九日
会　場　多賀城市民会館大ホール
曲　目　J・Pスーザ「自由の鐘」、
　　Wシューマン「チェスター序曲」ほか
出　演　航空自衛隊航空中央音楽隊

④
七ヶ浜町町政施行六十五周年記念公演
仲道郁代スペシャル・コンサート
～若き俊英と紡ぐブラームスの世界～
会　期　九月十日
会　場　七ヶ浜国際村ホール
曲　目　ブラームス ヴァイオリン・ソナタ第一番
　　ト長調「雨の歌」作品七十八　ほか
出　演　仲道郁代（ピアノ）
　　岡本誠司（バイオリン）

上村文乃（チェロ）

⑤ 結成七十年記念イ・ムジチ合奏団日本ツアー名取公演

会　期　十月一日

会　場　名取市文化会館 大ホール

曲　目　ヴィヴァルディ バイオリン協奏曲集「四季」
パッヘルベル「カノン」ほか

出　演　イ・ムジチ合奏団

⑥ まほろばお好み演芸会「林家たい平落語会」

会　期　十月十五日

会　場　まほろばホール

演　目　落語「味噌豆」「禁酒番屋」
丸一小助小時太神楽曲芸 ほか

出　演　林家たい平、林家さく平、丸一小助小時

(2) 参加する機会の提供

① みやぎアートファミリアの日
～子どもが主役のワークショップ～

会　期　九月二日・十六日、十月十五日

会　場　東京エレクトロンホール宮城

講　師　六華亭遊花、石川かおり、赤井優也

内　容　落語ワークショップ、ペンや布で描いて作るアートなエコバッグ、エアプランツで作るグラスインテリア

対　象　小学生から大人まで

(3) 文化芸術に係る情報の収集及び提供

① ホームページの管理運営
ホームページ等を活用し、県民に文化施設、文化団体の状況及びその催事等の情報を提供した。

② 情報提供事業
自主事業の見どころなどを掲載したダイレクトメールを送付した。

(4) 文化芸術活動に係る人材の育成及び体験機会の提供

① 文化芸術ボランティア育成事業

会　期　通年

会　場　東京エレクトロンホール宮城

内　容　鑑賞事業におけるボランティア業務
（チラシ配布、会場案内等）

②音楽アウトリーチ事業
会　期　十二月二十日～二月二十八日
会　場　県内福祉施設　ほか
講　師　ムジカノヴァ、杜の弦楽四重奏団、
　　仙台チェンバーアンサンブル　ほか
内　容　生の芸術に触れる機会が少ない福祉施設を
　　中心に、鑑賞の機会を提供した。

③文化庁受託事業「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」
会　期　九月七日～一月二十九日
会　場　県内の小中学校及び支援学校四十六校
講　師　和太鼓アトア、ほうねん座　ほか
内　容　東日本大震災により甚大な被害を受けた地域の子供たちが、文化芸術に触れて心を潤す事業において、連絡調整業務や経理業務を行った。

④鑑賞入門講座
イ　松竹大歌舞伎プレセミナー
会　期　七月七日
会　場　東京エレクトロンホール宮城
講　師　葛西聖司
内　容　松竹大歌舞伎公演に先駆け歌舞伎の演目の見どころを解説（日本人対象）

ロ　笑いの芸術「野村万作・萬斎　狂言公演」プレセミナー
会　期　十月十三日
会　場　東京エレクトロンホール宮城
講　師　石田幸雄
内　容　「野村万作・萬斎　狂言公演」の見どころの解説、基本的な演技の体験

⑤ジュニアジャズミーティングinみやぎ二〇二三
会　期　九月十日
会　場　東京エレクトロンホール宮城
出　演　石巻ジュニアジャズオーケストラ
　　「スウィング・リバティ・パイレーツ」、
　　八木山バンドサークル「夢色音楽隊」ほか

(5)文化芸術の振興及び支援
①第四十七回東北現代工芸美術展
会　期　六月九日～十四日

会　場　せんだいメディアテーク
共　催　（一社）現代工芸美術家協会東北会、
（株）河北新報社

②　東北・北海道芸術文化団体協議会創立五十周年記念シンポジウム
会　期　七月十四日
会　場　仙台国際センター
共　催　東北・北海道芸術文化団体協議会

③　第五十一回宮城県おかあさん合唱祭
会　期　七月二十二日
会　場　日立システムズホール仙台
共　催　宮城県おかあさん合唱連盟

④　第七十五回全日本合唱コンクール宮城県大会
会　期　八月二十七日
会　場　名取市文化会館
共　催　宮城県合唱連盟

⑤　二〇二三仙台オペラ協会第四十七回公演「ドン・ジョヴァンニ」
会　期　九月十八日～十九日
会　場　日立システムズホール仙台
共　催　（一社）仙台オペラ協会

⑥　第六十回宮城県芸術祭
会　期　九月二十三日～三月十七日
会　場　せんだいメディアテーク　ほか
共　催　（公社）宮城県芸術協会

⑦　第四回杜のみやこ工芸展
会　期　十一月八日～十二日
会　場　ＴＦＵギャラリーミニモリ
共　催　（公社）宮城県芸術協会、
（公財）河北文化事業団、
（株）河北新報社

⑧　第二十六回みやぎ県民文化祭
会　期　十一月十一日～十二日
会　場　美里町文化会館、
美里町トレーニングセンター
共　催　宮城県文化協会連絡協議会

⑨　第六十九回松島芭蕉祭並びに全国俳句大会
会　期　十一月十二日
会　場　松島町瑞巌寺本堂　ほか
共　催　松島町、宮城県俳句協会

(6)　文化芸術活動支援事業

①　文化団体等支援事業　九件（上期三件、下期六件）

②　文化団体等震災復興支援事業

四件（上期一件、下期三件）

③ 文化団体等人材育成支援事業
八件（上期三件、下期五件）

④ 文化団体等地域連携支援事業　二件（下期二件）

⑤ 名義後援事業

(7) 文化芸術活動に係る国際交流の推進及び支援

① 歌舞伎鑑賞講座

会　期　七月八日

会　場　東京エレクトロンホール宮城

講　師　深澤昌夫（宮城学院女子大学教授）

内　容　県内に在住する留学生等外国人に対し、日本の伝統文化である歌舞伎の理解を深めていただくため、入門講座を開講した。

(8) 東京エレクトロンホール宮城管理運営業務

① 会館全体の管理運営。施設の使用許可申請の許可及び利用料金の徴収・収納　ほか

② （公社）全国公立文化施設協会、同東北支部、宮城県公立文化施設協議会に関する業務

四　（公財）慶長遣欧使節船協会

（平成四年一月二十二日設立　代表理事　一力　雅彦）

1　ミュージアム管理事業

宮城県から受託するミュージアムの管理運営のほか、法人の所有する資料物や学芸員等による研究成果の有効活用に努め、博物館相当施設としての機能充実を図った。

2　企画事業

展示等リニューアル工事に伴い、令和四年十一月一日より長期休館となったが、休館期間中に幅広い世代の方に満足していただけるよう、市内の博物館等の関係団体と積極的に連帯を図りながら、出張展示や出張講座など各種企画事業を積極的に開催した。

(1)　第三十回サン・ファン祭り（共催事業）

期　日　五月二十一日

会　場　石巻市サン・ファン・バウティスタパーク

内　容　復元船の進水を祝い、地域活性化を目的に例年五月下旬に開催している。コロナ禍の影響でオンラインや時期を変更しての開催となっていたが、新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置づけが五類へ移行され、四年ぶりに制限のない通常開催となった。館内はリニューアル工事に伴い休館中のため、同パークのみで開催した。

(2)　第四回「伊達政宗の黒船」サン・ファン号を未来へつなぐコンクール

会　期　七月上旬～十二月二十七日

会　場　マルホンまきあーとテラス

内　容　全国の小中学生を対象に「絵画部門」「デザインマーク部門」の二部門からそれぞれのテーマに沿った作品を募集し、応募作品全百四十九点を展示した。

(3)　石巻市震災遺構門脇小学校・サン・ファン館合同企画展「災害と再生―海のまちと希望の帆船二〇二三―」

会　期　七月十五日～九月二十四日

会　場　石巻市震災遺構門脇小学校

内　容　サン・ファン館の被災から復興までの取組みをパネルや被災資料を通して伝えるとともに、海のまち石巻で育まれた帆船文化を紹介するための企画展を開催した。

(4)　出張企画展示「三陸・牡鹿のトリビア展」

会　期　十月一日

会　場　石巻港大手ふ頭

内　容　第二十二回港湾感謝祭の官公庁・港湾関係企業ＰＲコーナーにおいて、三陸・牡鹿の風土をテーマとした企画展示を開催した。また、サン・ファン館のシンボルマークやカラー、リニューアル情報に関するパネルを紹介し、サン・ファン館の活動理念や取組みについて広く発信を行った。

(5)

サン・ファン歴史講座「徳川家康と大航海時代」

会　期　十一月十九日

会　場　マルホンまきあーとテラス

内　容　サン・ファン館の平川新館長を講師に令和五年ＮＨＫ大河ドラマの主人公でもある徳川家康をテーマとし、当時の世界情勢や家康が行った海外政策について紹介する歴史講座を開催した。

令和五年度　芸術選奨

●美術（工芸）

岩井　純（いわい　じゅん）

昭和二十三年生まれ。

仙台で築窯して四十七年の長きにわたり研究を行い、六華天目という独自の作風を確立した氏は、数多くの作品を意欲的に発表し、様々な公募展で入選を果たしてきただけでなく、平成六年には第一回目の日・韓陶芸交流展を主催したほか、平成十五年にはイタリアで個展を開催するなど、国内にとどまらず国外においても活発な活動を続けてきた。

令和四年度は、十月に個展を開催し、制作デモンストレーションを行ったほか、令和五年一月には仙台市からの要請により、G7仙台科学技術大臣会合の記念品制作を手掛けた。

陶芸家として国内外で幅広く活動してきた豊かな経験を持ち、今なお表現の追求を続けながらも、陶芸制作によるリハビリ支援など社会貢献にも積極的に取り組んでおり、これからも県内の芸術活動に大きな影響を与えていくことが期待される。

●美術（書）

小日向　慶可（こひなた　けいか）

昭和三十年生まれ。

星弘道氏に師事し、伝統書を主軸に数々の書道展に意欲ある優秀な作品を発表しており、平成十三年に河北書道展で宮城県知事賞、翌年は同展で河北賞、平成十六年の宮城県芸術祭書道展で宮城県知事賞、平成二十八年の改組第三回日展に入選など、多くの実績を残してきた。

令和四年度は、第九回日展に入選しており、文字そのものが持つ美しさを引き出そうとたゆまぬ努力と探求心を持って書に向き合う氏は、今後の作品発表も注目に値する書家の一人である。

また、氏は、後進の指導にも熱心に取り組んでおり、基礎をしっかり学んでもらいながらも一人一人の個性を生かそうと個人に寄り添った丁寧な指導を行い、教室には三十年以上通う者もいるなど、書道の魅力の普及にも大いに貢献している。

今後も優れた作品の発表と熱心な後進の育成により、本県を代表する書家の一人として書道界の発展に寄与することが期待される。

●美術（写真）

海老名（えびな）　和雄（かずお）

昭和十八年生まれ。

氏の作品は、河北写真展やニッコールフォトコンテスト、宮城県芸術祭などで受賞するなど、これまで高く評価されてきた。平成二十七年には第二十二回酒田市土門拳文化賞で奨励賞を受賞し、令和二年には同賞の土門拳文化賞の受賞を果たしている。

令和四年に開催した個展「命の行進・・祈る・・」で発表された作品は、津波犠牲者の供養のために南相馬市の僧侶が主催した慰霊行脚を写したものであり、氏の被写体に対する共感と尊敬が見て取れる。

また、氏は長きにわたり「ニッコールクラブ仙台支部」に所属し、自身の研鑽に努めるのみならず、メンバーや後輩の技術力向上を支援し、現在も同支部の顧問として指導を行っている。

「震災の犠牲者を忘れないでほしい」との願いを込めて精力的に活動を続ける氏の姿勢は写真家のみならず多くの人々の心を打ち、これからも被災地と作品を見る人との架け橋となることを期待したい。

●文芸

佐藤（さとう）　厚志（あつし）

昭和五十七年生まれ。

平成二十九年に「蛇沼」が新潮新人賞を受けてデビューし、令和二年には「境界の円居」で仙台短編文学賞大賞を受賞、令和三年には「象の皮膚」で三島由紀夫賞候補となるなど、着実に実績を積み重ねてきた。

令和四年度に月刊誌に発表した「荒地の家族」は、氏として初めての芥川龍之介賞候補作となり、更に見事受賞を果たした。また、その作品の発表から一か月後には県紙である河北新報紙上で「常盤団地第三号棟」の連載を開始するなど、間を置かず作品発表と功績を得ていることは、氏の小説家としての成長・成熟の著しさを物語るものであり、今後の活躍も大いに期待できる作家である。

また、各文芸誌や雑誌への寄稿も増え、東日本大震災関連のテレビ番組・報道番組等への出演などもしていることから、今後も宮城を代表する作家として幅広い活躍を通し震災の記憶や被災地の今を伝えていくことが期待される。

●音楽

西沢　澄博（にしざわ　きよひろ）

昭和五十四年生まれ。

仙台フィルハーモニー管弦楽団の首席オーボエ奏者としての活動をベースに、数多くのコンサートに出演するほか、平成二十九年に始まった東北放送の「日立システムズ エンジョイ！クラシック」でパーソナリティを務め、音楽の楽しさについて啓蒙する番組を担当するなど幅広い活動を展開している。

令和四年度は、仙台フィルハーモニー管弦楽団での活動のほかにも、管楽器アンサンブルの作品によるコンサートのプロデュース及び出演を行ったほか、オーボエリサイタルを開催し、委嘱作品という演奏上リスクの高い作品を作曲家に依頼し披露するなど、精力的に活動を行った。

また、指導者としての活動も目覚ましく、大学や団体など様々な場で指導を行い、優秀な弟子を輩出している。

今後も演奏活動を通じて楽器の魅力を伝え、音楽の素晴らしさを広めていくことが期待される。

●演劇

伊藤　み弥（いとう　みや）

震災復興支援団体に勤務しながら、これまでフリーランスの立場で舞台演出活動を行っている。

演出家として、ストレートプレイから歌劇まで幅広く活躍しており、さまざまな集団において良質な作品を残している。

令和四年度には、故郷の閖上を題材にした演劇「猫と縁側」仙台公演のプロデューサーを務めたほか、仙台オペラ協会「コジ・ファン・トゥッテ」の演出助手、ドレミファピアチェーレ主催オペレッタ「だんまりくらべ」の演出、宮城野区文化センター主催ワンコインシアター「道の奥には」の演出など幅広く活躍しており、「道の奥には」の演出においては、小説をそのまま舞台化するという優れた構想力を発揮した。

今後も、舞台演出のみならず幅広い分野での活躍と、宮城の舞台芸術の更なる振興への貢献を期待したい。

芸術選奨新人賞

●美術（洋画）

山内（やまのうち）　文貴（ふみたか）

昭和五十八年生まれ。

ポップな現代アートの作家であり、平成二十七年に若手作家のための公募制の美術賞「シェル美術賞」展（令和四年より「Idemitsu Art Award」と改称）において、審査員奨励賞を受賞している。その後も個展を中心に作品を発表しているほか、平成二十九年以降は、「新現美術協会展」にも意欲作を毎年発表するなど、活発な活動を続けている。

令和四年度は、県内において個展「山内文貴展〝エジプティック・アクセス〟」を開催したほか、東北芸術工科大学で開催されたグループ展への参加、新現美術協会展での作品発表など、精力的に活動しており、その姿勢は若年層への指針となるものである。

近年は、絵画制作のみならず、音楽アプリのサブスクリプションサービスでの楽曲配信（ギター弾き語り等）も始めるなど、マルチアーティストとしての活動の広がりも感じさせており、県内の若手芸術家に刺激を与える存在として、今後も意欲を持って活動を行い、より一層の活躍を期待したい。

●美術（彫刻）

佐野（さの）　美里（みさと）

昭和六十二年生まれ。

作品を自刻像（ポートレート）と位置づけ、その時々の自分自身を「犬」の姿で表現しており、作品制作を行う動機付けが等身大で、その作品は鑑賞者に訴えかける独創性がある。作品は、木の素材を生かし柔らかく曲線を基調としたフォルムに仕上げており、更に着彩を行うことで、ノミの彫り跡と独特な世界観が際立つ作りになっている。

令和四年度は、宮城県内で個展を二回開催したほかアメリカでも個展を開催しており、県内のみならず国境までも超えた多彩な活動を行った。

今後も、女性としてのパーソナリティを生かしたテーマを持ち、大小含め迫力ある作品を制作することで、立体造形の魅力を幅広く発信していくことが望まれる。

また、子供を対象としたワークショップの開催など、後進の育成にも取り組んでおり、今後も宮城県の彫刻文化の発展に寄与することが期待される。

●メディア芸術

鈴木（すずき）　竜也（りゅうや）

平成六年生まれ。

監督を務めた実写・劇映画の「バット、フロム、トゥモロー」が、ＰＦＦフィルムアワード二〇一六で入選。コロナ禍を機に独学でアニメーション技術を習得し、令和三年に一人で制作した「ＭＡＨＯＲＯＢＡ」は、国内各地の映画祭で高い評価を得た。

令和四年度は、「無法の愛」を発表し、さまざまな映画作品へオマージュを捧げつつ独特な画風とユーモアあふれる物語が評価され、第九回新千歳空港国際アニメーション映画祭など多数の映画祭でグランプリや準グランプリ、審査員特別賞などを受賞した。

氏は、その背景に豊かな映画的教養を備えつつも、全くの独学で習得したアニメーション表現によって唯一無二の個性を発揮しており、多数の受賞歴からも明らかなように、その作品は親しみやすさと同時に高い作家性を有している。

個人制作によるアニメーションは、大きな資本や文化的素地に限らず地方においても可能な分野の一つであり、その好例として県内の表現者に勇気を与える氏のこれからの更なる飛躍に期待したい。

宮城県芸術年鑑

第五十三巻

令和六年四月一日発行
限定四五〇部

編集・発行　宮城県環境生活部消費生活・文化課
仙台市青葉区本町三丁目八番一号
〒九八〇―八五七〇
電話　〇二二-二一一-二五二七（直通）

この芸術年鑑は四五〇部作成し、一部当たりの印刷単価は一、〇一二円です。